東醫學生會
雜誌紀念號

奮鬪之半年目次

東醫學生會
雜誌紀念號

奮鬪之半年目次

口繪

□創立委員……□學生懇親會……□血判狀

本欄

◎學生諸氏に檄す……高橋琢也（一）
◎學校新設の速進を祈る……法學博士　寺尾亨（三）
◎東京醫學專門學校の成立を希望する四個の理由……福本日南（五）
◎日本醫專紛擾經過錄……大角桂巖（九）
◎財團に對する寄附行爲……主幹　秋虎太郎（一五）
◎日本醫學專門學校……（一八）
◎紛擾眞相錄……（三七）
◎破壞より建設へ……（一三一）

雜錄

◎影と聲……四年　上村透（一五七）

◎都に殘れる友へ……二年馬詰嘉吉（一六一）
◎浮世の外から……三年迫田順一（一六六）
◎追憶……三年梶谷馨（一六九）
◎駒より牛へ……二年原三郎（一七一）
◎吾等の歩みと現代人士の胃の腑……二年高澤千里（一七四）
◎血涙錄……（三四）
◎血染歌……（四七）
◎スクラップ……（四八）
◎その前後……四年安部路人（八二）
◎調査係より……三年野家敬之（一〇九）
◎徵兵檢査……二年大出富吉（一一六）
◎縣主任としての私……三年杉山泰治（一二四）
◎去年今宵……二年原三郎（一二七）

會報

□謝恩辭……（一七五）　□入營者諸君を送る……（一七六）　□會計報告……（一七七）

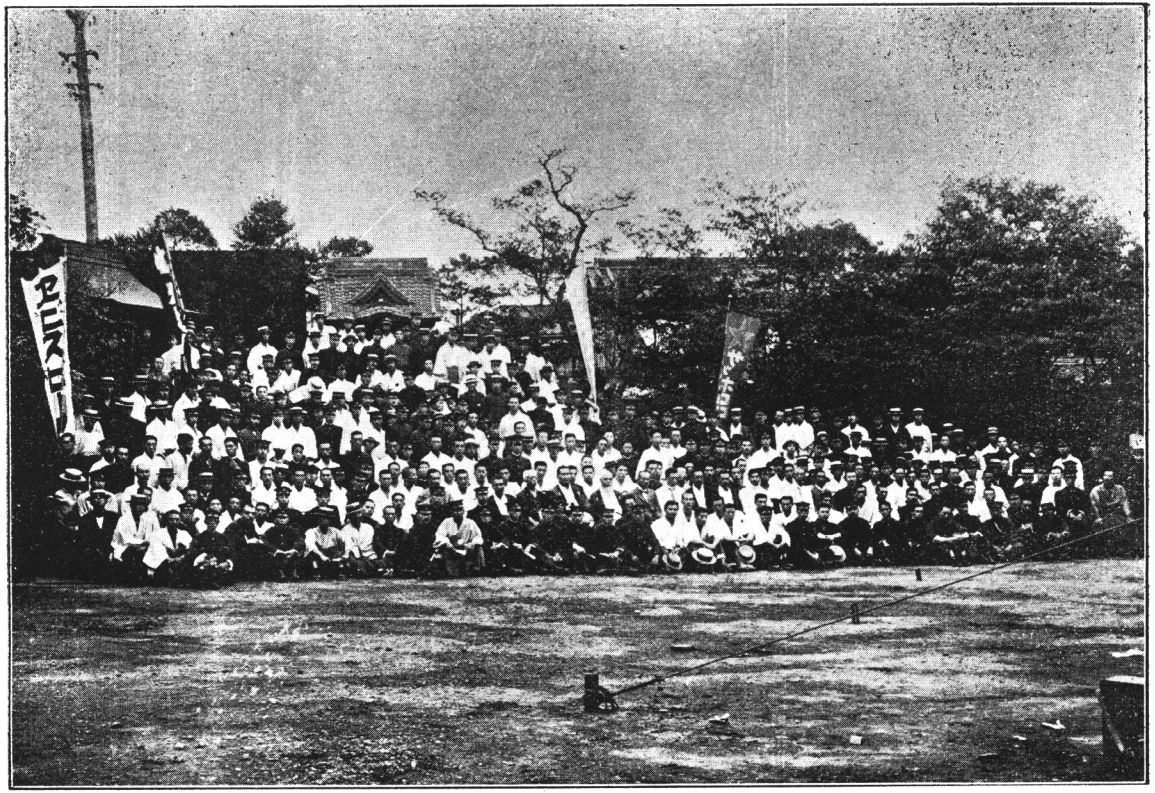
義ことの爲に責らるゝ者は福なり。

天國は即ち其の人の有なればなり。

福本誠氏　　寺尾亨氏

高橋琢也氏

秋虎太郎氏　　大角桂巖氏



東醫學生懇親會　（九月十一日向島サツポロビール庭園ニテ）

血判状

發刊之辭

『奮鬪之半年』は前日本醫學專門學校學生團活動の回顧錄なり。本號の使命は學生團を紀念するにありて、勝利の紀念を意味するものに非ず。何となれば、學生團の解團は勝利の結果にはあらずして、寧ろ東京醫學講習所學生會なる一新勢力を興し、更に一層の努力を以て成功の彼岸に達せんとする前程に外ならざればなり。既に學生團には、血涙錄及び、團報ありて、日々の經過を記錄せり、然れども其等は、草卒の間に上梓されたるものなれば、甚だ杜撰なるを免れず、然も最後まで完結するに至らざりき。吾人深く之を遺憾とし、茲に、血涙錄、團報を補ひて一雜誌に編纂せり。

過去を詳にするは、將來の發展に資せんが爲のみ、惟ふに、吾人の前途は實に遼遠なり。從つて、其の奮鬪も一段の覺悟を要すべし、本誌幸に士氣を鼓舞し覆轍を戒しむる一助とならば足れりと爾云。

大正五年十二月

東京醫學講習所開始の要概

本年五月十六日蹶然袂を連ねて退學し盟つて復校の意志を有せざる日本醫學專門學校生徒四百有餘名に對し之を一日も放浪せしむるに忍びず幾多社會人士の後援と殊に佐藤博士等の破格の同情とを得て茲に東京醫學講習所を設け學生焦眉の急を救ふ事を得たり尙學生當初の目的を貫徹せしめんが爲めに近く財團法人私立東京醫學專門學校を設立すべく其期に至る迄本講習を行ふものとす

大正五年十一月

當醫學講習所は醫學博士佐藤達次郎氏に一切の教務組織を請ひ大正五年九月十一日始業式を擧げ同博士監督の下に授業を爲しつゝあり

擔任教授氏名

倫理學	得能文	
獨逸語	文學士	小宮豐隆
仝上		道部順
同及化學		竹內作次郎
解剖學	醫學博士	井上通夫
同上	醫學士	平光吾一
生理學	醫學博士	井上達一
醫化學	醫學士	山川一郎
藥物學	醫學士	清水茂松
細菌學	醫學士	古屋芳雄
病理學	醫學博士	緒方知三郎
內科學	醫學博士	中濱東一郎

仝上	醫學士	田澤鐐二
仝上	醫學士	池上作三
外科學	醫學博士	佐藤達次郎
仝上	醫學博士	八代豊雄
仝上	醫學士	松井權平
仝上	醫學士	前田友助
產科學	醫學士	白木正博
婦人科學	醫學士	下平尙
眼科學	醫學博士	井上達二
仝上	ドクトル	須田卓爾
法醫學	醫學士	淺田一
衛生學	醫學士	古屋芳雄
精神病學	醫學博士	三宅鑛一
小兒科學	醫學士	清水茂松
皮膚病學	醫學士	栗本定次郎

耳鼻咽喉科學　醫學博士　千葉眞一

臨床講義

外科臨床講義　本郷順天堂病院

內科臨床講義　麴町回生病院

學生數

卒業受驗生　四拾貳名

四學年　八拾八名

三學年　壹百壹名

二學年　六拾九名

一學年　壹百拾八名

合計四百拾八名

顧問

醫學博士　中濱東一郎

醫學博士男爵　佐藤進

設立者

（東京醫學專門學校創立委員）

醫學博士
文學博士　森林太郎

大角桂巖

東京醫學專門學校創立委員長
東京醫學講習所監督　正四位　高橋琢也

福本誠

法學博士　寺尾亨

東京醫學講習所主幹　秋虎太郎

協賛員

醫學博士　入澤達吉君
衆議院議員　犬養毅君
醫學博士　石原久君
醫學博士　林春雄君
衆議院議員　板東勘五郎君
林學博士　本多靜六君
貴族院議員　頭山滿君
衆議院議員　岡喜七郎君
衆議院議員　岡崎國輔君
仝　上　小川平吉君
醫學博士　緒方正規君
衆議院議員　大竹貫一君
奥野市次郎君

法學博士　小山温君
貴族院議員　小此木信六郎君
ドクトル　大澤謙二君
醫學博士　大澤岳太郎君
醫學博士　和田彦次郎君
理學博士　和田垣謙三君
貴族院議員　渡邊脩君
法學博士　川原茂助君
衆議院議員　田川大吉郎君
仝　上　中橋德五郎君
仝　上　中尾雄君
海軍中將　中村彌六君
林學博士　永井潛君
醫學博士

藥學博士 理學博士	田中文藏君
	長井長義君
	上埜安太郎君
醫學博士	栗本東明君
仝 上	山極勝三郎君
衆議院議員	松田源治君
衆議院議員	古谷久綱君
仝 上	小池靖一君
同 上	江藤哲藏君
理學博士	寺尾壽君
醫學博士	青山徹藏君
仝 上	阿久津三郎君
衆議院議員	綾部惣兵衛君
	佐藏佐君
醫學博士	佐野彪太君

衆議院議員	齋藤珪次君
法學博士	氣賀勘重君
	三輪田元道君
文學博士	三宅雄二郎君
法學博士 貴族院議員	水野練太郎君
衆議院議員	箕浦勝人君
仝 上	島田三郎君
仝 上	廣岡宇一郎君
醫學博士	弘田長君
衆議院議員	望月圭介君
貴族院議員	關清英君
衆議院議員	杉山四五郎君
醫學博士	三輪信太郎君
仝 上	宮本淑君
仝 上	三田定則君

貴族院議員 山本達雄君
前農商務大臣 長嶋鷲太郎君
衆議院議員 元田肇君
法學博士 若宮正音君
衆議院議員 股野琢君
前遞信大臣 秦豊助君
帝室博物館總長 牧田環君
衆議院議員 山田直矢君
三井鑛山會社役 山中隣之助君
重 奥保鞏君
仝 上 馬屋原彰君
東洋滊船會社取締役 船越光之亟君
元帥、伯爵 土方久元君
貴族院議員 大谷靖君
貴族院議員男爵 村上敬次郎君
伯爵 田口謙吉君
濟生會理事 中邨元嘉君
貴族院議員男爵 土井順之助君
判事 吳文聰君
海軍主計監 和田國次郎君
前統計審査官 佐々木和策君
帝室林野管理局技師林學士 東久世通敏君
仝上林學士 鹽澤健君
伯爵 南部光臣君
帝室林野管理局技師林學士 長崎省吾君
帝室林野管理局長 原安太郎君
宮中顧問官 藤原銀次郎君
貴族院議員 池田成彬君
王子製紙會社專務取締役 高地安三郎君
三井銀行專務取締役 甲賀宜政君
判事 造兵局技師

東京控訴院長　富谷鉎太郎君
前行政裁判所評定官　松浦良春君
勸業銀行總裁　志村源太郎君
仝副總裁　柳谷卯三郎君
仝監査役　水野勝興君
山林局長　岡本英太郎君
仝技師　松波秀實君
林學博士　白澤伴春君
貴族院議員男爵　武井守正君
貴族院議員　谷森眞男君
井上角五郎君
樞密顧問官子爵　金子堅太郎君
田村定馬君
堀內慶一君
高島北海君

衆議院議員　岡田治衛武君
岩崎勳君
原敬君
三井合名會社重役　有賀長文君
貴族院議員男爵　肝月兼行君
海軍中將　倉富勇三郎君
帝室會計審査局長　中島久萬吉君
貴族院議員男爵　中田敬義君
朝吹英二君
鑛山局長　磯部正春君
工學博士　小柴保人君
和合英太郎君
貴族院議員男爵　高橋是清君
前大藏大臣　尼子四郎君
貴族院議員男爵　藤井包總君
陸軍中將

岡田來吉君
山鷹狩元凱君
衆議院議員
荒川五郎君
沖馬吉君
早速鎭藏君
小澤俊夫君
下田次郎君
植木豊吉君
久留只一君
檀上新吉君
原嘉道君
法學博士
辯護士
佐々木愼四朗君
小田良治君
安藤謙介君
横濱市長
安部幸之助君

茂木惣兵衛君
原富太郎君
神奈川縣知事
有吉忠一君
江木千之君
貴族院議員
工學博士
古市公威君
宮中顧問官
佐藤正君
陸軍少將
和田維四郎君
橋本圭三郎君
貴族院議員、前農商務次官、寶田社長
加藤恒志君
貴族院議員
安樂兼道君
貴族院議員
石渡敏一君
貴族院議員
河村讓三郎君
貴族院議員
南弘君
貴族院議員
古賀廉造君
貴族院議員
杉田定一君

男爵	由布公平君
第百銀行頭取	加藤正義君
	大倉喜八郎君
內務大臣男爵	池田謙三君
海軍大臣	村井吉兵衛君
海軍大將	後藤新平君
海軍次官	加藤友三郎君
	鈴木貫太郎君
貴族院議員	桂二郎君
樞密院顧問官	江原素六君
赤十字社長子爵	花房義質君
貴族議院員男爵	小澤武雄君
赤十字副社長	松平乘承君
貴族院議員子爵	波多野敬直君
宮內大臣男爵	大森鐘一君
皇宮太夫男爵	

地方局長	渡邊勝三郎君
土木局長	塚本清治君
衛生局長	中川望君
法學博士	花井卓藏君
子爵	秋元興朝君
	箕田長三郎君

以上 一六七名

大正五年十二月十六日迄承諾順

後援會員名簿

頭山滿
前代議士 福本誠
法學博士 寺尾亨
早大教授 內ヶ崎作太郎
同 安部磯雄
同 永井柳太郎
東洋大學教授 高島鎌一郎
慶大教授 向軍治
醫學博士 近藤次繁
貴族院議員 室田義文
海軍少將 竹內作太郎
市會議員 辯護士 笠原文太郎
市會議員 伊藤仁太郎

同 陸軍省囑托 編輯長 秋虎太郎
日本醫界社長 朝比奈知泉
實業世界主筆 土屋清三郎
廿世紀社長 青柳有美
藝備醫界主筆 森川國南
代議士 三共製藥會社々員 尼子四郎
ドクトル 中村千代秋
府會議長 岡部嘉一郎
辯護士 多納榮一郎
代議士 齋藤孝治
同 藏園三四郎
綾部惣兵衛

工學士　小川東吾
醫學士　田村光顯
文學士　大町芳衛
曙新聞社理事　金原善三郎
肛門病院長　谷泉
代議士　江間俊一
雄辯社長　野間清治
ルーテル教會　山內直丸
前沖繩縣知事　高橋琢也
中央新聞社　伊藤龜雄
代議士　田村順之助
慶大教授法學博士　氣賀勘重
青山病院長　高木壬太郎
辯護士　菊池正夫
代議士　上野安太郎

文學博士　三宅雄二郎
府會議員　長谷川吉次
本區鄉務委員　益池龍之助
辯護士　柏原與次郎
同　今村力三郎
高輪中學校長代議士　瀧口了信
區會議員　吉川仙太郎
世界新聞社長　秋田清
府會議員　佐藤信郎
細谷鎌太郎
厩橋病院長　岩崎周作
警視廳醫務課長醫學士　國澤健雄
醫學士　森田正馬
回生病院長醫學博士　中濱東一郎
帝大教授巢鴨病院長　吳秀三

辯護士　高尾傳七
市府會議員　牧野靜男
辯護士法學士　石川騰彌
法學博士　戸水寛人
文學博士　吉田熊次
代議士　横田千之助
　　横田稔
青山腦病院長ドクトル　齋藤紀一
醫學士　白河彌源太
辯護士　藤喬毅
朝日新聞記者　半井桃水
醫學士　天本治
　　今立裕
辯護士　關幸太郎
　　大内重美
　　繁田安吉
　　山口健次郎
　　尾本安次郎
　　尾竹染吉
醫學博士　南大曹
　　諸井恒平
代議士　鈴木梅四郎
同　樋口秀雄
　　水野練太郎
　　杉山四五郎
前代議士辯護士法學士　熊谷直太

大正五年六月

學生名簿

（大正五年十二月調査）

北海道

笹川　政治（四）
大岩　保（四）
蛯名　勝雄（四）
和田　馨（三）
國谷　一武（三）
竹本　正（一）

岩手縣

佐々木政雄（三）
菊池　秋水（三）
小原　一二（二）
折居　杲彌（一）
加藤　敬一（一）

秋田縣

佐藤　淳三（四）
土田　宗朗（三）
直崎　政次（二）

山形縣

武田　幸治（舊）
上村　透（四）
佐藤　富士（四）
小柴健治郎（三）
杉山　泰治（三）
齋藤　健吉（二）
青山　吉邦（二）
鈴木　三悅（一）
小玉　文治（一）
後藤　靜男（一）
佐藤總之助（一）
高橋　進（一）
大川良一郎（一）
加藤　諭（一）
市川　照（一）
門脇　良德（一）
安達　五郎（一）

宮城縣

佐々　一雄（舊）
鈴木　達夫（舊）
後藤藤兵衛（舊）
小野寺重敏（四）
堀籠俊三郎（三）
管野憲一郎（三）
野家　敬之（三）
佐藤憲二郎（二）
梅澤　三郎（二）
大橋　虎太（一）
渡邊　良（一）
木幡義三郎（一）
佐藤　五郎（一）

福島縣

山下宗太郎（舊）
佐倉　鐵馬（舊）
小川　豊九（四）
金成　忠義（四）

宮城　修三（四）
大木　一夫（三）
屋形　浩（三）
高澤　千里（二）
草野　道平（二）
松井　元（二）
上遠野英助（二）
野尻　芳松（一）
白石　秀夫（一）
星高　輝（一）

茨城縣

篠塚　篤郎（舊）
大越平治郎（舊）
小川　東洋（四）
安村　政明（四）
松岡　信篤（四）
田所　耕一（四）
關谷斐三郎（四）
柴沼　徹（四）
大森　彦馬（三）

柳橋雅樂郎（三）
岡田　竹（三）
石井　清見（二）
岡本　憲法（二）
高田好之助（二）
寺澤　章（二）
淺野　秀雄（二）
本間　勝男（一）
柴　孝（一）
張替　實（一）

栃木縣

中山　隆治（舊）
松谷　正（四）
樋口　正（四）
藤平寛次郎（三）
坂本　廣藏（一）
藤田才三郎（一）

群馬縣

關根　恒司（四）
新井　五郎（三）

大出　富吉（二）
原三郎（二）
星野　新次（二）
樋田織次郎（二）
加賀美七郎（一）
加藤正一郎（一）
野澤　双二（一）
永井　誠夫（一）
齋藤眞四郎（一）

新潟縣

瀧澤　進（四）
平澤順一郎（四）
高桑　武夫（四）
關矢　寛一（四）
渡邊　貞（三）
高頭　一郎（三）
塚田英太郎（三）
遠藤　淺香（三）
早川　一郎（二）
柄澤　武雄（二）

井上　仁平（一）
古川　有年（一）
津端　巧（一）
高橋　金一（一）
月岡　要初（一）
高尾三九郎（一）
津端　卓也（一）

長野縣

大森　興仁（四）
吉越　悅喜（四）
飯森　喜放（四）
清水　兩助（三）
大澤　文雄（一）

埼玉縣

安部　達人（四）
成田　義英（四）
大澤　龍雄（四）
古川道之助（四）
西山　晴雄（三）
增田　貢（三）

中村德三郎（二）
明石　莊介（二）
原田　次郎（二）
星野　文郎（一）
赤尾　豐秋（一）
小澤　六三（二）
岡野　義三（一）

千葉縣

小谷　無逞（舊）
前田　眞（四）
石毛　貞治（三）
山村　清（三）
戸澤　成二（二）
土屋　政治（二）
安藤　英胤（二）
村田　文雄（一）
浦部　清一（一）
金親　費（一）
須田菊次郎（一）
戸村　達郎（一）

外島　鴻兒（一）

東京府

須藤　力三（舊）
酒井　敏雄（舊）
宮崎　喜一（四）
丸山　郁雄（四）
指田　一雄（四）
河村　廣一（四）
宇津木　斌（四）
春木　昇（三）
川目鐵太郎（三）
向井鎌次郎（三）
澁川達三郎（三）
諏訪　寛（三）
春日　龜吉（三）
吉澤　晁（二）
木ノ村龜吉（二）
石山　隆（二）
林　實（一）
三阪　亮雄（一）

津端　卓也（一）
林　謹爾（一）
高尾三九郎（一）
岡部　敢（一）
池田桃右衛門（一）
石原　重作（一）
深見　伯雄（一）
若林　捷三（一）
恒川　良（一）

神奈川縣

新井　亮（舊）
藤牧　玄雄（舊）
土志田政治（四）
白木　武（四）
横山　慶（三）
菱沼　良雄（一）
關口榮次郎（一）
池澤　誠之（一）

山梨縣

渡邊　徹（舊）

武藤　直哉（四）
菊島　巧（三）
若月　美明（三）
藤原　彦麿（三）
奥秋　儀一（一）
臺原　臻（一）
丸茂　俊懋（一）

靜岡縣

山本　敬（舊）
澤　慶一（舊）
峰野　康（四）
水野　宗雄（四）
鈴木　光雄（四）
一木　信平（二）
河村　平馬（一）
肥田　文哉（一）

富山縣

桃井　文伯（舊）
城戸　正治（四）
吉田　清敏（四）

高畠　秀勝（四）
金木　昇（四）
山崎　孝（四）
石川内藏之助（三）
村上　清作（三）
木村　喬（三）
脇坂　孝治（一）
林　禮（一）
桃井　周哲（一）

岐阜縣

長尾　正雄（三）
杉本　完（三）
菱川　弘（二）

石川縣

辻　常次（舊）
新田修一郎（四）
宮野　悌三（三）
清水六三郎（三）
本保　秀（三）
今井　良平（二）

木村　孫三（一）
舘　修　藏（一）
久保　清（一）

愛知縣

鬼頭　近雄（舊）
横井　純二（四）
中川　進（四）
林　醇治（四）
原田　五助（四）
石川　光雄（三）
前田燐之助（三）
長尾　正雄（三）
山田　純二（三）
兒玉　芳男（三）
中垣　昌一（二）
萱生　肅（一）
太田　英雄（一）
丹羽　純二（一）
竹本晉二郎（一）

福井縣

岡部　敢（舊）
長谷川有種（四）
小堀　岩藏（二）
長谷部　見（一）

滋賀縣

川井　誠一（三）

三重縣

渡邊　正一（舊）
武野　喜一（四）
家崎繁之助（四）
久保倉引孝（三）
小林辰次郎（三）
伊藤　尙一（二）
高月　駒吉（二）
津田信四郎（二）
田所　奬（一）

京都府

佐藤理兵衛（四）
中川　兵二（三）

大阪府

柏村　和雄（舊）
原田　精一（三）
橋本　實尾（一）
伊藤　政治（一）

兵庫縣

大森　木（四）
尾崎　官一（三）

和歌山縣

柿平　正聲（舊）
伏山　紀（三）
南　善太郎（一）

岡山縣

青山　豪一（舊）
山本仁（浪學）
梶谷　馨（三）
木谷　恒（三）
小坂　襄（二）
馬越　亮（一）
大餐　良見（一）

鳥取縣

中本富太郎（舊）
多久俊（四）
山桝喜誠（四）
松本與美（三）
鎌谷國男（二）
足羽共之（二）

廣島縣

片岡巳代治（四）
渡邊司法（四）
森田豊（四）
小野誠司（四）
武井守一（四）
橋桓繁一（四）
野村司馬之助（四）
瀨尾陽（四）
井上章重（三）
藤本竹平（三）
戸田一二（三）
鳴戸鎌次郎（三）
長委三美（二）

佐々木篤行（二）
箕收靜衛（二）
藤中正（二）
荒瀨秀俊（一）
山本照太郎（一）
羽熊寶藏（一）

島根縣

後藤吉勇（舊）
太田隼治（四）
石橋穰（三）
吉野要三郎（三）
廣瀨一郎（三）
市原經太郎（三）
大隅寛（三）
碓井文雄（三）
杉原直明（三）
武田董義（二）
並河元勝（二）
河野正夫（一）

山口縣

德田隆助（舊）
後藤哲雄（舊）
二階道文（四）
山縣就貞（四）
伊藤要三（四）
西村律治（三）
佐江木忠愛（三）
角敏之助（三）
豊田穀彦（三）
羽村吾六（一）
小田次郎（一）
井上壽雄（一）

德島縣

緒方晴逸（三）
尾形文夫（二）
馬詰嘉吉（二）
木内盛夫（一）
大池賴男（二）
中谷茂雄（一）
梶川行雄（一）

松浦　正夫（一）
伊月　義夫（一）

香川縣

三好　毅一（三）
白井　進（三）
川上　博治（二）
赤澤　中（二）

愛媛縣

稻葉　豊（三）
永井　信近（三）

高知縣

中川源太郎（三）
高木　義英（三）
森下　眞郷（三）
小西　清（一）
土居　一實（一）
關口榮次郎（一）

福岡縣

三輪　新一（舊）
原田　浩平（舊）
行實　憲親（舊）
筑紫　哲路（舊）
上野賢太郎（舊）
犬塚　克巳（三）
野見山孫七（三）
調　仁郎（三）
松岡　一馬（二）
野見山　巍（二）
大江　泰雄（一）
佐々木幹雄（一）
原田　俊吾（一）

佐賀縣

大川内宅藏（四）
馬島　登（四）
馬島　憲明（三）

大分縣

河野　廉士（四）
岩田　謹吾（三）
波津久統重（三）
深田　眞一（三）
川津　清（三）
袋野　元一（一）
青木　誠（一）
三木　敏（一）
横田　德（一）

長崎縣

江口　兵藏（舊）
道津　幸雄（舊）
神邊　盛文（四）
中村　丈夫（四）
加納　篤美（四）
積山　正夫（三）
近藤　武雄（三）
白髭　工（三）
平野　達也（三）
本川　俊夫（三）
須藤　元（三）
柴田　萬吉（二）
青井　弘海（二）
小倉　利藏（一）

宮崎縣
小野庄次郎（舊）
武田　光麿（舊）
高野　安進（四）
田部　千秋（四）
大迫　與吉（三）
甲斐　健二（二）
坂田　郁郎（一）
江　並　猛（一）

熊本縣
寺尾　敏行（四）
鈴木　留（二）
浦本九十九（一）

鹿兒島縣
安田　幸吉（舊）
福島　繁（舊）
東郷　英三（四）
稲富　行雄（四）
井上　周一（四）
加治木潤德（四）

橋口　徹志（四）
谷口　新（四）
兒玉　清有（四）
迫田　順一（三）
今藤　繁（三）
難波　靜夫（二）
下小鶴英吉（二）
佐多　正藏（二）
菊野　景光（二）
中山　幹（一）
平山　武成（一）
小濱田松夫（一）
海江田芳德（一）
森保　雄（一）
本田　梢（一）
池田　敬雄（一）
窪田　今夫（一）
野上　義信（一）
嵩　隆　茂（一）
竹内　重盛（一）

沖縄縣
嘉陽　宗正（舊）
尾比久孟德（三）
大城　兼信（一）

朝鮮
李　鐘　奭（三）
李宅　龍（一）
金　秉　瑞（一）

滿洲
金子　辰夫（二）

比律賓
ヒポリト、ベロソ（四）
レオンシオ、エスオブレンシス（二）
マルセリノ、ランヨラ（二）
マルガリト、マグシノ（二）
イサベロ、マリアリ（二）
ドミンゴ、カハヨン（二）
フオリオ、ルス（二）
ビセンテー、レーエス（一）
グレゴリオ、デル、ロザリオ（一）

本

欄

學生諸氏に檄す

高橋琢也

災害と樹木と毛髮とは日夜を分たず生長すとは油斷を戒むる泰西の古諺なり。禍は微より生じ、禍は忽より生ずるを常理とすれば人事は豫じめ周到の用意を拂ふにあらざれば成功を得ること難しとす。而も世人の多くは行事少しく緒に着けば忽ち樂觀して成功の容易なるを過信するも其實適切の用意を缺きたるより中途にして破綻百出し忽ち蹉跌して一敗地に塗るゝに至ること皆然り。蓋し其禍は叙上の如き人情普通の弱點に出づるものにして古人が成事は艱難の日に在り敗事は得意の時にありと教訓したるも此缺陷を補はんとする婆心に外ならず、格言に曰く速來の幸福は速來の禍害と、亦眞理なり。舊日本醫專の學生諸氏は修學中種々の苦況に惱まされ特に本年五月以來悲慘の境遇に陷りて一時廢學せざるを得ざるに至りたる等久しく惡戰苦鬪を爲し居たるが頃日聊か小康を得たるを以て前日の艱難を忘れざらんが爲め今回其奮鬪の事蹟を叙して紀念號となし之を同志に頒たんとす。所謂前事を忘れざるは後事の師なり、諸氏の此擧や亦同志間を益すること少々にあらざるべし。然りと雖も諸氏今日の境遇は果して樂觀を容すべきか、前途には何等の悲觀すべきことなきか、是れ輕卒に決すべき問題にあらず、諸氏現在の境遇は只一時の小康を得たるに過ぎず、諸氏の前には尙一大難關の横はることを自覺せざるべからず

思ふに諸氏は將來に成功の大望を抱き少くとも所志の學業を成さんことを期するものなり。予をして露骨に曰はしむれば諸氏の中には漫然目前の現象に安心して將來を樂觀するが如き人あるに似たるも其實寸前暗黑にして宛も五里霧中に彷徨するものと謂ふを以て妥當なりと信ず。諸氏緊褌一番大に前途の難關を擊破せんことを覺悟せざるべからず。獨逸の諺に曰く「凡そ人は二十歳前美麗ならず、三十歳前强壯ならず、四十歳前智能を得ず、五十歳前富貴を得ざれば最早終世挽回の途なきものとす」と諸氏は其美麗と强壯とは既に之を得たるも智能と富貴とに至りては之を將來に待たざるべからず而も其智能と富貴の二者は之を得ること容易の業にあらず、何ぞや凡そ天下の青年皆之を得んとし否獨り青年のみならず老若を問はず男女を論ぜず苟くも立身出世の志望あるものは皆之を得んとして互に社會の競走場裡に立ち必死に奮鬪努力するを以てなり。

されば諸氏が此競爭に打勝ちて所志の目的を達せんとするには對手に百倍して活動せざる可からず、予は諸氏の前途に一大難關の横はるを知るが故に諸氏が前途を樂觀するは極めて危險なるを思はずんばあらず。諸氏の身上には前日の艱苦よりも寧ろ將來一層猛烈なるもの來襲するなきを保せず、否精神上には已に其難關に入りつゝあり。諸氏は少くとも之を覺悟するを要す。而して其覺悟は他に依らず人を賴まず自主自立不撓不屈の精神を以て飽まで難關を擊破して彼岸に達せんとするに在り而も其の難關を擊破する唯一の武器は精力と信念となり、古人曰く萬人と戰はんと欲するものは劍を用ふ可からずと自ら信ずる處の念慮を有し十二分の精力を竭して戰ふ以上は天下何ものか之に敵せんや、諸氏幸に此信念と精力とを以て各自運命の前途を開拓すべきなり。

學校新設の速進を祈る

法學博士　寺尾亨

吾輩は日本醫專問題勃發當初は、唯新聞紙上で見て居つた丈けであつて、深く其眞相を識るに由なく、加之、吾輩の學問とは全く違つたものであつたから、深く意に介する事もなく謂はゞ路傍の人であつた。然るに本問題の愈々紛糾を極め、其の停止するを測知するに難きに至るを見るに及んで、洵に我教育界の爲め由々敷き不祥事であると太く痛感して居つたのである。此の時に當り一日該校學生の二三の者が突然來訪せられて本問題に關する實相を陳述せらるゝ所があつた。其の學生と云ふのは吾輩と同鄉の者であつて、何れも本問題に關して多大なる利害關係を有し、且つ傷心困憊其極に達し、然も負笈遠く都に出てゝ盤根錯節茲に數年、志成るなくして如何でか父兄に見ゆるの面目やあるべき、願はくは一臂の力を添へられたしと、赤誠迸るゝ若者の紅頰には涙潸然と止めもあへず語つたのであつた。人生意氣に感ず功名又誰れか論ぜん其事の起始是非善惡は暫く之を措き、斯く紛擾の結果、學生の前途を過る事あらんを惧れ、啻に同鄉者の爲めのみに非ず、四百有餘の學生をして失脚の位地に立たしむるが如き悲運に陷らしむるを慮り、茲に吾輩が是等學生の同情者として立つに至つたのである。

爾來、諸種の會合に引出され、其都度種々の話を聞いたが、其間學生の爲したる所些少の非難は免れ

得ざるを遺憾とするけれども、事茲に到る又己むを得ざる立場に居つた事は深く同情に値すべき事であつて、本問題の解決點も亦其處にあるべきを思つたのである。斯くの如くにして計らずも吾輩は本問題に就て深く關係する事となつたのである。

自分は前述の如く、元來學問を異にして居るばかりでなく、他にも自分の管理せる私立學校がわるので、微力到底充分なる貢献は爲し能はざる所であつて、新校設立といふ事に就ては、吾輩の如きものは如何に力を注ぐとも遠く及ばぬ事であるから、四五の人が夫々其の任に當る事となつて居るので、吾輩は夫れに聲援を與へて居るといふに過ぎないのである。けれども、學生集合の度びには出席もし、又、同情者とも相寄り學生の事情に就ては詳細を知つて居るが、此事件突發以來、最も困難なる時機に當り、四百有餘の學生は一致團結極めて强固に、然かも又最初の誓約をあく迄遵守し、一人の豹變者をも見ざるが如き、其友誼に厚き是等四百の學生の心事に至つては、近時學生の風潮滔々乎として浮薄柔弱に流れ易き現代に於て、洵に學生界好個の覺醒劑と謂ふべきである。吾輩は是迄、醫學生といへば意氣上らざる柔弱な者が多いと言ふ事を聞いて居つたが、今次の事を見るに當つて其の然らざるを實見したのである。

乍併、今や四百有餘の學生は其母校を離れ、其の前途や未だ充分なる到達點を見るに至らないけれども、是が爲めに學生の氣風崩潰するが如き事あるべからざるは今更云ふ迄もない事である。飽迄此堅忍不拔强固不朽の大氣風を保持し、邁往勇進して行くならば、將來社會的大貢献を爲すべき人物の輩出すべきは信じて疑はぬ所である。依是觀之、所謂、「雨降つて地固る」「禍轉じて幸となる」といふ如く、獨り關係する學生諸子の爲めのみならず、今後に於て學生の好模範たり、學校の好模範たるべきを具備す

るならば、學界の爲め美しい花は永遠に咲き匂ふであらう。唯奈何せん、吾々は微力にして其新なる學校設立に最も必要なる資力に於て貢献する能はざるを遺憾とするのである。けれども今日に於ては同情者中の年長者たる高橋君が非常なる熱必と勇氣とを以て其局に當り、專ら斡旋して居られる事であるから、同君の至誠に依つて世の有力者が之に動かされ、必ずや援助を與へる人が多數に生じて吾輩の素志を貫徹せしむるであらうといふ希望に滿されて居るのである。

東京醫學專門學校の成立を希望する四箇の理由

福本日南

學校を設けて、教化を施く。世自ら其人あり。我の預る所に非ず。亦預らんことを欲する所にも非ず。然れども四百の後進學ぶに處なく、來りて其命運の行々將に窮まらんとするを愁訴するを聽きては、二三子の後へに從ひて、此東京に一箇醫學專門學校の必要を唱道せざるを得ず。然る所以の理由は、

第一に生徒の救濟にあり

今日一國風紀の頽廢する、其弊は延きて學生に及び、動もすれば校長教授の訓誨に背き、衆力を恃み

て、其非を遂げんとするの風あり。斯くの如きは、斷じて容る可からず。其れの衆なれば衆なるほど、痛懲を加へ、以て將來を戒む可きのみ。

然れども是れ學生放肆の塲合をいふなり。今は否らず、學校を經營する者初より國家有用の才を陶冶するに意なく、敎育の美名を假りて、一個の私利を充たさんとす。是れ謂ふ所の羊頭を揭げて狗肉を賣る者なり。爰に人あり、店頭に羊頭を揭げ、羊肉を賣ると稱して、客を招く者あらん。客其羊肉たるを信じ、就きて之を食せんとすれば、羊肉には非ずして、狗肉たらば則ち如何。哺を吐き、箸を投じ、店主の欺瞞を責め、席を蹴りて去らんのみ。斯くの如きは、其罪果して孰れにか在るや。

學生元他志あるに非ず。自家の目的とする學業を修め、由りて以て身家を興さんと欲するのみ。而うして一國の文敎を司さどれる其道の認可專門學校あれば、贄を執り、試業を經て、之に就くは、固より其當然なり。是れ猶ほ羊肉を食せんと欲する者の羊頭招牌店に就けるがごときのみ。然るに其校主は官立專門學校と同等の資格を學生に享受せしむべきを名として、學生を釣り、授業の贄料以外に、多く資金を索取しつゝ、毫も其公約を顧みず。是れ亦前の羊頭店が一定の羊肉代を收めたる以外に、更に多錢を客に索め、之を投せば、別に上等のロースを供し、其美味に饜かしむ可きを約し、囊底を拂はせて、其肉を侑めざるに異ならず、客の怒りて去るが當然なれば、學生の慍みて去るも亦當然なり。常識ある者誰か店奴の欺瞞を惡み、就客の一杯食はされたるを氣の毒なりとせざる者あらんや。

唯だ其れ狗肉は吐出して已むことを得るも、學業は其儘にして廢學するを得ず。而うして不幸今日の社會には前者と同一の認可學校あらず。其れにして救濟の道を講せざれば、四百の學生は一朝にして中途廢學の窮厄に陷らんとせり。是れ我が此東京に更に新らしき一專門醫學校の成立を希望する所以の一

つなり。

第二は浪人の杜絶に在り

何れの時を問はず、一國の治平を紊り、社會に不安の因を與ふるものは、浪人の增殖に在り。封建の世代に在りて、「切取り强盜は武士の習」と喝破して、一國社會を荼毒せしは、則ち當時の浪人には非ずや。今や法制既に立ち、警察亦從ひて具はり、是れ等橫暴の跡を絕ちたりと雖も、更に代りて新らしき浪人の洪害を社會に流すあり。何をか新らしき浪人といふや。專門の學術を修めて生業にありつくを得ざる者即ち是なり。

今日東京に、專門の學術を修めて生業にありつくを得ず、不平勃々自ら逞うせんと欲する者、約三千有餘あり。其の學び得たるものを以て、正當に身を立つるを得ず、モグリとなり、三百となり、人間に羞恥の事あるを知らざるに至らしめんとする者は、法學を修めたる新らしき浪人に在り。詭激の說を導き、淫猥の筆を弄し、社會の風敎を破壞せんとする者は、文學若くは藝術を修めたる新らしき浪人に在り。コロロホルムを嗅がせ、モルヒネを服せしめ、子女を辱かしめ、家庭を紊さんとする者は、醫學を修めたる新らしき浪人に在り。固より悉く然りといふには非ざるも、凡そ一國の治平を害し、社會に不安の因を與ふるものは、多く此中に在り。而うして今亦四百の專門醫學生を委棄し、中途廢學の餘義なきに至らしめん乎、彼等は其の學ひ來りたる知識を以て、社會に如何なる惡影響を與ふ可しと謂ふ歟。斯くの如きは、國家としても、社會としても、豫め防遏したき所に非ずや。是れ我が此東京に更に新らしき一專門醫學校の成立を希望する所以の二つなり。

第三は天才の助長に在り

今日の教育は平等教育なり。中學を卒業したる者に非ざれば、高等學校に進むを得ず。高等學校を卒業したる者に非ざれば、官立大學に就くを得ず。衆を律し、學を勸むるには、自ら此に出でざるを得ずと雖も、天才なるものは、必ずしも階級を歴ざるとも、其れをして直ちに最高の學業に從事せしむれば、最高の知識を發揮し來るものなり。試に之を英國近世の碩學に看よ、ダーヴインの如き、スペンサーの如き、チンダーの如き、ファクスレーの如き、今に至るまで世界の倶に泰斗視する所。而うして是等の碩學は何れも階級的教育を受けず、然も其造詣や彼の如し。

今や我國の社會は尚ほ過渡の世代に屬し、或は其家計に拘束せられ、或は其世業に羈絆せられ、夙に醫を以て其身家を興さんと志しながら、階級の學校を歴ざるが爲に、醫學を修むるを得ず、志業の舛錯に泣く者、必らず尠なしとせじ。其れをして幸に志を得せしめば、是等の士中より幾多のパスツール及コッホの徒の接踵して輩出せんやも、亦未だ知る可からず。然れば此大帝國に一校ぐらゐは之を救濟するの處を設置する、亦須要ならずとせんや。是れ我が此東京に更に新らしき一專門醫學校の成立を希望する所以の三つなり。

第四は國運の發展に在り

議者往々説を爲して曰く、今日全國醫士の數は既に國民總人口の千分一以上に達すれば、是より以上多く醫士を陶冶するの必要あらず。醫學の教育亦從ひて現在の諸醫校にて足れり。何を道樂に是より以

上此種の新校を創立するを用ゐんやと。吁是れ餘りに帝國を小とし、同時に帝國々運の發展を藐視するものなり。試に思へ、我帝國は今日の地位に停電し、自ら之に滿足し、而うして未來の隆運を必期す可しと謂ふ歟。之に滿足する能はずと謂はゞ、事業に、學術に、土田を四外に開拓せざる可からず。南米、北亞、南洋、支那等は即ち此好土田には非ずや。中に就きて、支那のみに觀るも、四億の生靈は今尙ほ草根木皮の液汁を仰ぎ、榮養益氣の腐論に死生せり。若し我最新醫學の知識を以て、之を救濟せん乎、彼の千人每に我醫士一人を派するとして、四十萬人を要し、彼の萬人每に我醫士一人を向はしむるも、尙ほ四萬人を需む可し。然れば新たに四百人の新醫生を陶冶し出すも、彼の百萬分の一に過ぎず。百萬人對唯一人、是れ謂ふ所の大海の一粟のみ。何を苦みて醫士の過剩を叫破するや。是れ我が此東京に更に新らしき一專門學校の成立を希望する所以の四つなり。

但だ其成立は仁人、君子、富豪、巨室の幇助に待たざる可からず。大方の諸君幸に眷顧を賜へ。誠敬を捧げて、謹みて請ふ。

日本醫專紛擾經過錄

大角桂巖

保證人會の決議

事件突發の當初三四年生而已の保證人會を開いて鎭撫方法を講じたが無効に歸したから續いて同校保

證人會を催し席上(一)磯部山根兩理事を排斥すること(二)退停學處分を取消すこと(三)善後策を講ずることを議決し尙十八名の實行委員を選出したのである。

實行委員の奔走

私以下五名の實行委員は議決の翌日文部省に於て次官と會見し紛擾事件の根本的原因は指定問題であつて磯部理事の聲明に反し指定の不能なること及び磯部理事ありては文部省は指定せざるべしとの學生側の主張とを披瀝した。次官は指定問題と磯部理事とは何等交渉あるべき筈なく要は基本金問題にあると答へた、ソコで委員側は基本金としては五萬圓位もあれば宜敷しきやうに聽きましたが貴官の見る所如何と謂ふと、次官はソーデス先づ其位あれば指定條件に副ふであらうが然し專門學務局長不在の際故確答は出來ぬ、然らば夫れ丈の金があれば直ちに指定して戴けますかと突き込めば、ソレもそうだが兎に角文部省の方針としては設備基金さへ整頓すれば指定したいのであるが、ソレは第二の問題で兎に角生徒の方を鎭撫して呉れねば困るとの事であつたから、吾々實行委員は設備及び基金の調達及び生徒鎭撫に就ては責任を以て全力を盡くしますから指定問題に就ては宜しく御願ひをしますと謂ふて次官との會見を終つたのである。

學生團への報告

次官との會見後私外一名は學生團に對して、只今次官との交渉を終つて來ました其內容は具體的に報告する時機ではないが兎に角好結果であつたこと丈けを斷言します夫れ以上は今暫く追窮することを待

つて貰ひたい、尙之に附加して一個の夢物語を御話したい「私は江戸川から本郷三丁目迄來る間に夢を見た。茲に一個の巨船が長い間暴風巨濤と鬪つて漸くにして上陸すべき目的地に達せんとした時に、多數の乘客と船長との間に爭が起つた。目的地に上陸するには船長は右の方へ行くべしと主張し、乘客側は左の方が近道とだ謂ふ、そこで双方の爭が盡きぬから通り掛つた他の船が仲裁に入つて、そんな議論をするよりも上陸地の島長に意見を尋ねて見ようとの事で島長を訪問したが留守であるから次長に會見すると夫れは兩方とも惡い、中央が上陸の路である然し先刻から見て居ると大分喧嘩をして居るやうだがそんな品性の卑い客人が上陸しては島の風儀を紊すから上陸することは許せぬと云ふいや決して再び喧嘩はしませんから此點は吾々に一任して貰ひたい。然らば宜しいも一つの條件がある上陸するにはそこに相應の設備が要するから直ぐ上げられぬから少しは月日をを要する」と云ふたが是で夢は醒めたが、諸君は冷靜に斯の夢物語を考へて味つて欲しいと演說を終ると學生團から五名の委員がやつて來た。

指定問題の推移

五名の學生側の委員は今日に至つては吾々の目的は最早や指定問題でなく磯部山根兩理事の排斥で、此問題が主で指定問題は客であるから實行委員の方へ宜しく傳へて下さいと謂つた。そこで此旨を委員會に報告したが、磯部理事排斥の件は感情上のことで、結局は指定問題が解決さへ出來れば鎭撫するであらうと考へ五月七日に左の議決をしたのである。

(1) 理事者(山根、東)保證人會は校主磯部と學生との双方の主張並に一切の事情を精査講究し最善の調停を爲す事

(2)校主磯部は理事者保證人會の熱誠公平なる調停に服從し、今後に於ける自身の進退學校の經營一切を擧げて此會に委任する事

(3)學生一同は本校の文部省指定(保證人に定案あり)と、最近退停處分取消を爲す以上は、他の一切の事は理事保證人會の取扱に服從する事

そこで翌日山根理事にあつて表向きの條件は磯部山根を排斥するやうに書いてあるが、夫れは生徒に對する術策であるから磯部氏にも表面此の條件を承諾する樣に傳言を依頼したのである。

磯部理事の拒絶

然るに翌日山根理事より磯部理事不承諾の回答があつたから、更らに直接磯部氏に面談したが、矢張り拒絶した。然し種々談合の結果更に後援會保證人會教授の一部分を加へて總會合と實行委員との聯合の上で前後策を講ずることにした、翌晩會合の結果磯部山根兩理事を置く代りに新に二人の理事を增す事にした是は磯部理事專斷を防止すると云ふことで生徒側を滿足せしめん苦肉策で、進んで(一)後援會と保證人側の有力者より五萬圓を折半して調達する事(二)翌日午後四時までに退停學處分を取消す事を議決したのであるが(一)の議決は教授會の流會のために未解決に終つたので、更らに磯部理事を訪問した所が門を閉じて應じなかつた、所謂壘を高くしたものだ。

中央會堂の報告會

五月十八日中央會堂に於て以上の經過を報告して實行委員會を解散したのである。すると生徒から(一)

生徒一同退校する事、(二)保證人は之を承認する事の決議案を提出した。そこで奥宮委員長其他の委員に諮つたが何れ共解決が付かなかつたが、更らに私と田代委員とに對して、學生は斯くの如き不誠意なる經營者に依て學校が繼續することは、國家教育事業から見ても甚だ不祥事であるから、此際全部退學して仕舞ふと主張した。成る程一應の理由もあると考へての、事茲に及んでは勢やむ能はずで該決議案に同意する事にしました。其決議案は。

(1)山根正次氏及磯部檢三氏は指定問題に對して毫も誠意なく却て障碍者たるの故を以て本校との關係を斷たしむる事

(2)此問題解決まで同盟休校を爲す事

(3)若し犧牲者を出す時は同校生徒之に殉する事

で是れには四百五十名の血判書があるのである。私が此の決議案に贊成した理由は、業でに犧牲者となつた六名の同窓に對する彼等學生團の、熱烈なる道義心團結心の閃に、近來風教墮落して一般學生の意氣蕩盡したる折柄少からず動かされたのである。

實行委員會の繼續

委員會の解散は中央會堂に於て宣言したものゝ、前後策を講ずる必要があるので、尙其活動を繼續したのである。尙今回の紛擾は其眞相を社會に向つて訴ふる必要があると考へたから、五月十七日青年會館に於て權威の濫用と云ふ演題で各自の所見を披瀝したのであつた。其要領は由來學校紛擾なるものは責任は教師學生双方にあるやうであるが、較ともすれば教育者は自己の權威を笠に着て學生を壓服する

傾向があるのである。教育とは謂ふまでもなく德化であり感化でなければならぬ。故に教育者の立場としては第一義も德化であり第二義も德化でなければならぬのに、德を以て子弟を率ゆるの誠意なく退學停學と云ふ痛棒を以て學生に對すると謂ふことはありうべからざる事で、我國の教育界を通じて有德の教育家が次第に其影を沒して行くとは眞に憂ふべきことである。殊に今回の紛擾の如きは徹頭徹尾退停學處分と云ふ名に被はれたる不德なる似而非教育家に對する吾々の公憤爆發であることを御承知して戴きたい然り問題の經過は波瀾萬疊でありまするが眞相は茲に盡きて居るのであります云々

文部次官の奇答

其後委員會を開いて奥宮前委員長を經て文部省に爾後の經過を報告した後に私は諏訪氏と同伴して專門學務局長に會見したが(一)文部省は貴校に對して指定の事を嘗て言及した事はない(二)基金が出來設備が整つたからとて必しも指定はせぬ(三)開業試驗をして見て實力が認めらるれば指定もあるであらうとの奇言を弄するから委員は夫れは文部次官の言と齟齬して居るのみならず磯部理事の言に依れば文部省は設備さへ整ふれば指定を與ふと謂つて居た文部省は磯部を欺いた結果此の紛擾を產んだのであるから全然文部省の責任だと謂つて居りますが事實如何と突き込むと、局長は飽くまで否定して夫れよりも早く紛擾を鎭めて呉れねば困ると言ふから、それは出來ぬ相談でどうか文部省に於ても責任を以て前後策を講じて頂きたいと賴んで再度次官に會つて、只今局長からは指定等に就ては嘗て口にしたことがない——考へたこともないと言はれたが先日の貴官の言明とは齟齬するやうですがと聽くと、次官は夫は私の言ひ誤りかも知れぬが五萬圓基金の事は兎も角後で係りの者に調べさせて見ると貴校は非常に借金が

あるとの事で沙汰止みとなつたのである、併し二十二日には文部大臣が學生委員に會見の筈であるから何とか纏まるであらうと、私は曰く文部大臣が訓戒を加へたが爲めに生徒が盲目的に服從すると考へらるるならば夫れは大なる誤解である唯理の在る所に服するのみであるからこの點は充分に呑み込んで戴きたい況んや學生團が如何に高調し感激して居るかは血判書でも證し得るのである私は文部省が之に對して冷淡なるお考へを持たれないことを希望する、次官は曰く、學校が斯くの如き紛擾を惹起し學生が斯くの如き騷動を敢てするのは學校學生の責任で且認可を受くべき資格なきを證明するものと認めれば廢校を命ずるより外はない乍然それは四百五十名の前途を同情するために優柔不斷の態度を持して居るのだ。私は應酬して果して然るならば大なる御考違ひである若し御情があれば廢校さして頂きたい學生團は(一)不德なる敎育者の撲滅を國家敎育の上から希望し(二)磯部の惡辣手段に依つて學生の角が崩壞し麗しき學生意氣の團結美を中道にして一擲するかせざるかを憂ふるのみである早速廢校して頂きたいと云ふと、次官の曰く「事そこ迄進んで居るならば可なり皆と協議して適當の方法を講せん」とて物分れとなつたのである。吾々は尙其前後策に腐心し且劃策しつゝあるのであります。(五月二十二日談)

財團に對する寄附行爲

東京醫學講習所主幹　秋　虎　太　郎

予は元日本醫學專門學校學生とは何等の關係なし、若し强ゐて關係を云はゞ學校より退學處分を受け

たる丸山郁雄氏の父、丸山長四郎氏と友人關係より學生後援者の内へ數へられたる迄なり。東京醫學講習所を起したるも之れが爲めにして、始め四百餘名の學生は日本醫專より退學を許可せられたれども、差し詰め何等歸する所なく全く放浪の身となれり。是れ社會上より看て頗る危險のみならず、學生其者の爲めにも不利益なり、仍て學生及保證人諸氏の希望に從ひ私立東京醫學專門學校の設立に至る迄講習所を設けたり。(私立東京醫學校とせしも許可手續煩雜に付講習所とせり)幸に、醫學博士佐藤達次郎氏教務上に多大の便宜を與へられたるを以て、名は講習所たるも實は專門學校以上と評せられつゝあり。爾來新校の基礎たる財團法人の組織に付苦心中、十月八日首唱人會に於て首唱者中の先輩にして地位名望共に高き、高橋琢也氏を總委員長に推戴の議あり、同十四日いよいよ同氏の快諾を得たるを以て、同月十五日之を公表することとせり、之れよりして財團の組織に歩一歩を進めつゝあるなり。

財團と云ひ既に寄付行爲を以て之れが組織の根本となす以上、其目的は必らずしも慈善的ならざるも其事業は義學的性質を帶ぶるは云ふまでもなし。何々教育、何々育英、或は國家的事業あり、或は鄕黨的事業あり、何れも財力の餘裕を有する者其一部を利用して社會の事業を補翼し、若くは缺陷を塡補せんとするに外ならず。唯外國人は其餘財を寄附せんとするに、如何なる事業がよく善良にして有益なるか其選擇に苦心するに引換へ、日本の富豪の多くは、其義學的事業に對し、如何にせば其寄附行爲を免かるゝことを得るかに腐心するの相違あるのみ。予曩に學生よりの要求として某富豪男爵に面會せよ學生に對し大に同情せられつゝありと、予は其の如く男爵に面會せり。男爵は予等の口を開くや、彼の學

生のことは自分關知せず、寄附抔は到底出さず、又寄附を他に勸誘すべく、拙者の名を貸すことも勿論謝絶すと、予は始め學生が同情あり面會を賴むと要求したる時、既に此言あることを豫期せり。成程學生と男爵との間には未だ談の熟したる迄に至らざりしならん。然れども其拒絶の先走りて寧ろ防備的なる頗ぶる其人の眞價を發輝するに足る者ありし。予は中古彼れが富を作る手段を知れり、故に彼が拒絶の言を恠まず、彼れ今老年に及び巧妙なる弄策を以て慈善者の名を賣り、以て社會群衆の突擊を免かれんとしつゝあるなり。社會は誤つて彼を慈善家と稱す、若し果して當れりとせば、日本の慈善家は決して稱するに足らざるなり。

日本には斯の如き僞善家に富むを以て、財團の組織は難事中の難事とせり。是れ世間一般の評にして既往の事實は蓋し然りしならん。然れども、頃者社會の裏面に多少の變兆を生せり、貧富兩者間の融和策として眞個に慈善又は義學的事業の企畫せらるゝこと是れなり。今東京醫學專門學校設立の爲め、高橋先生主として財團の組織に盡力せらるゝは、予等の最とも感謝する所なると共に、速に其成功を祈り四百有餘名の學生を窮地より救ひ出されんことを偏に希望して已まざる所なり。（十二月十三日病中識す）

日本醫學專門學校

(一) 日本醫學專門學校の創立

日本醫學專門學校は、本郷區千駄木町、根津權現の片ほとりにて、權現裏の道をだら〳〵上りつめたる坂の上にあり。郁文館中學に近く、上野の森と相對す。

そも〳〵日本醫學專門學校は、舊日本醫學校の專門學校程度に改められたるものにして、其の歷史に就きて語る時は遠く長谷川泰氏の濟生學舍の昔を語らざる可からず。長谷川氏の濟生學舍は、到底今日の如き組織的敎育にはあらざりしも、當時の醫學書生、笈を負ふて東都に集れるものゝ等しく其門を潛りたる處にして、隨つて校則等も嚴重ならざる爲め墮落書生が學生の假面を冠りて惡事を働く者も出で一時校名大いに下れるも、明治三十六年九月廢校となれる迄の存立期間二十七年に於て、開業試驗に合格して醫師たるを得たる者六千七百名に達したり。當時、學校は本郷一丁目、今の順天堂の近くにてなか〳〵に勢力ありき。

長谷川氏の濟生學舍が無秩序にして統一無く、爲めに一般社會より指彈されつゝありしは、當時の事情を承知せる人々の等しく認むる處なるべし。其の攻擊の急先鋒たりしは現北里研究所長北里柴三郎博士、平民病院長加藤時次郎氏等にして、氏等は千代田新聞を興して長谷川氏を攻擊したり。長谷川氏は速かに學校の制度を改めて專門學校とし尠くも中學校卒業生を收容し得る事となすべしと云ふが其の論旨なりしなり。

長谷川氏は此の運動に對して『何を小僧共が』と云ふ態度にて、敢て改むる處無かりしが、運動は萬遍なく行き亘りて私立醫學專門學校規則を作らしめ、之れに相當せざるものを認めざる事となりしを以て

長谷川氏は憤然明治三十六年を以て長き歴史あるその學校を投げ出し、空しく廢校の運命に遭遇せしめたり。

濟生學舍倒る。其の包容せる學生は何等か他へ修養機關を求めざる可からず。明治卅七年九月、神田淡路町に山根正次、磯部檢三兩氏の名を以て日本醫學校設立せられぬ。磯部氏は山口縣人にして、單身五圓の金子を所持せる儘馬關より船にて上京し、獨學を以て醫となりし一種の人物なるが、加藤氏等の長谷川泰氏攻擊の頃運動の一部に加擔し、その關係を以て濟生學舍の倒潰せる後を收拾すべく現れ來りたるなり。其の後、本郷千駄木町にありし東京醫學校と合同の約成り、當時石川清忠氏の經營しつゝありし同校は磯部氏の買取る處となり、根津眞泉病院の所有者たる瀧澤竹太郎氏と協同して學校の性質として備ふべき校舍は磯部、病院は瀧澤の提供と云ふ形に於て茲に明治四十五年七月十日、財團法人私立日本醫學專門學校は孤々の聲を擧げたり。

校長は山根正次氏、財團專任理事二名卽ち磯部、瀧澤二氏にして磯部氏は學監を兼ね瀧澤氏は會計係を兼ねたり。その他理事には山根正次、松村清吾、增野豊、內田愼太郎氏等、幹事には關六三郎氏ありき。

(二) 開校當時の狀況

九月十一日より第一回入學者百三十名登校し、東京醫學校遺物のうす暗き赤塗老廢校舍に於て開講されたり。梁は曲り床は朽ち硝子窓は破れて風の吹き通す教室の寒さ、谷中の森、天王寺の五重塔の眺望を外にしては一文の價値もなき二階建家屋なり。鍵形に曲りし本校舍と合して南に開けるU字を畫ける一小附屬病院、西南隅にあり。がらんと明きしまゝ太田ケ原の面影をその儘に茂る雜草は校庭と名づくべき南方の荒地を閉じて、之等を廻らすに嵐に倒れかゝりし黑板塀を以てせり。學生等白線入りの角帽

に專門學校入學のよろこびを以て被はれたれと、然もこの貧弱さには內心呆れたり。今も思ひ出すは校規として校內に喫烟を禁ぜられし爲め十分の休み時間には擧つてスリッパを靴にはき代へて門前に走り出で、往來の片側に一列に並んで煙草を貪りたり。雨の日は傘さして烟を吹きに出でし奇篤家もあり。されば妙齡の婦女はこの道を避けたりとなむ聞く。またその頃は「本科生勤學證」なるものありて日々出席の印をもらふ爲に調印所の堀立木屋の前は思はぬ雜鬧を呈したり。彼方に見ゆる向陵の甍を見るにつけ學生等は如何なる感慨に耽りしぞ。實に學生は狸の泥舟に身を托して嬉々たるなりき。

(三) 財政の狀態

明治三十八年發布私立醫學專門學校の條文に就きては、吾人詳しく知らざるも、私立醫學專門學校設立の約束としては、學用外來患者の數、入院患者の數、學用屍體解剖數、病院の設備、專任敎授を置く事等、諸種の條文を含み居れる由なるが、日本醫專の設備は他の官公私立同種學校に比して遙かに劣れるは否む可からず。殊に其の難關とせるは專任敎授と基本財產の問題なり。

日本醫學專門學校は當時、經濟狀態如何と云ふに、節約に節約して總經費一ヶ年五萬圓餘にして、其の內二萬七千圓は俸給として消え失せ、殘り二萬餘圓を以て凡てを處辨する事となり居たり。外來學用患者の施療費の如きは二百五十圓と見積りあるも、歐洲戰亂の影響を受けて之れ又三倍位に昂騰し學校の經濟は苦しき絕頂にありと言ふ。一ヶ年五萬圓の收支すら辛くなし得る此の貧乏學校か、手をつくる事を得さる基本財產、即ち經常費を利子として產出するに足る資本金を即座に醵集するに難きはもとより明かなるなり。此の資金醵集問題と、學校當局の不誠實とは結び付きて每回紛擾の原因となりしものなり。

(四) 磯部檢三氏及び瀧澤竹太郎氏の爭ひ

日本醫專の成立は以上の如く一種の寄り合ひ世帶なるが、此の寄り合ひ世帶と云ふものは兎角喧嘩に成り易きものにて間もなく磯部瀧澤兩氏の間に勢力爭ひ起りて漸時その熱度を高めつゝありき。

大正二年四月には第二回新入生百三十餘名入學し學生は二百五六十名に達したれども、學校は依然として舊態を維持するに止まりたれば、學生等は校の發展に資せんとて一年級には蘭契會、二年級には尙志會なるもの設けられ委員を擧げて活動せり。

此頃財團に於ては瀧澤氏の勢力磯部氏を凌駕し、遂に大正二年十二月十五日には專任理事合議の上、石川清忠氏を學監に推薦し、磯部氏は一時隱退の姿となれり。當時、山根校長は朝鮮總督府衛生顧問として彼地に留まり、學生等は校長の顏を見たる事なかりしも漸く財團に暗流の繁きにつれて、校長の歸校を思ふ事切なるに至れり。折しも翌年一月に山根氏所用のため歸京せしを幸ひ、一月廿三日に學生は陳情書を呈出し大に陳辯する所ありき。

陳　情　書

我校が開校せられて以來已に二星霜、然るに經營に關する主務方針の確立を見ず、從て教授管理訓練等凡ての方面に亘りて只醫學講習會の感あるを憾む。

今や指定特權の附與請願の期迫れるに際し設備は勿論、指定規則に該當すべき施設を見ざる條々多し。之が實現の急務あるに當り內に理事者の訌爭を見る斯る狀態に於ては短日月間によく此重大問題を處決し文部當局に迫るの實を擧ぐるの運びに至らざるを信ず

されば學生は日夜是等の問題に對し憂慮其極に達し安んじて學に就くを得ざるなり

賢明なる校長は能く此の實情を了し、最善の策を講じ是等諸問題を解決し、易々我校を官立醫專以上に發展せしめ、指定は學生の要求に叶ひ、專心修學に努力の精神を發奮せしむるの計畫あるものと思惟すれども、職を朝鮮總督府に奉じ只一回學生會に臨まれたるの

みにて直接校務を處理せられたることなく、且吾々學生に對し校經營に關する意見を發表せられしことなし

されば內部の紛擾と指定問題ある際、校長の歸京を幸とし、玆に謹みて學生各自の學校に對する希望を添へ陳情書を呈し之に對する御意見を需め裁斷を仰がんとするものなり

嘆願之件

一、私立日本醫學專門學校長は日々登校し、校長たる可き職責を充分に盡され、而て目睫の間に迫れる本校の指定問題に關し、文部當局に向ひて遺漏なき運動をせられたし

二、私立日本醫學專門學校經營者たる專任理事に於て、指定に關する設備の困難及ひ將來の維持不確實なる傾向ならば、此際他に學校經營の權利を讓らるゝ樣勸告せられたき事

要求事項

一、校長は左記學校現狀に鑑み、速に學校の整頓及び生徒を慰撫せられん事を乞ふ

(イ)專任理事者主義根本より異なれるあり、是がため感情の衝突を來し、其結果學生は他に類なき憐む可き地位に在るを以て、適當なる手段により斯る事なき樣謀られたき事

(ロ)責任理事者中、徒らに口舌を弄して教授及び生徒に不安の念を抱かしめ、種々の不結果を生ぜしむる故斯る憂を無からしむること

(ハ)當局者が愛校心深き學生の絕叫を無視す可からざること

(ニ)專任理事の言責を重んぜざる結果種々の流言蜚語ありて學生をして益々不安の念に驅らしむる事なき事

(ホ)學則の適要に關して矛盾なきこと

(ヘ)權謀術策により學生を欺瞞する事なく誠意を以て學生に安心を與へらるゝこと

二、醫部瀧澤兩專任理事間の不和を全々根絕すること、よし和合を見るも一時的にして永久の見込なしとせば誠意なき者と學校との關係を絕て局外者たらしむること

三、我校の財團に對し學生をして猥りに今日此杞憂を懷かしむるが如きは經營者たる理事の本意ならざる可し、宜しく學生に斯る危惧の

、念なからしめ、安堵以て專心學業に精勵せしめらるゝこと

四、前項に付き學校は學生に俟つ處ありとせば、其理由及び財團法人に對する說明並に之が現狀を詳にせらるゝ事

五、文部省の指定要件を明にし之に對する設備の豫定期日を示し着々具體的設備を實現せらるゝこと

六、學校は曩に新舊學監の更迭の式ありたり然るに舊學監は新學監の就任を認め居らざるものゝ如し。果して然りとせば、學校は學生を詐欺せらるゝものと云ふも過言ならざる可し。一日も早く其の依る處を明にせられたし

七、目下休講中の修身教授の出講を請ふこと

八、學校教授は內外の德望と學識の卓越せる士を聘すること

九、學校は教授會を設け各教授間と學校との關係を一層深からしめんこと

十、學校の威嚴を保つこと

(イ)掲示は常に絕對的のものとなし一度示されたる事は直に變更なき樣なされたし

(ロ)學生の缺席を取締り萬止むを得ず缺席する者に對しては缺席屆の形式を簡易にすること

十一、解剖祭日を定むること

設備の要求

一、校舍(病理解剖室、臨床講堂、醫化學實習室、教授室等)教授材料及其他の器具等指定申請要件に該當する豫定に着々整頓並に建築せられたきこと

教授上の要求

一、經費及時間の許す限り各學科の實驗實習を增加されんことを希望す

一、私立醫學專門學校指定規則第二條第二項に定められたる專任教授を各科に置かれたきこと

質問事項

一、本校指定に關しての校長の自信態度及豫定如何

期待事項

一、官吏として國家の責任を有し校長として職責の盡され難き事あれば自ら處決せられたし

一、今や學校の威信地に墜つ是より先き幾度か學生に對し訓授せられたるも、何等効なく缺席者の如きは或る科によりては益々多きを加ふ、事の玆に至れる原因に付ては多く前學監の德望なきと施設宜しきを得ざる者とせざる可からず

前學監の私人上の事に付ては、世已に定評あれば吾人語らずと雖明かならん。而て開校以來校に於る行爲態度に付て見るに恰も七面鳥の如く何時も一として一貫せる主義なし。例令、開校第一日に於て學生の自治の主義を述べられしことも其れが實行に向ひて進むことなく、閑月ならずして濫りに壓迫及脅迫を加へ停學又停學、學生が事の相違を申出ずるに及びて半日ならずして之を撤回するが如き、一校の責任者として言語同斷の事をなして恬として顧みず。昨年六月追試驗に關し學生より嘆願せしに「自分が打殺さるゝも學生の意見を容るゝ能はず」などと言明せられ、而て九月には先に生命を屠して言明せられたる學生七月正式に進級試驗をうけて落第同樣追試驗を施行せられたるが如く、尙又學生會々費保管の如きも、會長は銀行の預金の規定を無視して私用に供せし事等枚擧に遑あらず

之れ畢竟校に首腦者たる校長の缺けたるが故にして、前學監の如き老猾なる之に乘じて濫りに平和の建設を破壞し終りて、我等二百五十の運命をして路頭に迷はしめんと企てたるものなり。之れ今日我校の實情を招到せるものなるべしと信ず

吾人は闡言す、此責の一部は校の主腦者たゞ校長の上に在るものと

校長此頃の歸京を機とし、永く學校の爲めに確固不拔の根本義に則り、大方針に向ひ一大鐵腕を振ひ我校の大發展を遂げられんことを願ふ。吾人は然らずんば過去一年有半の混亂せる歷史を繰返さゞる可からず、之れ吾人の堪へ得ざる所なり。希くば今日より本校　統轄者となり、吾等二百五十名の意義ある救護者たらんことを

附言　以上は學生會員陳情書意見をまとめたるものなれば、重複と繁雜は之を諒とし其意見のある所を酌量せられ過言の罪は御寬容あらんことを希ふ

大正三年一月廿三日　　學生一同（原文ノ儘）

山根校長殿

同夜上野精養軒に於て理事會あり、尙志會及び蘭契會委員はその室に忍びて聽取せるに、その協議の大體は「學校には現金なき故この場合現狀維持の外なかるべし學生の方は何とか胡魔化して置けばよし」と、殊に磯部氏が學生を愚弄する事言語に堪えたり、依りて翌廿四日は學生大會を開催し昨夜の顚末を報告し且つ「校長は官職を抛ち專心校務に盡力されたし」と決議せり、かくして廿七日には申請書呈出の運びとなりぬ。

申請書

一、校長は是非共本校に止まり直接指導の任に當られたし、若し萬止むを得ざれば此問題全く解決の期迄で當地に滯在せられたし

二、日本醫學專門學校指定に關する文部省よりの命令書を示し、之に對する設備は豫め期日を定め之を具體的に現はされたし

但

茲に呈出せる陳情書は可成御採用相成りたし

以上

大正參年壹月貳拾七日

日本醫學專門學校學生代表委員

花村泉

奥本重定

河野勝齋

中村壽松

山田逸爾

山本仁

日本醫學專門學校長　山根正次　殿　（原文）

山根校長は引くに引かれず朝鮮には行きたしと四苦八苦の揚句、二月廿日に遠山椿吉博士を校長事務取扱の名目を以て自己不在中の代理として學生に紹介せり、而して石川學監を直ちに解職したり、然れども遠山博士もその職たるや有名無實にして、畢竟一時の方便に利用されたるに過ぎざるを知るや、奮然職を辭し二三日を出でずして去れり、よつて石川氏を再び學監に復し眞泉病院長青柳登一博士を迎へて校長となしたりき。之れ二月廿三日にして遠山博士の就職せるは實に三日に過ぎず。事の變轉目まぐるしきばかりにして學生も途方に暮るゝ外はなかりき。當時山本仁氏の意見書なるものあり。その消息を知るに便なれば次に掲ぐ可し

意見書

一、本月廿日校長より一般生徒に發表せられたる校長代理事務取扱の名稱の下に遠山醫學博士を紹介せられたり、本より最も崇拜す可き容易に得難き博士たることは之を認むるものなり、而して本校學則第五十九條に所謂校長は本校を統理す、學監は校長を補佐し校長差支あるときは、校長の事務を代理す(以下省略)云々とあり、然れば學監なる御言葉は礼取せざりしも事實學監の意味と解するを正當とするものなり

二、然り而して學監として就任されたる遠山博士は未だ御就任早々の事、之を知る能はざるも多事の御身にも日々出校只管學務を總覽せらるゝことと余は期待するものなり

三、財團法人の下に設立せられたる本校は財團を根本義として、生命を保てるものなれば財團を無視すること能はざることは明白にして、又其實行權が瀧澤專任理事にあることは定欵の定むる處、幷に最近公正證書の受授により確定したることは前同日猪瀨辯護士の報告により吾々の既に知る處のものなり

四、然れば瀧澤專任理事は本校主宰者たると共に最も責任上重大關係の地位に立たせらるゝに至りしことは今日疑ふの餘地なし

五、然れば本校は今回本校の紛擾事件解決に對しても、瀧澤專任理事の心勞に對しては、少くとも同情と涙とを以てせられたるものと思惟せし右學監の招聘も一つのペテン式となりしことは今日瀧澤專任理事よりの言明により推知するを得べし

六、尙今日校長の石川醫學監に對する解職の如きも、前同斷德義を無視せる校長の處置と見ざるべからざることは、今日の狀態に於て豫測するに難からず

七、或は知らん、新任の遠山博士も斯る情實を知り給はで此渦中に飛び込まれたるやも測られず、然りとせば校長として否學校として何の面目かあらん

八、尙前條紛擾調停に校長と共に高島先生も關係せらるゝと云ふ風評さえ聞くに於ては實に默するに忍びざる處なり

右意見書の如く余は多くは云はず、之でも根本解決を告げたりと云ふべきか、否之でも吾々生徒に安心して勉强せよと云ふべきか、余は斷言す、最早黨派的紛爭を釀すべき時期にあらず、吾々生徒の依る處は一に歸せり、即ち學校本位なり、其學校にして、否其根本に於て一層紛擾を高めしめられたるものと想像するを得ん、果して校長の眞意那邊にあるや、大々的決心の下に意向を確め根絕せしめずんば止まず　以上

大正三年二月二十二日

日本醫學專門學校生徒　山本仁白ス（原文）

廿三日には意見書の事よりして相反目せる學生間に毆打事件を突發するに至り、廿六日は鹽見學生監は辭職し學生に告別の辭を述べぬ。

四月頃に至りて日本醫專法律顧問なる猪瀨氏は學生に語りて曰く、專任理事が二人にては萬事につけて不都合なり、結局一人にするか然らざれば第三者に委ぬるの外道なかるべしと、かゝる間に瀧澤、磯部兩氏の爭鬪はその極に達したるを以て、佃氏は仲人の勞を取り下の如き妥協案を學生に發表したり即ち、今日より五月十五日迄は兎も角、財團確立を磯部氏一人に任せ、期日までに不可能なりし場合にはその後は瀧澤氏に繼承せしむべし。

いよ〳〵十五日は來りしに、小島某なるもの磯部氏の依賴を受けて來校し、學生に告ぐるに磯部氏と自分も今日極力奔走中なれば、今暫くの猶豫を與へられたしと、恰もその頃磯部氏の口より濱野病院合

併云々の言ありし故に學生後藤哲雄、河野勝齊、中村壽松、奥本重定等はその實否を文部省に、或は該病院に正したるに、すべて虚僞なる事判明し益々磯部氏の信用をして失墜せしめたり

磯部氏は漸時自己の地盤の危殆に頻すると見るや、收賄を以て入學を許可したる學生、その他裏面に於て切れかたき醜關係ある學生等を饗應政策によりて糾合し以て、所謂磯部派なる一團を結ばしむるに至りぬ。十九日、同校講堂に開かれたる學生會席上に於て、磯部氏に心好からざる學生等は磯部氏及びその一派の彈劾演說を爲したれば、磯部派の學生等は大に憤慨し激論の末、遂に再び毆打事件を演ずるに至れり。大正三年六月十八日東京朝日新聞には「日本醫學專門學校の紛擾、生徒と學校の紛擾、理事者同志の反目」の題下に詳細に記載せられたり。この騷動以來腕力を以て立つ磯部派は學生間に大なる勢力を得て反對派をして沈默するの止むなきに至らしめたり。一面財團の理事者間にも漸時磯部氏は有利なる立場を得るに至れり。

(五) 磯部氏專横の時代

由來、同校は形ながらも財團法人として理事の制度あり、何事も此の理事會の決議に待つ結果となり居れるため、先に磯部氏はその職を退くに際し、理事會に諮りて其の去就を決せんとしたるなり。理事會は磯部氏に親近なる人々を以て組織せられ、特に最近より關係深き山根氏を理事として居れるが爲めに、氏に有利なるは勿論にして、六月三十日遂に瀧澤及び青柳氏等は眞泉病院を携へて全く其の關係を絶つ事となれり。間もなく磯部氏は堂々と復校せり。之れ磯部氏の最初より畫きたる寸法にして氏は自己に便利なる理由を以て、京都大學を止めて同校に生理學を講じつゝありし醫學博士天谷千松氏を迎へて校長としたり。然して石川氏を逐ひし後に磯部氏は再度學監として就任せる際の施政方針の演說は、學校が遠からず凡ての設備を整へ、指定醫學專門學校となるべき未來を力說したるものなりき。

かくして騒動は落着したれども、この紛擾によつて今まで陰蔽され居りし一大醜事實は曝露せられたり。卽ち磯部氏等が專門學校の許可を受くる際に登記せし財團は虛僞のものなりき。試みに登記簿を開けば、明治四十五年七月二十六日登記には資產總額三十九萬五千二百六十圓なりしものが、大正三年七月一日登記には二十一萬二百五十圓に減じたり。爲に氏は法廷に引き出だされ、裁判所より文書僞造罪として百圓の罰金刑に處せられたり。

既に瀧澤派と袂を分ちたる以上は、病院なる設備を失へる事なれば、一方の資格を失へるも同樣にして一時は氏の日本病院を代用し居たるも手狹なる理由も手傳ひて新に病院の建築をはじめたり。同時に幾棟かの小講堂も簡單ながら增設されたり。

大正二年十月廿三日に磯部氏は當時の學生會委員及び正副組長を神田淡路町なる自邸に招き饗應の末學校の經費不足の話を切り出したれば、一學生が「一體どの位足りないか」と質したるに「十萬圓許り足りぬ、然し自分にも成算あり、極力やつて八萬圓位は拵へるつもりだが、殘りの一萬五千圓はどうしても足りぬ、是非諸君の援助を仰ぎたい」とて、學生の醵金を希望したり。磯部派の學生大に忠義振りを發揮し、或は反對者を辯舌爽に說き廻り、或は腕力の脅迫的示威によりて屈服し、玆に同志會なるものを設立し、學生瓜生正雄(後に學生團より除名せらる)申告書を草し、之を大正四年六月五日警視廳に呈出せり、然して大正四年一月より六月迄の間に同校敎務課取扱保管のもとに一人四十四圓宛合計九千圓を醵金せり。

同志會に加入せず四十四圓の醵金を拒む者に對しては授業料を九十圓より百二十圓に値上げすべしと堂々玄關前に揭示して學生を威嚇したり。之れ實に一時の策略にして其の後非同志會員に對しても値上げを實行せし事はなかりき。抑も同志會規約の一ヶ條には本醵金は萬一第一回生卒業期迄に指定下附せられざれば返金すとありき。然して磯部氏は語りて曰く「君等は今醵金して置かねば後になつて必らず

あの時同志會員になつて居ればよかつたと後悔するに違ひない。然も同志會員に對しては卒業の際の寄附金は免除する特典もあるのであるから」と、切りに學生を甘言を以て釣りたり。

其の當時、學生中、日本醫專を指定學校と稱して入校し居たる者等もありて、之れ等は家庭へ寄附金の勸誘あるに際し、其の細條書の中に、指定を運動する意味の文言あり不都合なればとて抗議したる者ありし儘、其れ等の人々の家庭へは別樣の勸誘狀を送る等の窮策を施したり。かくして得たる九千圓の行衛には種々怪聞あれども、磯部氏等の稱する所によれば、當時建設されつゝありし解剖室、細菌室等の建築費に計上されたりと。

六月頃四年級の學期半年短縮問題は學校側より提出せられ、四年級にては「若し半年短縮し來春四月迄に指定が確實に來れば贊成すべし」と稱し當局の保證にていよ〳〵實行せられ四年級生は大正四年の夏季休暇中をも授業を繼續せり。

（六）磯部氏不信任と第一回の紛擾

學生は兎も角斯の如くして指定となるを一日千秋の思ひして待ち居たるなり。

然も、吉報は來らず。學生は學校當事者の態度に對し不審を抱き茲に實行會なる團體を作り、委員を選びて各方面に學校の前途に就きて訊さしむる處ありたり。此の際文部省に向へる一隊が携へ來れる情報こそ、全く磯部氏の今日迄の所言を裏切るものなりしなれ。

當時、委員が面接せるは福原次官なりしか、松浦專門學務局長なりしか失念したれど、學生等に應接して「君等は指定々々と云ふが、指定は第二の問題として、君等の學校は未だ假認可となつてる丈けではないか」と、却つて詰るが如き文句ありき。委員等にありては正に此の言は晴天の霹靂にも等しかりしなり。學生は今が今迄、かゝる不仕鱈とは氣附かざりき。二重のペテンにかゝれるものとして激昂措く

能はざりき。

漸くにして第一回生の試驗は近づきぬ。此の學生等こそ最も不幸なるものと云ふ可く、四ヶ年間高き月謝を拂ひ、然も普通の如く開業試驗を受けざる可からず、何等の恩典にだも浴する能はざるなり、從つて當局不信任の聲は漸次繁くなるにつれ磯部氏は一時氣休めの手段としてか「何月何日認可候也」とか又控室には麗々しく「本校卒業生は日本醫學專門學校醫學士と稱する事を得」など掲示せり。

然して一方第一回生を出す事につきて、其以前に文部省と何等かの妥協點を見出さんと奔走し、その妥協點の要領なるものは、官公立專門學校に在りても、開業試驗と同じき卒業試驗を施行するの例あるを以て、日本醫專の卒業試驗に於ては、私立醫學專門學校規則によりて文部省督學官及び醫術開業試驗委員を干與せしめ得の條文通り、立會を乞ふ事として他の醫專と同樣の結果を見る樣にしたしと云ふにありき。

かくして大正四年十二月は來りぬ。歲晩の風寒くして學生の前途實に暗憺たり。

一日磯部學監は四年級學生に告げて曰く「本校の指定は覺束なし、諸君等は成蹟がよき故、潔く國家試驗を受け、その力量を示されよ」と。今日まであらゆる口實を以て釣り廻はされし學生は茲に至つて突然賴みの綱を膠もなく斷ち切られしなり。甘言に奸言を積み剩へ金員をも捲き上げ、遂に土俵際に至りてその本音を表はし來る。學生は磯部氏の心事を慊らず思ひ、彼を敎育者として本校の上に置くを最上の恥辱とせり、寧ろ斷然辭職せしむるに若かずと、全校四百の學生は四ヶ年間の鬱憤を茲に發現せり。實に是れ止むを得ざる學生の心情のみ。この際立たざるを可とする論者あらんか、そは亡國的無氣力を以て溫順恭謙と誤る盲目的觀察に過ぎざるのみ、立て！吾人は立たざる可からず！

大正四年十二月十八日午後、宣戰の信號出す、『朔風寒し、城北の天地霜氣けむる中に、一道の熱氣鮮血を啜る快ならずや、本日午後四時より第二敎室に於て報告、辯論を交へんとす、大正四年最終の一

印象に光明あらしめん爲め奮つて諸君の參集を乞ふ』

四時開會、四百の學生は熱せり、實行委員も交々立ちて「今や考ふ可き時期は過ぎたり、只最後の實行あるのみ」と叫び全學生の團體を強要し血判を動議し、一、二年の血氣ある雄辯家等は血を吐くが如き激語を迸らせ、學校當局の虛僞、不誠實を罵り、指定あらずんば寧ろ廢校を擇ばんの聲、黃に光る電燈の下に轟々と渦卷きぬ。やがて二年級の須藤元立ち上り扉を指して「諸君之より直ちに日本病院に行かうではないか、明日と云へば熱が冷める、行かう、そして日比谷原頭で堂々公開演說をやらう」と一同は總立ちとなり直ちに神田淡路町なる日本病院指して襲擊に移りぬ。磯部氏京都へ出張不在。醫員等は狼狽一方ならず、窮余磯部氏舊友なる奧宮豫備海軍少將を招いて學生の鎭撫を乞ふ。學生は磯部氏に打電し歸宅までは何時までも待たんとて、委員等は數俵の炭と燒芋とを買ひ來り鐵門を閉し、數ヶ所中庭に炎々たる篝火を焚き、それを圍みて芋を嚙りぬ。この夜寒月晝の如かりき、夜更くるまゝに月光いよ〳〵冴えて人影墨の如く地に湧き、外套の上には霜氣冷やかに冰る。一團の人々、半面火影を受けて赤く半面月影をうけて蒼く、「霜滿軍營秋氣淸」の感いと深し。委員は玄關に入り磯部氏隱退を迫り直ちに承諾を求めんとせしかども、不在なれば明日まで待たれたしとの事に午前二時引き上げたり。都大路の電車も途絕えて、眞夜中を三々五々練り行く學生の姿ぞあはれ勇ましかりき。

十九日正午より再び大會を開催す。先づ各級に分れて夫々決議文を草し順次連名自署し更に小刀を執りて小指を切りて血判し堅き團結は血を以て結ばれぬ。日本人は血を見てはじめて勇むものなり。武者振ひとも云ふべき緊張せる氣分が壓するが如く室內に溢り、思はず白虎隊の詩を朗かに吟ずるものもありたり。かくして午後五時半、各年級の決議と血判が終れば、全學生は第二教室に參集開會す。委員の再選ありて各年級より七名宛新たに撰出せらる。先づ相互に決議文を示し合ひて磯部氏を招く、磯部氏來場に間ありしためその間を利用し腹心にして參謀の如き庶務課長篠原正雄氏を先づ匡さんとて壇上に

請す。學生等は彼が商人より收賄すること、品行修らざる事、豫科生を誘惑する事等を面詰し辭職を迫りたれども、同氏が辭職する事は茲にて明言し難しと頑として應ぜざるを見るや、學生等は大に怒り鐵拳飛雨の修羅場を演ずるに至れり。此時已に磯部、吾妻兩氏理事室にありしかば、直ちに出席を乞ひ之を壇上に招置し、その面前にて四年級は匠勝造、壇に上りて決議文を朗讀し、以下三年級は安部路人、二年級は星野孝壽、一年級は佐藤各年生順次決議文を讀み上げたり。その中三年生の決議文は次の如し

決　議

一、磯部專任理事兼學監に對し責任を明かにし辭職を勸告す

二、一般理事をして責任を重じ財團を確立せしむ

三、前第一第二項を履行し能はざる場合は無條件にて財團と共に本校及本校學生を文部省に引渡さしむ

四、專門學校指定條令に適合する專任教授を置かしむ

五、第一回卒業生より指定の恩典に浴せしむ　以上

以下三年級一同百十一名連名血判

次いで學生は、指定問題に就て糺し、財團、醵金等あらゆるものゝ虛僞を完膚なきまで追究し、『若し良心あらば今宵潔く切腹して責を明かにせよ』『君は教育者にあらずして詐僞山師にあらずや』の聲盛に起りぬ。兩理事切りに陳辯に努めしも聞かず遂に第一條を承認せしめたり、突擊成功、萬歲聲裡に九時半散會し、冴え返る月影を浴びて家路に就けり。

二十日　晴（月）

昨日の事件今朝の萬朝、朝日、讀賣、每夕等に記載さる。廿八名の委員は七時校門に集合雜司ヶ谷の山根氏宅を訪ふ。一時間余にわたりて陳情したるに、氏の眼には見る〳〵涙溢れ、（この涙こそ後にて考

へれば何の謂か知らねど當時はその一滴が學生委員を感激せしめ鎭撫するに偉大なる効ありしは疑ひなき事實なりき）『自分も之から献身的に盡力せう、諸君にも同情に堪えぬ』と云ひぬ。

委員は正午歸校し三時大會開催の掲示を出し、直ちに委員會に移る。熱狂せる學生等は刻々に集合して教室よりは「血染の歌」の合唱潮の如く響きぬ。

午後四時半開會。瓜生議長の報告あり。三年級に於て級の意向統一せざる爲め安部は決議書を楯に過激派に應戰したるため議場は全く混亂に陷り、二年級の最硬派は最も憤慨し遂に一時休會のやむなきに至りたり。夜深くなるにつれ殺氣滿つるを以て各級に分けし後も爭鬪絶えざりき。九時過ぎて散會、委員四名（花村、片岡、安部、佐藤憲、宮元）は磯部氏を訪ふ。

二十一日（火）晴雨

同盟休校の汚名を受くるは文部省に對しても不得策なりとて出校す。午前十一時、委員一同は文部省を訪問し、瓜生、山田、鈴木、安部、星野の六名は次官室に案内せられ、福原次官と對座一時間半、昨日準備したる種々の質問を順次に發し、財團、指定、教授、理事、理事長、認可問題等を質し更に次官局長立會の上面會を約して午後一時辭す。歸校後委員會を開き報告事項を纏め四時過ぎ開會、瓜生委員長より次官會見の報告あり、今日はすべて樂觀的となり笑聲時々堂に溢れぬ。昨日の悲憤今日の笑聲、何ぞ運命の戲弄の繁なる。二年級には突如、同級委員懲罰問題起りて紛亂せしが調停ありて止む。

二十二日（水）晴

前日約束せし次官局長立會の上學生に面接する事は本日延期となりたり、磯部氏より電話あり「篠原事件にて訟訴起らば、學校財團の虚僞は再び彼の口より曝露されて遂には學校は拾收すべからざる破滅

に陷るべし、諸君の愼議を煩はす」と直ちに委員會を開く。山田、藤牧、星野は同問題にて山本、岩島教授をたづね、片岡、花村等は議會に山根氏を訪問す。

二十三日（木）晴

委員は午后一時登校し電話にて問合せたるに松浦專門學務局長は議會本會議に出張せる爲め今日も會見延期となれり。篠原問題にて山本、岩島兩教授に調停を依頼に出向きたる委員三名は十一時過ぎ戻り來る。臨床講堂にて委員會を開き主として篠原問題を議す。瓜生議長が昨夜磯部氏訪問の際の話し振りによれば、多分問題は「金」に歸着するものらしと報告せり。指定と云ふ大問題の前には少しの屈辱も忍ぶ度量を必要とすると云ふが大體の意向となれり。連日連夜の奮鬪殊に就床は十二時を過ぎ時には一時二時になるを以て委員等は疲勞し切りて眼は充血し顏色惡く隙さへあればうつら〳〵と坐眠る。篠原問題專任委員は匠勝三、小室卓爾、後藤の三名、會見期を促す爲次官訪問委員を片岡、山田逸爾、星野孝壽とす、會計部帳簿の保管は花村泉に一任す。瓜生は急性腎臓炎を發す。

二十四日（金）晴

議長病氣。鈴木副議長之に代る。次官に今朝面會せる一行かへり來り、篠原問題專委任員よりも報告あり山本、岩島兩教授に委任狀を出すこと、篠原氏不正行爲取調書をつくる事を決議す。會計係は毎日の辨當代かさむを以て明日よりは各自辨當持參の事を動議し一時半散會。中村丈夫、安部路人、迫田順一は松坂屋に行き血判の決議書を表裝すべき金爛布、紐などを買ひ、桐の箱に納む。

二十五日（土）晴

委員は七時集合の豫定なりしが連日の疲勞にて顏の全く揃ひしは八時過ぎたり。篠原問題の委員四名は昨夜病院に夜を明したり。文部省掛りの十五名中十一名は九時半出發、局長の室に招せられしは次官との約束よりも一時間遲れて十時半なりき。やがて次官はわざ〳〵局長の室に臨席されこゝに五日間待ちに待ちたる會見は實現せられぬ。山田、藤牧、後藤、鈴木、片岡、安部、加納、星野、佐多、佐藤、花村は正十二時迄、先日同樣の質問を更に具體的に確かめ、次官と局長の言に少しも矛盾なきを聞きてかへる。四時半まで費して質問答辯の記錄を各自の記臆より呼び起しつゝ綴る。篠原問題は前記二名の教授に一任する事とす。それより學生大會に移る、瓜生議長發熱四十度出席不能なるにより、鈴木副議長代理をなし關君平立ちて文部省訪問の回答を朗讀し歡聲裡に散會せり。當時學生等は福原次官等の一時氣休めの言葉を眞に受けてかくもよろこびたりき。思へば愚の極みなりしよ。之にて本年の大會は打切り、各級に分れ、金爛に包みし決議書を捧げて一同最敬禮し、出缺の點呼の後、一回、血染の歌を合唱して袂を分ちぬ。空には星冷やかに冴えて顧みれば講堂の窓を洩る火光のみ黃なりき。（終り）

改選前の委員は失念したれど改選後は次の如し

四年級○後藤哲雄△山田逸爾○藏牧支雄△匠勝三△花村泉△瓜生正雄△關君平

三年級○中村丈夫○片岡巳代治○加納篤美○安部路人△八木忠作△小室卓次△鈴木彰

二年級○迫田順一△佐々木二良△星野孝壽△池田清○須藤元○尾形文雄△宮本卓

一年級○原三郎○並河元勝○佐多正藏○藤中正○吉田春秋○佐藤憲二郎○佐々木篤行

然して△印十二名は大正五年五月の擧に際して學生團より除名されし者なり。之によりても當時の委員中、如何に磯部派の勢力ありしかを察するに足るべし。

——（安部路人記）——

紛擾眞相錄

（大正五年一月より七月迄）

一　月

十二日　三階建新校舍工事盛なり

十四日　四年級成發表

十九日　大阪方面金主殆んど決定せりと磯部理事は四年級の教室に來りて話せり

二　月

十四日　四年級全體左の決議をなす

一、醫術開業試驗を受けざる事

二、醫師試驗も受けざる事

三、本校卒業試驗も指定認可まで受けず

三　月

各學年、二學期試驗にて忙しく暫らくは學校問題を等閑に附す

四　月

一　日　磯部理事來校小話あり

血涙錄、

正義ニ代ユルニ陰險ナル策略ヲ以テシ慈父ノ愛ヲ以テ遇スヘキ學生ヲ獄囚ノ如クニ桎梏シ德望ニヨリテ感化スヘキヲ脅迫ヲ以テ自由ヲ奪ヒ眞實ニ代ユルニ虛僞ヲ教ヘ虛僞ヲ彌縫スルニ更ニ虛僞ヲ以テシアラユル手段ヲ講シテ法網ヲ免ルヽヲ誇トシ自己ノ利慾ノ爲ニハ五百ノ學生及其ノ數千ノ關係者ヲ犧牲ニ供シテ顧ミズ教育ヲ楯トシテ社會ヲ欺キ恐ルベキハ純潔ナル幾多青年ノ前途ヲ慘憺タル沈倫ノ底ニ沈メ再ビ歸ラザル青春ヲ泥土ヨリモ輕ク蹂躪シ學生ヲ泣カシメ故山ノ老親ヲ憂ヒシメカクシテアラユル精神的事業ヲ毒シ道德ヲ害シ恬トシテ恥ヂズ然モ益々橫暴ニ陷ラントスル教育者アリトセヨ然モ東都ノ一角ニ傲然ト在リトセヨコヽニ亦カクノ如キ青年アリト假定セヨ

彼ハ正義ノミヲ知リテ未タ虛僞ヲ知ラズソノ心ハ未ダ純潔ニシテ他人ノ言ハ疑フヨリモ先ニマヅ之ヲ信シ殊ニ己ガ師ノ言ヲ信スル事神ニ使フルヨリモ忠實ナリサ

二　日　成蹟發表

十一日　四年級は茲に四ケ年の修業を終へ、卒業試驗受驗生となり各日登校して前後策につき協議する所ありたり。各學年も一級宛進級し新入學生百三十名ばかり入校す。入學式に磯部理事は學監なりと明言す。

二十五日　全校學生合併大會を開く、磯部理事は附屬病院に來り居りしより出席を乞ひしに彼は斷然拒絕し「諸君は昨年十二月に血判をして迄自分を學監の椅子より排付せるに非ずや、余は現在學監にあらず經營者なれば此の指定問題には責任なし、諸君と逢ふ必要も無し」と答へたるより學生一同大に憤り、彼が誠意のなきを確認し保證人學生大會を開かんとせしが保證人委員長たる奥宮海軍少將旅行中なるを以て延期せり。

全學生團の活動

吾人は先に本校理事の不誠意を完膚なき迄に筆誅し盡せり。然して茲に愈々全學生の活躍を述べんとす。四月中旬新學年開始以來、既に三月の學年試驗にて四ケ年の修業を終え、正に來らんとする卒業試驗受驗生約七十餘名を出し、新たに四、三、二各學年幷に四月入學せる百餘名の一年級を以て授業は開始せられたり。卒業受驗生は假に舊四年生と呼び、指定なき本校の卒業試驗を受け校學を出で醫

レバソノ師ノ苦境ヲ見テハ己ガ苦痛ヲ忍ビ時ニハ金錢ヲモ提供シカクシテ師ト共ニ協力シテ一大事業ノ成功ニ艱食ヲ忘ル誠ニ犧牲的精神ニ富メリ彼ハ「正義」ト「愛」トヲ信シテ策略ヤ虛僞又ハ無恥ヲ惡ムコト死ヨリモ甚シソノ青年ノ心ハ純ニシテ一點ノ暗翳ダニ認ムルヲ得ズ故ニ一度ソノ墮落ニ反抗シ正義ノ爲國家ノ爲ニ所信ヲ貫徹セントスルヤ私情ヲ拋棄シスヘテヲ敵トシテ恥ヂザルナリ

實ニ後者ハ日本醫學專門學校五百有餘名ノ學生ニシテ前者ハ同校磯部理事ナリシナリ學生ハ師ノアラユル不德ヲ知ルニ及ンデソノ失望ト落膽トハ如何許ナリシヅ正義ノ爲ニハ師ヲ敵トセザル可カラズ師ヲ擁護セントスレバ正義ハ永生ノ屈辱ヲ受ク可ク學生ノ心中ハ平ノ重盛ニモ似タリキ學生ハ已ニ幾度トナク師ノ反省ヲ乞ヘリ然レドモ學生ノ諫言ハ容レラレス反テ常ニ嘲笑ヲ以テ葬ラルヽニ過ギザリキ大和民族ノ血液ハ赤ク心臟ニ湧キ返リ大和魂ハ正義ノ前ニハ鬼神ヲモ挫カントス是レ武士道ノ精神ノ多少ナリトモ宿レル日本青年ノ默止スル能ハザル所以ナリ大

師試驗を受けんか、又は指定の來るまで待たんかと、一週に日を定め時々登校し集合しつゝありしなり。在校生は不完備なる教授を受け潛在せる滿腔の不平を抱き學校當局の學生に對する態度を研究し如何に吾人の運命の開拓さるゝやを眺めつゝありしが、學校側にては新築三階建の校舍の遲々として工事運ばざるに反し、田端に新設せる數棟の宏壯なる寄宿舍は完成せんとし一年級全體及有志の人に規則的に入舍を命じ、建築課長とか稱せる小畑及磯部理事の營利的事業を計畫せり。

學校に於ける授業は徒らに合併教授のみ多く三、四年級の內科外科の各科は些の系統なく、狹き教室に二百餘の學生を押し込め同一の講師に同一の講義を爲さしむ、宛然醫學校時代の講習の如し、本校には專任教授としては病理、獨逸語等に一二あるのみ、他は概ね講師なり。如斯き教授には專門學校の學生として堪え忍ぶべきにあらず。然かも磯部は彼が特別の緣故を有せる二三の學生を委員とし高壓的に學生の不平を抑へ、且詭辯を弄して指定運動の進捗を流言せしめぬ。

九十の春光今や將に盡きんとして、三春の行樂も散り逝く花に醒め、新綠の五月を迎へんとする吾等學生の若き瞳は正義に輝きぬ。革命！噫忘れんとして忘るゝ能はざる五月一日よ、遂に革命の火は燃えぬ。滿を持されたる矢は既に弦上を離れたり。降魔の劍は遂に

正ノ青年ハ積極的ナラサル可カラス重盛ノ如ク消極的ノ處置ヲ好マサルナリサラハ如何我等學生ノ態度ハ如何ニスヘキカ吾人ハ正義ノ爲ニハアラユルモノヲ犧牲ニシテ悔ヒス死ヲモ厭ハスサラハコヽニ徹底的ニ最後ノ手段ヲ以テ一ハ正義ノ爲メ一ハ指定獲得ノタメ磯部氏ノ排斥運動勃發セシメタルナリ

抑モ本校ハ大正元年九月第一回ノ新入學生ヲ以テ日本醫學校ヨリ認可專門學校ニ昇格シ學生ハ指定條令ヲ賴リテ二年後ニハ指定來ル可シトソレヲ唯一ノ樂シミトセリ學校當局ニテモ指定ハ必ラス第一回生ニ間ニ合フ樣ニ來ルモノト斷言セリ當時ハ校舍トシテハ濟生學舍時代ヨリノ遺物タル二階建約二百坪ハカリノ赤塗老廢舍アリソノ側一ニ小附屬病院アルニ過キサリキヤカテ病院ハ取リ拂ハレソノ跡校ニ現在ノ第一第二教堂ヲ有スル百八十坪ノ二階建校舍ヲ得タリ當局ハ之ニテ設備ハ充分ナリト稱シ我等モ之ヲ信シタリヤカテ二年ハ過キントセル大正二年ノ春カノ瀧澤磯部兩氏ノ爭ヒニヨリテ財團ハ一

拔かれたるなり矣。

五月一日（月）

天は快きまでに晴れ渡れり。此の日平常の如くノートを手にせる學生は學校に集まれり。四年級はその大講堂に七時より九時迄無事授業を終え、此の時間に三年級は勝沼先生の診斷實習を臨床講義室に學びありしが、先生は少し時間を早く退場しぬ。其の機を以て全校中最も元氣あり革命の氣に富む三年級は、突發的に『舊四年は既に卒業試驗期日も迫り本意なく指定資格も無き學校を校則により追ひ出されんとす。吾人は之れを救はざるべからず、機は逸すべからず』と、茲に欝積せる炎は點火され、四年級の講堂に侵入し、遂に全學生大會を開催する事になりぬ。

舊四年生は此日集會の定日なりし故、來校せり。二年級もノートを抛ち講堂に集りぬ。一年級は入校日猶淺く學校の事情も知らず、長閑な顏して天谷校長の授業を受けつゝありしが、本大會は全校生の運命を決するものなれば一年級も加入せしむる方宜しかるべしと衆議一決し呼びにやりしに、校長は教室の扉を抑へて一人も出さず止むなく授業の終るを待つことにし、其の間熱烈なる慷慨演舌に血を湧かし意氣頗る軒昂なり。

拾壹時全學生集まる。磯部理事不信任案提出前に磯部と醜關係ある一年級の阿久津某を初め五名ばかり壇上に立たしめ、昨年九月本

大虛構ヲ有スル事ヲ曝露シ文部省ヨリハ虛僞ノ財團ニ對シ欠陷ノ充實ヲ嚴命セラレ裁判所ヨリハ文書僞造ノ罪トシテ百圓ノ罰金刑ニ處セラレタリ之レ大正四年三月ノ事ナリ之ニ增シテ學生ノ最モ苦痛ナリシハコノ一大醜態ノ白日ノ下ニ示サレシ以來本校ト其當局ニ對スル社會ノ信用全ク地ニ墜チタルコト之レナリ之ヨリ先キ瀧澤氏ハ附屬病院タリシ眞泉病院ヲ携ヘテ分離シ財團ハ有名無實ノ金額ニ過キサリシ爲メ以前二十八萬圓ノ登記ヲナセシモノ大半ハ無効トナレリ二年ハ經過セリ指定ハ勿論來ラス學生間ノ指定運動モ漸時熱度ヲ加ヘ委員ニ撰定セラレテ或ハ文部省ヲ訪ヒテ意見ヲ聞キ或ハ當局ヲ檄勵シテ設備ノ充實ヲ迫リ漸ク病院病理解剖室臨床講堂外科手術室ヲ必要ニ迫ハレテ建設セラレタリ學生ハ本校ノ發展ヲ喜ヒ文部省ニ逼レハ常ニ曰ク「日本醫專ハ未ダ財團ノ補充全カラス現在ノ狀態ニテハ設備モ頗ル不充分ナレハ指定所ニアラスヨク設備ヤ教授ヲ指定條令ニ適合セシメヨ」ト之ヲ當局ニ質セハ磯部氏ハ曰ク

校豫備講習會に入會以來種々奸策を以て會員を強い若干の據金を爲さしめ、四月に無試驗にて一年級に入學出來得る樣に運動せる事實を告白せしめ、斯の如き不良學生は如何にすべきやを全學生に謀りぬ。衆議は主謀者阿久津某を除名することにし退學を勸告し、僅かに鐵拳の制裁を免れ吾人の視界を逃れ去る。他の四名は改俊の情あれば謹慎を命じ一年級全體は上級生と共に行動したき旨を認め、血判連署して團結に入り茲に堅き結束を作れり、午後一時休會、午食後二時再び會開す。

午後五時に至り次の決議文は決定され、且神田淡路町の日本病院内なる磯部理事宅に押し寄せ自決せられん事を迫まる。

決　議

吾々學生は日本醫學專門學校の指定に對する素志を貫徹せんが爲めに左の事項を決議し敢て違背なからんことを誓約す

一、山根正次氏及磯部檢三氏は吾が校指定に對し毫も誠意なく却て障碍者なる故を以て本校との關係を斷たしむ

二、此の問題解決まで同盟休校をなす

三、若し犧牲者を出す時は全校生徒之に殉ずる事

以　上

大正五年五月一日　　學　生　一　同

斯くして夜に到り一同は日本病院内に集まる、磯部病氣と稱して

「現在學校ニハ金無シ指定ヲ得ルニハ一萬五千圓ヲ要ス學生カ寄附スレハ明春四月迄ニハ指定ヲ得可シ」ト學生ハ同志會ナルモノヲ組織シ一人四十四圓ツヽ三百名ヨリ寄附スル事トナレリ金ハ大正四年一月ヨリ六月迄ニ分納サレ現在總額九千圓ニ達シ爲ニ當局ニテハソノ金ヲ以テ細菌室解剖室ヲ建設シ一方學生ハ指定運動ニ益々熱シテ殆ント寢棄ニモ忘ル、暇ナカリキ同六月頃四年級ノ學期半年短縮問題ハ學校側ヨリ提出セラレ四年級ニテハ「若シモ半年短縮シ來春四月ニ指定カ確實ニ來レハ贊成ス可シ」ト稱シ當局ノ保證ニテイヨ〳〵實行セラレタリカクシテ不安ノ中ニ一縷ノ光明ヲツナキテ月ヲ送リシカ學生委員ノ活動ニツレソノ探索スル所ノモノハ一トシテ悲觀ナラサルモノハ非サリキ財團ハ確立セスシテ主務省ヨリ屢々督促ヲ受ケシカトモ依然トシテ假認可ニ止マリ學校ニハ資金乏シクシテ校舍ノ差押ヘヲ受クル事頻々タリ設備ハ一トシテ完全ナルモノナシ之ヲ文部省ニ質セハ暗ニ本校當局ノ不信任ヲ云ヒ次ニ

逢はず、西神田警察署巡査數十名、提灯を手にし、吾人を警戒す、學生が意志は飽くまでも堅く磯部と對決せずんば徹夜も厭はざる氣慨を察し署長の好意に依り、看護婦を從ひ玄關に病氣と稱せる磯部は現はれぬ。學生は熱辯を以て、事茲に到る、萬止むを得ざるの狀態となれりと。切に氏の自決せられん事を交互に述ぶ、約二時間、されど氏は遂に學生の心中を察せず之れを拒絶し圍を排して中に入らんとす。二三の學生之を止めんとせる折しも、學生中の異分子と認められし磯部の腹心の者共に支へられ辛じて内に逃れ去る、學生の激昂はその極に達しぬ。されど相手のなき喧嘩は出來ず、茲に又々署長を煩はし、委員十名を上げ署長警官立ち合の上病院内の一室にて磯部と對決を計り自餘の學生は、神田明神境内にて報告を聞くまで團體集合を許可さる。夜も早や更け渡りて十二時も過ぎし頃、委員は歸りぬ、而して矢張り交渉の破裂を報告し、明朝學校にてその前後策を講ずることに決し、解散したり。

五月二日（火曜）午前九時開會

此の日より同盟休校となれり。第二教室に開會、數名の異分子、磯部直參の子分關係ある醜漢の處決辯明を求め、彼等が退散を待ちて次の協議に移る。

一、磯部理事に對し更に面會を求め、處決を促し、及醵金の返濟を迫まる事

財團ノ不確實ヲ責メ「諸君ハ今指定ニ運動スル時ニ非ス認可學校ノ取消ヲ受クルヤモ計ラレサル運命ニアリ」ト一面財團理事間ニハ磯部氏專横ノ譏リ高クソノ財團ノ獨占ヲ憂ヒテ資金ヲ寄スルナク社會ノ同情モ又毫末モ集ルナシ「學生ヲ思ハスハ彼ノ學校モ當然廢校スヘキモノナリ」トハ同シク文部省ノ言ナリシナリ總テノ事情ヲ綜合スルニ指定問題ハ頗ル暗憺タル絶望ノ雲ニ閉サレタルニ似タリ

大正四年十二月ハ來リヌ第一回生卒業ニハ數月ヲ余スノミ磯部學監ヲ質セハ「指定ハ覺束ナシ諸君等ハ成績カヨキ故國家試驗ヲ受ケヨ」ト其冷然トシテ前說ヲ翻スコト弊履ヲ捨ツルヨリモ甚シ學生ハ之ヲ聞キテ憤激ニ堪エズ專任理事兼學監ニシテ事實上財團ト學校ノ實權者タル磯部氏カカクノ如ク不信任ナレハ之ヲ辭職セシムルニ若カストシテ遂ニ十二月十八日ニ期セシテ滿場ノ一致ハ激烈ナル慷慨トナリ其夜三百名ノ學生ハ神田淡路町ナル磯部氏宅日本病院ニ迫リテ其處決ヲ乞ヘリ翌十九日ハ再ヒ大會ヲ催シ決議文ヲ

二、山根理事長に處決を迫る事

三、文部省に上申する事

以上三件に對し熱心なる討議の末第一件に關しては磯部氏に誠意なきこと明白なれば今更面會の必要なく、醵金返濟請求は原案通り可決し、第二件は山根理事長に處決を迫まること。第三件は十一名の委員を撰定して歎願書を作製し一同血判して之を文部省に提出することとし正午散會。駒込署より十數名の巡査出張警戒せり午後三時三百餘名は雜司ヶ谷なる山根理事長宅附近に集合、理事長に面會し昨夜の決議文を朗讀して質問する所ありしも確答を得ず六時解散せり。

五月三日（水）

午前八時校内に集合協議の結果、高田文相宛の嘆願書を作製し全生徒連名血判して午後二時九段牛ヶ淵公園より隊伍整然文部省を訪ふ歎願書の内容左の如し

嘆願書

謹而文部大臣閣下に嘆願す吾等醫學專門學校生徒一同は本校指定問題に關し學校當局の誠意毫も認むる能はず將に第一回の卒業生を出さんとするに際し尚指定を得る能はざるは吾等五百餘名の學生及此に伴ふ幾多の父兄の憂慮は今や其極に達し學生其堵に安じ學業に就く不能伏而閣下の裁決を仰ぐ我等刻下の窮狀に對し此が

作製シ一同左手ヲ裂テ血判シ堅キ團結ハ組織サレヌ決議ノ要項次ノ如シ

決議

一、磯部專任理事兼學監ニ對シ責任ヲ明カニシ辭職ヲ勸告ス

二、一般理事ヲシテ責任ヲ重シ財團ヲ確立セシム

三、前第一第二項ヲ履行シ能ハサル場合ハ無條件ニテ財團ト共ニ本校及本校學生ヲ文部省ニ引渡サシム

四、專門學校指定條令ニ適合スル專任教授ヲ置カシム

五、第一回卒業生ヨリ指定ノ恩典ニ浴セシム

カクシテ大會席上ニ磯部專任理事ノ出席ヲ求メ遂ニ磯部氏ニ對シテ第一條ハ直チニ證認セシメタリ庶務課長篠原正雄氏ノ免職モ同時ニ行ハレタリカクシテ根本的ノ財團ノ革命ヲ約束シテ大体ノ騷動ハ落着ヲツケ其後山根前校長ハ理事長トナリ二月中旬ニハ財團寄附行爲改正認可モ下附セラレ同時ニ三階建校舍ノ新築モ起工セラレタリ此頃財團ニ於テハ松村内田兩

措置を執られん事を茲に血判連署して歎願す

大臣不在なる故委員八名は福原次官松浦專門學務局長に面會し種々陳情の上歎願書を提出したるが次官は『大臣不在中なり今直ちに何等の措置を執るを得ざるも諸君の意は諒とし居れば今後も飽く迄學生らしき態度を續けられんことを望む』と述べ、總代は一同に經過を報告し、同三時歸校したり。此の日學生は學校より生徒鎭撫の爲め午後四時三四年生の保證人會議を開會せんとするを知り委員を校門に出して、涙を振つて保證人諸氏に對して同情を懇願し、定刻に至りて四十餘名出席す。學校側よりは天谷校長山根礒部東の三理事列席陳辯を努めしが會議半ばに學生側より生徒全部の立會を申込み、交渉の結果十名の總代を入場せしむる事となり、七時頃會議終るや保證人學生聯合の會議を開き、奥宮海軍少將座長席に着き意見を交換し、當局が誠意なき事を詳しく知るに及び、憤然學生に同情したるも到底少數の保證人にては効なければ四日午後五時より全校學生の保證人大會を開催し、學生側の代表者も參加して協議を重ねる事となり十時散會せり。

五月四日（木）

午後一時參集す昨夜學校理事者側より保證人に對し學生の鎭撫策を依賴せるに關せず、控所に退學處分十三名無期停學處分廿三名の掲示あり。然かも其の人撰及理由頗る不鮮明にして全學生憤慨の極

氏辭任セラレ山根、東、礒部三氏ノ有トナレリサレハ學生ハ山根理事長ノ人格ニ信賴シ指定獲得ノ一日モ早カラム事ヲ希望シツヽ一時鎭靜シテ勉學ニ耽リヌ一方委員ノ活動ニヨリテ文部省ノ意見ヲ問ヘハ「本校ノ財團ハ指定學校ノ財團トシテハ不充分ナリ少クトモ現金五萬圓其他七八萬圓ノ認メ得ヘキ財源ヲ有セサル可ラス」ト要スルニ現金五萬圓カ先決問題トナレルナリ學生ハ今ハ學校當局ト教授ト保證人ト調和シテ運動スルノ最上ノ良策ナルヲ知リコヽニ一月十六日保證人會ハ學生側ヨリ召集セラレタリ學生委員ノ報告及協議ノ後保證人委員撰定セラレ學生ト共ニ保證人ハ社會的ニ活動スル事トナレリ保證人委員及其有力者コハ奥宮海軍少將田中海軍大佐中岡醫師朝比奈知泉佐々木安五郎伊東知也桶口龍峽氏等ヲ數フルナリカクテ當局モ保證人委員モ學生委員モ東奔西走資金調達ニ勞レタリ久原氏ヲ說カンカ爲學生委員ハ水戸ニ或ハ大阪ニ行キタル事モアリシナリサレト何レノ方面モスヘテ失敗ニ終リテ疲勞ト絶望ノ他ハ

に達す。やがて學生は第二講堂に於て今夕五時より開かるべき保證人會議に各級より十名出席し善後策を講ずる事を決議し折柄登校せる校長に處分を受けしものゝ理由如何を詰問せしが校長は「退學處分を受けしものゝ姓名は知れども停學處分は之を知らず」と無責任に答へたり。午後五時半より保證人大會を開く。奥宮少將岡田理學博士を初め二百五十名參集し奥宮少將を座長に推し學生側よりも代表委員説明の爲め列席す。磯部山根兩理事の出席を求めしも不誠意なる當局者は應せず依つて奥宮衛佐々木安五郎伊東知也新井忠三郎清水廣良大角桂巖松本正二丸山長四郎諏訪龜太郎西澤本次田代売介小板久馬吉中岡吉六吉澤登具田村賢一渡理三郎高木寛良岡田博士等を實行委員に擧げ、處分の取消方を當局に交渉し且磯部理事に辭職を勸告するの決議をなし、午後十一時散會せり。一方學生側にては醫化學教室に集合し委員を派し各教授を訪問し、先般の教授會の模樣を聞き、且今後教授諸先生には學生に同情せられん事を懇願せり。又保證人會議中は會議の模樣を傳達し會終るを待ちて其の報告を聞き翌曉午前一時散會せり。

五月五日（金）

午前十時第二教室に集合す。此の日學校にては教室修繕の理由にて臨時休業を掲示せり學生一同闥を排し塲内に入りし爲め、教務課にては駒込署に通知し署長の鎮撫方を依頼せるも、署長に陳情せる

何者モ得ル所ナカリキ、コノ時中岡保證人委員ノ提議ニテ明治大學ト本校トノ合併問題カ緒ヲ開ケリ當時磯部理事ハ學生ニ公言シテ曰ク「私ハ確實ナル後繼者アル時ハ潔ヨク何時ニテモ退キテ學校ノ經營ヲ委ヌ可シト」中岡氏ノ談ニヨレハ明治大學トノ交渉モ一定ノ價額ヲ以テ讓リ渡シノ話モアリシナリト云フサレハ學生ハ一方五萬圓ノ運動スルト同時ニ他方ニハ合併問題ニハ中岡氏ニ依頼シ極力ソノ實現サレンコトヲ希望シ更ニ樋口氏ヲ介シテ間接ニ明治大學ノ意向ヲ探リシコトモアリキ其後磯部氏ノ意向ハ變リテ頑トシテ合併問題ニ耳ヲ貸ササルニ至レリ總テノ運動ハ遲々トシテタヾヒトリ歳月ハ矢ノ如ク遂ニ大正五年四月ハ來リヌ四年級ノ修業試驗ハ終リタレトモ指定ハ來ラス學生ノ不安遂ニ絶頂ニ達セリ學生ハ四年間ノ陰忍ヲコヽニ一時ニ爆發セシメタリ元來四十四圓ノ同志會寄附金ハ本年四月迄ニ指定來ラサル時ハ拂ヒ戻スヘキ口約ニテ成立セシモノナリ加之學校ニテ書面ヲ以テ卒業セハ直チニ開業シ得ト明記

に却て學生に同情したり。學生は退停學處分に對し長澤及鹽見學生監を招し、その意義なき處置を責め兩學生監は學則第何條何れによるかを答ふる能はずして、壇上に窮せり。學生は泣いて衷情を訴へ其辭職をせまり、滿堂嘘唏の聲に滿ちたり。學生監は責任を以て自決を明答せり。同日助手全部は辭職したりき。今夜牛込區砂土原町土佐協會に開かるゝ保證人委員會の決議の結果を聞く爲め、午後六時第一高等學校傍の西敎寺に學生一同は集會し同九時散會す。

五月六日（土）

六時半第二敎室に參集大角保證人實行委員は昨夜の保證人委員會の報告をなして後、一旦文部省に行かる再び歸りて意味深き「夢物語」を告げぬ。學生は夫より今晩六時より敎授の參集を乞ひ、今回の擧に就き詳細に陳情せんことを決議し、直ちに其の實行に着手せり。午後四時學生一同第二敎室にて各敎授の參集を待つ、午後六時前刻委員を派し參會を求めし際快諾せられし幾多の敎授は、學校當局の惡辣陰險なる妨害に依り、出席者甚だ少なく、爲めに再び委員を以て訪問せしむ。やがて九時三宅清水勝沼岩島池上丸茂長澤椎名犬塚山本櫻木山內原桑名の十四敎授出席せらる。學生は交々立ちて學校の過去と現在と當局の不誠實及學生の窮狀を訴へ、或は血涙を以て或は熱辨を以て說き去り說き來り、頗る各敎授の意を動かせり。敎授側よりは清水勝沼丸茂山本池上の諸先生壇上に立ち、學生に同

セル端書ヲ學生ニ交付セル事實アリ騷動ノ緒ハ之等ニヨリテ擧ケラレタリ礒部氏ハ同志會委員ヲ脅迫シテ曰ク「金ノ入用ナルモノハ個人ニテ名刺持參シテ取リニ來レカクノ如キ者ハ學校ノ指定ニ對シテ何カ異圖アルニ相違ナキ故相當ノ處分ヲ爲スヘシ」ト礒部氏ハマタ前四年生徒ニ告ケテ曰ク「試驗ハ恐シキモノニアラス醫師試驗ヲ受ケヨ」ト廿五日午後三時全校生徒ノ大會ハ開催サレ礒部氏ニ質ス所アラントシテ招キタルモ應セス更ニ「諸君ハ血判マテ爲シテ己レヲ排斥セシニアラスヤ現在自己ハ學監ニアラス聖ニ經營者ナレハ指定問題ニ責任ナシマタ諸君ニ逢フ必要モナシ」ト而シテ本年四月十一日ノ入學宣誓式ニハ「自分ハ開校以來ノ學監ナリ」ト公言セル也山根理事長ハ若シ四月迄ニ指定來ラサレハ公職ヲ擲ツ可シト稱シナカラ學生ニ對シテ頗ル冷淡ナリキ幾多ノ事情ハスヘテ學生ノ反感ヲ誘ヒ學生ハ遂ニ意ヲ決シテ卅日ニ保證人學生聯合大會ヲ開キ斷然タル處置ニ出テン事ニ決定セリ然ルニ學校ニテハ豫メ會場

情の意を表し今後の援助を期せらる。やがて散會せるは午前一時星稀にして風吹き荒び熱烈なる吾等が頭腦に飽く迄も持久戰によりて目的の彼岸に達せん事を暗示するものゝ如し。

五月七日（日曜）

午後一時學生は學校に參集せるに教室の入口は凡て釘を以て閉鎖され、二階の窓さえ棒にて閉されたれば一同止むなく協議の結果根津演藝座を會場と定めたり。

爾今演藝座を開場として各學生は問題解決迄は毎日出席なし各自交代に議長を勤め、記錄係を設けて議事を記錄する事とせり。

記錄係り

（舊四年）柏村、（四年）佐藤、白木、山柄、（三年）澁川、川目、（二年）金子、高澤（一年）丸茂、林

開會午後一時半、議長　鈴木章（四）　副　片岡已代治（四）

學生一同緊張し事を議するにあたり議論百出、意氣益々盛なりき、今日の決議事項は

（一）前日教授會に出席せざりし諸教授を訪問なし同情を求むる事。

（二）磯部の罪惡を密に調査なす事（三）新聞記者係設置の事（四）文部省を學生全部訪問なし磯部氏との關係を絶たれん事を請求する事、（五）之に就き明八日晴雨に拘らず午后一時九段牛ヶ淵公園に制服制帽にて參集する事（六）本件を保證人一般に通知し問題を公開する事

トセル教室ノ貸與ヲ拒ミタル爲途ニ堰カレタル奔流ハ一時ニ洪水ノ勢ヲ以テ五月一日ノ大會トナレルナリ

血染の歌

（安部路人作）

一、義に虐げられ愛に餓え
　虛僞の翼に身を托し
　青春將に暮れなむとして
　醒むれば遲し過去の夢

二、光陰再び歸らざる
　嘆きも今は捨てよかし
　誤られたる前途を拂ふ
　腰の劍を忘れしか

三、篝火赤し夜は更けぬ
　涙に月の影散らし
　遙かに望む故郷の空
　父母の幻　老のかげ

四、さはさりながら敷島の
　我も雄々しき男の子ぞや

(七)問題公開に就き會場係設置の事以上七件滿場一致を以て可決して懸案として連袂退校の件を殘して散會せしは午后五時半なりき

本日別紙の如き書狀を各保證人に配布せり

拜啓日本醫學專門學校生徒紛擾相生し連日休課の姿にて學生一同迷惑不鮮候段御同樣憂慮の至に存候多數學生等の事情誠に同情に耐えず候間至急本件の議決の方法相立度篤と御協議申上度候間來五月八日午後五時神田區錦町一丁目十四番地松本亭(中央大學前)に於て學生保證人會相催候間御多用中恐入候得共御來會被成下度此段御案內申上候　草々拜具

大正五年五月六日

日本醫學專門學校生徒
保證人會發起人
頭山滿
太田恒麿
上原廉造
島田俊雄
日高昂
外有志二十名

五月八日　(月)

開會午前八時、議長　金成忠義(四)　副　本保秀(三)

腕の血潮啜りて誓ひ
劍のみさとしいざ立たむ

五、正義の劍ふり翳し
現世(このよ)を濁す惡魔ばら
聖代の恥獸してやむや
刺さで止むべき我等かや」

(ワシントン調)

スクラップ

十二月廿日　(大正四年)

▲三百餘名の血判(萬朝)
日本醫學專門學校の紛擾

▲日本醫專學生の膝詰談判(朝日)
決議文に血判、事務員毆らる

十二月廿一日

▲善後策の協議(萬朝)
日本醫專事件後報

四月二十九日　(大正五年)

▲日本醫學校の大紛擾(日々)
—學生連袂退校か—
學監に欺かれたりと生徒憤慨して起つ

本日決議事項として磯部側保證人會開催に就き之が發起人に委員を發してその應否を探索せしに之れ皆磯部氏の惡辣なる奸策に因る者と判明したれば學生は各自保證人を說きて磯部側保證人會に列席せしめざる事に決議し以上即刻實行にとりかゝらんとするや駒込警察署長臨場一條の訓諭あり曰く

學生は相互間の自由を束縛せず登校なす者に對し之を妨害する勿れ。又文部省訪問等は治安警察法に違背し法律問題等惹起するやも計られざれば學生らしき態度を堅く守られたしと終り退場後五時十分散會

學校側より出せし保證人召集狀に發起人として頭山滿氏の名ありこは氏の關せざる所にして、磯部の詐欺的行爲なる事判明せり。

五月九日（火）

開會午前八時、議長　藤牧玄雄（舊）　副　副島（三）

本日の決議事項として（一）委員を以て天谷校長の來訪を乞ひ若し校長之を肯んぜざる時は委員責任を負ふて校長に自決を促す事（二）今日迄の磯部理事及び天谷校長排斥の理由書を東京府教育調査會に呈出なす事（三）本日全學生制服制帽にて文部省訪問の事、陳情委員は新聞記者係議長及び各組長と決定しその委員は

安部　後藤（哲）　渡邊（司）　山本　後藤　中本　波津久　本保　須藤　佐藤　吉澤　江並　以上十二名

▲日本醫專の再騷動（讀賣）
磯部校主の橫暴、生徒父兄の激昂

五月二日

▲日本醫專益々揉める（日々）
—同盟休校を斷行せんか—
四百五十の生徒磯部學監方に押寄せ昨夜深更に及んで談判遂に破る

▲學校騷動（世界）
兩者の言ひ分、血判の約、休校の約

▲今朝電話で辭職勸告（每夕）
又もや紛擾を起した日本醫專の學生磯部專任理事に對して辭任を迫まる

▲松浦專門學務局長は語る（每夕）

▲日本醫專學生三ヶ條の決議（大和）

▲生徒四百名毅然（讀賣）
日本醫專の紛擾、益々募るの形勢

▲日本醫專生徒病院に押寄す（朝日）
磯部氏に辭職勸告、四神田署長の鎭撫

▲五百名大學日本病院に押よす（萬朝）
日本醫專生の不穩

▲最早これ迄（萬朝）
日本醫專學生と磯部氏

▲日本醫專の同盟休校（時事）

(四)連袂退校届は一纏になし一定の場所に保管する事

午前十一時散會し午後一時半牛ヶ淵公園に學生全部集合なし文部省を訪問す。隊伍整然、意氣揚々たり、十二名の委員をして次官局長に會見なし會見終りて學生一同一先解散し再び演藝座に集合し文部省會見顚末及び天谷校長との交渉に關する報告あり次官局長會見報告に曰く「學生處分問題に關し文部省にてはあづかり知らず唯監督官として何等かの意見を與ふる權利を有するのみ」と又同盟休校の件に關しては充分自己を思ひ學生の本分を守られたしと、退學願書々式は次の如し

退學願書

第何學年生　何　某

生年月日

右之者今般學校管理者に誠意なく學務當局に權威なく安んじて教育せらるゝ事を欲せず

殊に學生處分等甚しく不當なるより退學致させ度候間御許可相成度奉願候也

大正五年　月　日

本人　何　某㊞

保證人　何　某㊞

私立日本醫學專門學校長

指定の許可なきより蜂起、磯部、山根兩理事の排斥を決議す。

▲三條件に就て討議(萬朝夕刊)

日本醫專學校紛擾後聞、學校側の樂觀

五月三日

▲素志を貫徹するまで(國民)

日本醫專の生徒側は益々强硬

最後の決はたゞ同盟退校

▲山根理事の抗辯(朝日)

日本醫專紛擾事件

▲醫專紛擾熄まず(萬朝)

三日は講堂で大喧囂

▲日本醫專は引續き紛擾(日々)

昨日は三百餘名山根理事長宅に迫る

▲理事委を見せず(讀賣)

學生の示威運動

▲磯部の跛文部省を弱らす(毎日)

▲醫專學生團山根氏宅に押寄す(時事)

排斥決議文を面前に朗讀す

▲醫學生の死活問題(讀賣)

開業試驗の打止

五月四日

▲五百名の血判(毎日)

醫學博士　天谷千松殿

本日學校側より各保證人宛に左の書狀來る

拜啓益々御健勝奉賀候陳者日本醫學專門學校生徒紛擾事件に關しては御同樣憂慮の至に有之一日も早く圓滿なる解決を希望致候より吾々保證人は昨八日午後五時神田區錦町松本亭に集會し左記の事項協定仕候に付御多端の折柄度々御迷惑ごは被存候得共最早一日も猶豫すべからざる儀に有之篤と御相談申上度候間明十日午後六時神田區錦町壹丁目十四番地(中央大學前)松本亭に於て保證人會相催候條萬障御繰合せ御來駕相願申度候　草々敬具

協定事項

一、指定認可前に於ける本校卒業生の將來及今回紛擾事件に關し處分を受けたる學生の將來に付救濟方法を當局者又は理事者に交渉する事

二、直に授業を開始し學生をして登校授業を受けしむる方法を講ずる事

三、指定認可の促進實行を當局者及理事者に陳情する事

右實行方法として保證人中より委員を擧げ交渉の任に當らしむる事

以上の決議を爲したるも出席者少數に付本日出席者全體の連署を以つて更に保證人會開催の通知を發し協議を遂ぐる事

大正五年五月九日

日本醫專學生の大憤慨

▲日本醫學紛擾(毎日)

▲日本醫專の保證人會(朝日)

▲日本醫專の紛擾益々大(報知)

五百の學生血判して嘆願書提出

▲日本醫專生徒

文部省に陳情す

▲血判の嘆願書(都)

日本醫專生徒の陳情

理事者と學生から事情聽取

▲生徒文部省に陳情す(讀賣)

益々波瀾を重ぬ、日本醫學專門學校

▲靜肅の態度で次官に面接(時事)

日本醫專の生徒五百名文部省に押寄す

▲醫專の紛擾は容易に解決せず(日々)

血判の嘆願書を提出

▲午後から教授會と保證人會

日本醫專紛擾後聞

五月五日

▲日本醫專の退學と停學(日々)

全生徒五百余名大いに憤激す

▲日本醫專の組織は不完全(日々)

高田文相の談

都美榮　日高昂　村井半次郎
山口湊　小瀨佳太郎　藤田包助
島田俊雄　中野五作　高橋喜之
新居房太郎　小川劍三郎　石井進
星野大館　徹六郎　樫田三郎
坂本和三郎　黑川義久　牧田義雄
鉾田音次郎　齋藤德藏　田中義一
吉村基　高島平三郎　天谷千松

（姓名出席順）

此外當日端書を以つて發起人に一任せらるゝ旨の通知ありしは古宇田傚太郎外數氏に有之候

追而今回吾々保證人等が本件に關し斯の如く重大視し之れが善後策を講ずるに方り生徒側にありて却つて本會の成立を妨げ種々の運動を試み居候者も有之哉に承知致候得共必竟血氣に逸る青年諸士が一時の感情に制せられ半面疑心の結果茲に至りたるものと被存候間深く咎むべき程の事も無之寧ろ憫然の情に堪へざる次第に有之候爲念此段申添候

五月十日（木）晴

開會午前九時、議長　青山豪一（舊）　副　吉澤晁（二）

決議事項（一）磯部側保證人會再び松本亭に開催せらるるに就き學

▲理事者誠意なし（萬朝）
日本醫專紛騷まだ續く
▲日本醫專の紛擾火の如し（毎日）
▲退學停學の處分（讀賣）
▲磯部理事に辭職勸告（都）
日本醫專紛亂の極
退停學卅六名に及ぶ、保證人大に激昂
▲保證人等怒る（朝日）
日本醫專問題、突然退校處分
▲退停學處分に愈々激昂す（大和）
日本醫專の紛擾、憤怒凄じく、殺氣充滿
▲根本的に解決せよ（毎夕）
日本醫專の問題
今夜委員會を開く
▲磯部學監に辭職勸告（國民）
不法なる生徒の退校處分
昨夜深更まで保證人大會開かる
▲學生卅七名の退學停學（時事）
日本醫專い紛擾保證人大に激昂
▲父兄も遂に激昂す（報知）
可驚醫專幹部の不誠意
▲磯部理事に辭職勸告（都）
日本醫專紛亂の極

生の處置として學生保證人をして之に列席せしめざる事今後とも斯る場合は一切之に耳をかさざる事に決す(二)退停學に處せられたる者の氏名品行を各教授に報告する事(三)明十一日午後六時神田青年會館に於て學生保證人大會開催に就き全保證人をして出席せしむる事、本日全部協議事項終り土佐協會なる保證人委員會より學生に對し委任狀退學願書を提出せられたしと又重ねて學生は保證人と共に團結を堅くして事に衝られたしとの希望を舒べられて後午前十一時半解散

血涙錄二千枚印刷配布せり

尙本日學校より各父兄に左の書面を送らる。

拜啓益々御健勝被爲在候段奉賀候陳者今回の本校生徒紛擾事件は數日來都下各新聞紙上に連揭致居候に付已に大要御承知之御事とは被存候得共遠隔の貴地にありては固より眞相御承知の筈も無之殊に新聞紙上揭載の事實は多く針小棒大に失し又は往々無根の事實を列記し何等爲にせんとするものゝ如く都下在住の者と雖も屢々是等の記事に誤られ居候次第に御座候、元來本件の起りは本校指定認可遲延の結果本期卒業期に迫りたる一部學校が理事者の心情又は諸般設備進行上の程度をも察知せず恣に指定認可の促進運動を開始し血氣に逸りて思慮分別を欠き爲に或者の甘言又は詐術に陷り其間不良學生の乘ずる處となり一部徒黨を形成して理事者

五月六日

▲凝議深更に及ぶ(日々)

日本醫專の紛擾猶やまず、駒込署長の訓戒

▲軟派說の出た保證人會(朝日)

—日本醫專の紛擾事件—

學生の費用請求

▲理事に嚴談す(時事)

保證人磯部氏を訪ふ

◎泣いて演說す

同窓も亦泣いて喝采す(都)

日本醫專問題益々紛擾

▲暴なる理事者(萬朝)

日本醫專の紛騷續報

▲日本醫專の火の手(讀賣)

益々熾烈を極む、磯部氏間諜不穩

五月七日

▲醫專の紛擾愈々險惡に陷る(日々)

磯部理事と談判破裂、學生大會を開きて叫ぶ

▲教授連の同情(報知)

▲日本醫專紛擾續報(萬朝)

に迫り又は溫厚なる他の學生を威嚇し强制的に加盟を求め若し應せざるものは腕力に訴へ猥りに登校を嚴禁し犯す者には罰金を科するに至り甚しきは勢に乘じて大學理事者の邸宅を襲ふなど日一日と不穩の擧動相募り候より本校に於ては敎授會を開き主謀者十餘名に退校を二十餘名に停學を命じたるも尙ほ未だ沈靜に至らず在京保證人等は目下善後策に關し夫々運動中に候得共尙ほ此際一日も早く登校授業を受け候樣一應貴下よりも御訓誡相成候樣致度若し此儘にして荏苒日子を重ね候はゞ終に前途有望なる青年をして再び回復すべからざる悲境に沈淪せしむるの不幸なきを保し難く候條前顯の事實御通報旁々右御注意迄申上度草々　敬具

大正五年五月十日

日本醫學專門學校
校長醫學博士　天谷千松

殿

五月十一日（木）晴

開會八時二十分、議長　萬袋（四）　副　管野（三）

學生一致團結して益々磯部攻擊に熱心なる意氣誠に賞讃に價あり今日しも大角氏來場し保證人委員會の報告旁々抽象的の訓話あり最後に諸君は忍耐の二字を忘るべからずと、決議事項として敎授各位に送る書狀を發送し又保證人委員より國元保證人に經過報告書送ら

▲兩學生監辭職（讀賣）
昨夜の懇談會
▲學生監追ほる（國民）
日本醫專の紛擾
▲沸返る生徒會（都）
敎室で詩を吟ず
▲保證人大會（都）
五月八日
▲近日公開演說（讀賣）
日本醫專の問題
五月九日
▲妙な保證人會（萬朝）
日醫問題益々暗澹
▲學生側は必死（世界）
淋しい學校側の保證人會
▲保證人と調停者の協議會（日々）
日本醫專の善後策
▲別の保證人會（都）
（日本醫專問題の續聞）
▲保證人の決議（每日）
日本醫專曙光を認む
五月十日
▲血涙を提げて（都）

れたしとの理を舒ぶ事、會場係增員の事

附學校は授業開始し五名の登校者あり小川博士も亦出講の由、一先づ十一時散會なし青年會館に於ける保證人學生大會の準備に取掛れり

第一回大會　開會午後七時

大會內容—中本君開會の辭を舒べ奧宮委員長を坐長と推し次に順次學生の演說及び學生保證人大野伴睦氏市川泰亮氏等の熱烈なる演說ありき時早や九時學生保證人は一條の決議文を作りて之を發表せり

決　議

吾々保證人學生は益々一致協力以て本問題の解決を期す

發表後大角氏の演說あり又林すゞ子吉澤登具子二婦人の壇上に立ちて學生の母としての覺悟を述べられたり時滿堂感極て熱涙を拭へる者あり時移る事十時半委員長閉會の辭ありて萬歲裡に閉會せり

五月十二日　（金）　晴

開會午後一時、議長　中川義（前四）　副　加納篤美（四）

空晴れし今日昨夜の大會の疲勞の狀もなく集合なし議事も何なく進行せり、決議として（一）天谷校長及び學生監の來塲を求め處分者に對する辯明を求むる事然れども交涉の結果不調に終りき（二）學生會を開き會則第〇條の學生會費は學監之を保管すとの條を學生會委

文部省を訪問陳述す

▲學生大學陳情（讀賣）

文部省に押寄す

▲文部省に陳情（萬朝）

福原次官の慰諭

五月十一日

▲許可はしない（中央）

日本醫專の問題

▲日本醫專紛擾の顚末（日本之醫界）

五月十二日

▲醫專學生の結束（萬朝）

保證人との聯合結議

▲日本醫專同盟休校の其後（やまと）

學生保證人會開會

▲生徒父兄大會（讀賣）

日本醫專の其後

▲日本醫專大會（報知）

▲醫專問題の演說（都）

▲日本醫專學生の母が泣いて（日日）

（昨夜の保證人聯合會に聽くもの涙を催す）

五月十三日

▲日醫後援會の決議（萬朝）

員保管と變更すること(三)大隈伯訪問の件に就議論百出樣々の意見なりしも結局明朝七時訪問と決し學生は全部制服制帽にて明朝六時江戸川に集合なし委員を撰びて嘆願書を捧呈なす事に決す(四)磯部側保證人會を解散せしむる方法として學生は該保證人との關係を斷つ事

本日學校敎務課及學校側保證人委員より左の書狀を學生幷に保證人に來る

今般其筋の嚴達も有之本日より授業開始致候に付校規を遵守し遲滯なく出校可有之此段及通知候也

大正五年五月十一日

日本醫學專門學校敎務課

追て何等理由なく無届休業の塲合は學則に依り相當處分せらるゝこと可有之に付爲念申添候

拜啓日本醫學專門學校生徒紛擾事件に關し兩度御通知申上候通り吾々保證人有志の者兩度會合の結果左記事項協定仕候に付之れが實行方法として不肖等其撰に方り候間直に學校當事者を訪問し其實行を迫り候處恰かも其筋よりの嚴令に接したる折柄にて當事者に於ても深く吾々の意のある處を諒とせられ早速本日より授業を開始し同時に學生に對し授業開始の旨夫々通知を發せられたる事を確答せられ候に付吾々は更に進んで着々他の事項をも實行可致

學校側四時間に亘りて評議す

▲日醫後援會(讀賣)

善後策を講ず

▲醫專紛擾調査(萬朝)

▲日本醫專の紛擾(世界)

一先づ落着した。

五月十四日

▲首相に陳情(都)

日本醫專の生徒會合に日を暮す。

▲血涙錄を前に(萬朝)

日本醫專委員の陳情

▲醫專生犇めく(國民)

五百名早大運動場に集る、委員の首相訪問

五月十五日

▲果てしない紛擾(萬朝)

文部省不統一を責む

▲學校騷動の類發(高田文相談)(朝日)

五月十七日

◎全部同盟退學と決す(時事)

日本醫專の學生大會にて

▲保證人と生徒の仮議會(讀賣)

日醫紛擾の其後

存念に候得共萬一學生側にありて今猶感情に制せられ故なく登校せざるに於ては學規に依りて處分せらるゝの不幸なきを保し難く候條吾々關係の學生に對し此際直に登校教授を受け候樣懇篤御注意相成候樣致度御通知旁々此段及御依賴候　草々敬具

協定事項

一、指定認可前に於ける本校卒業生の將來及今回紛擾事件に關し處分を受けたる學生の將來に付救濟方法を當局者又は理事者に交渉する事

二、直に授業を開始し學生をして登校授業を受けしむる方法を講ずる事

三、指定認可の促進實行を當局者及理事者に陳情する事

四、直に學生を登校せしむる樣保證人に勸誘方依賴の事

五、學校として保證人會開催の事を注意する事

右實行方法として有志保證人中より委員七名を擧げ交渉の任に當らしむる事

大正五年五月十一日

樫田三郎　牧田義雄　藤田包助
坂本和三郎　酒井萬吉　島田俊雄
日高昂　（姓名イロハ順）

次に左の陳情書を教授諸先生に呈出せり。

謹而教授諸先生に申す

先きに本校に於て學校當局及び學生間に紛擾を釀すに至るや當局にては直ちに首謀者と見做されたるもの十三名に退學處分を二十三名に無期停學處分を命じたり是れ五月四日の事なりき。

▲學生總退學（日々）
日本醫專最後の幕
▲同盟退校す（都）
日本醫專生徒の決議
▲全部退學と決す（萬朝）
▲飽迄冷靜なれ（萬朝）
▲同盟退校の決議（朝日）
日本醫專保證人會
▲日本醫專の學生同盟退校す（日々）
昨日の保證人學生聯合大會
▲全校退學（やまと）
醫專最後の結議
▲擧つて退校（國民）
日本醫專問題
五月十八日
▲五百名の退校届
日本醫專益々紛糾、學校で受理するか
▲今夜の注意（萬朝）
日醫問題演說會
▲日本醫專演說會（報知）
▲醫專問題演說（讀賣）
▲全部退學届提出（萬朝）
日本醫專の紛擾問題

吾等學生は正當なる理由によれば教授諸先生の明斷の下に決してこの處分を遲疑するものにあらず然れども物平かならざれば必ず鳴る熟々考ふるに今回の處分の如きは意義なくして當局の處置の無責任なる蓋し嘗て見ざる所也

苟しくも退學處分は學生にとりては一大死活問題にして運命の浮沈將にこの一事によりて左右せられんとす吾等學生は權威ある教授會に對し又當局に對して之を申述ぶるの潛越なるは熟知する所なりされど同僚三十六名の汚名に對して默視するに忍びず國家に於て一旦法に觸れ之に不服なるものは再び之を主張するの權利を有す彼は法なるも此は德義に於て吾等學生は伏而教授諸先生にその不滿なる理由を陳情せんと欲する也

抑も本校に於て退學處分を斷行せんとするや豫め保證人を出頭せしめてその理由を述べ亦學生自身を招きて愼重にその改善の有無を質し然して後これを行ふを先例とせり然も今回は然らず保證人及學生に何等の通告あることなかりき之れ一なり

五月三日午後四時より學校當局にては三四年生保證人四十餘名を招集して其鎭撫を依頼せるにも關はらず翌四日朝には突如として處分の發表をなせし事二なり

處分に付校長に理由を問へば「答辯の限に非ず停學者の姓名は之を知らず」と答へ學生監は學則第何條何項に該該するかを知られざりき理由の極めて不鮮明なる三なり

今回の處分を以て紛擾に關係なきものとすれば學則第廿三條に該當せざる可からず若し有りとすれば事件と關係深からざるものの多く抱合せらるゝは如何吾等學生誠に判斷に苦しむものなりそれ等の中には品行方正にして特待生となりし者有り或は學力優等にして無缺席なるものあり或は病床に呻吟して少しも今回の事件を知らざ

五月廿日

▲文部省に殺到（萬朝）

醫專學生五百名の不穩

▲文部省前の騷擾（報知）

日醫學生巡査と衝突す

◎文部省構内の修羅場

日本醫專學生五百餘名押寄せて警官と大格鬪を演じ負傷者數名

▲日本醫專生警察官と衝突（朝日）

旗を押立てゝ文部省に迫る

▲當局と二醫專問題（世界）

日本醫專問題、長崎醫專問題

▲三度文部省に押寄す（讀賣）

日醫學生五百名、文相に會見請求

◎文部省前の大騷動（中央）

日本醫專の生徒五百名大旗小旗で文部省に押寄せ警官と衝突して大修羅場

◎醫專學生、文部省に警官と鬪ふ（日々）

興奮激越せる四百五十の學生と、鎭撫に向ひたる數十名の警官と學生一名負傷數名亂打さる

◎猶紛擾するなら癈校せしめん（日々）

—寛大にはしたいが　松浦局長の談

る者も有り更に悲慘なるは時には砲兵工廠の職工となり又牛乳配達となり苦學四年將に卒業せんとしてこの災厄に遭遇せるものあり或は私情の關係より保證人を引き入れんとして一學生の處分を猶豫せしめたる事實あり是れ四なり磯部氏曰「我は股肱と頼む五名の者に人撰せしめたり」とその五名は無頼の徒にして彼等は私怨により善良なる學生を陷れしなり、之れ五也斯の如く吾等學生は幾多不審の點を列擧して否む能はず公明なる處置は又之に服するを知れども不當なる點は飽く迄愼重に質して學校當局の再考を促さんと欲す願くば吾等五百有餘名が慈父として敬愛する教授諸先生！

學生が如何に不當の處置に苦しむかを諒察せられて處分取消に付御盡力あらんことを等しく熱望して已まざるなり

大正五年五月十一日　　日本醫學專門學校學生一同

五月十三日（土）

午前六時半一同早稲田グラウンドに集會大隈首相に上申せんが爲なり首相は官邸ならざれば面會せずと云ひ一方警察の干渉嚴なるを以て已むなく一同解散委員十三名は永田町の首相官邸に行き午前十時秘書官に面會首相不在の故を以て上申書と血涙錄とを提出して去る一同は會場に集合せり。

上　申　書

謹て内閣總理大臣閣下に上申す

吾等日本醫學專門學校學生五百餘名本校當局の措置宜しきを得ざ

◎酒氣を帶びた學生も居たやうだ（日々）
—怪我人は無い筈　丸山保安部長談
◎警官の暴威からあの騷ぎ（日々）
—文部省も曖昧だ　學生側の云ひ分
◎向脛を蹴られて出血す（日々）
—巡査に傷はられた　學生杉本完の談
◎煽動するのは保證人（日々）
—後釜を狙ふ野心家　磯部醫專理事談
▲醫專生騷ぐ（國民）
旗を押立てゝ文部省に押寄す
五月廿一日
▲文相訓諭せん（朝日）
醫專紛擾と當局
▲學生を戰かすパンの問題（日々）
—日本醫專事件が好き實例
理想境から漸次現實の世界へ
青年の傾向は識者の心すべきもの
▲日本醫專紛擾の成行（日本之醫界）
五百の學生遂に同盟退校
五月二十二日
▲學界の不祥事（中央）
五月廿三日
▲日本醫專指定難（萬朝）

る爲めその途に迷ひ父兄は憂慮し社會問題は將に惹起せられんとす吾等微力なりと雖正義に與するは之を知れり先きに文部省に陳情し今や茲に及ぶ希くば學生刻下の窮狀に對し閣下の英裁を賜はらんことを伏而懇願す　恐惶謹言

大正五年五月十三日

午後一時開會、議長　小久保請（舊四）副　武藤直哉（四）

（一）校長を訪問なし教授會を開かれん事を迫る事（二）生徒監より學生處分の不當なる事を證明せしむる事（三）支那其他の留學生は自由を許す事、其他學生は學校の園を散策なし歸りて校長との交渉顚末を聞きて散會時四時四十五分。

附　本日駒込警察署より屋外集合を禁ぜらる。

五月十四日　（日）

開會八時二十五分、議長、影本速男（舊四）副　管野（三）

昨夜磯部側保證人と學生側保證人委員との會見評議する所ある由なりしかども流會との報告あり、決議事項として今後名士を以て後援會委員を定めて後援會組織に盡力なす事、散會午前十一時

附　團費二圓明十五日持參の事。

五月十五日　（月）

開會八時、議長　關基（舊四）副　峰野廉（四）

大角氏早朝より來場ありて處分問題に就て報告あり又學生の建議

▲日本醫專生又文部省に押寄す（日々）
巡査二百名の警戒
▲文相醫專委員と會見す（時事）
復校せよと勸告
▲文相諭す（報知）
醫專の生徒不穩
▲双方を訓諭す（朝日）
文相と醫專問題
▲醫官文部省を固む（中央）
高田文相に膝詰談判、日本醫專生の示威運動
▲醫專學生に文相懇諭（讀賣）
委員會見の顚末、三理事を召致す
▲文相と會見す（萬朝）
日本醫專問題
▲荒川參政官野次馬と間違へらる（時事）
官名を名乘れば警官態度一變す
▲屏風の蔭に四人の角袖（日々）
仰々しき用心に眉を顰むる人もあつた
▲三百人の學生に四百の警官（大和）
日本醫專學生委員文相に會見す
五月二十四日
▲日醫問題演說會（讀賣）

として明日午後保證人委員の報告如何に依り後援會設立に奔走なす事その他會計係設置なし主任として中本富太郎(舊四)を推し各級二名宛の主任を置きて會計事務を司る事とす、又學生國元保證人住所調査を調査係に一任して調査せしむる事に決し散會す時計の針は折しも午前十時を報しぬ。

五月十六日　(火)

開會午前九時、議長　後藤哲雄(舊四)　副　缺員

連日の活動益々火の手を擴め多忙一方ならず事務復雜を極むるに到れるを以て前四年級より各係長を撰定なして各年級の係員の統御なす事とし左に係を夫々發表せり。

記錄係長　外交係長　通信係長　新聞記者係長　調査係長　連絡係長　會計係長　法律係長　後援會係長　會場係長　起草係長

以上十一部

又本日午後六時本郷中央會堂に於て第二回學生保證人大會を開催し小野庄次郎開會之辭を述べて會を開けり。

斯くして大野伴睦氏壇上に立ちて文部省は何故に本問題に對して關せず焉たるかの題にて一條の慷慨演說をなし奧宮委員長よりは保證人委員と磯部との交渉顚末を報告し事遂に調停の効なく斷念する所となれりと。

又土佐協會に於ける保證人委員奧宮、諏訪、大角、松本、淸水、田代

▲日本醫專問題演說會(朝日)
五月廿五日
▲理想的なストライキ(中央)
日本醫專問題演說會
▲醫專騷擾問題に對して本區の識者に警告す(本郷新報)
五月二十六日
▲醫專學生日本病院を襲ふ(讀賣)
警官數十名の警戒、中には投石せし者あり
五月廿七日
▲文相を訪問す(萬朝)
日本醫專事件後聞
五月廿八日
▲又も文部省に押寄す(朝日)
▲癈校處分を迫る
日本醫專の生徒三度文部省に押寄す
▲日醫專生徒又もや文部省に押寄る(大和)
▲日醫學生再び押寄す(中央)
▲日本醫專善後三案(中央)
先づ山根磯部の兩名を馘つて、財力充實せる學校たらしめん

小板、中岡、渡理、丸山、吉澤以上十一名士會議を開き決議する所あり曰く

一、文部省の意向を定むる事　二、指定要件中資金不足額を徵達する事　三、學校幹部の改造の事

（一）學校指定を得る事は學生全體の主眼なる事を認む（二）指定を得るには財團の充實を圖らざるべからず（三）磯部理事は日本醫專の創立經營者にして實現者なりと認む（四）前項關係に依りて磯部理事對學生は例へば親子姉弟の如き關係なりと認む（五）學生の磯部に對する惡感情は磯部が數年來惡辣なる手段を以て學生を欺謾したる行爲を憤慨するを主因と認む（六）保證人は國家教育上の見地より日本醫專の存續を必要とし保證人會の希望を徹底し將來紛擾の根底を解除するに足ると認めたる時は財團を充實し指定を得るに盡力すべし以上決議をなし當局の意向を正しぬ。

八日保證人委員磯部山根吾妻三理事に土佐協會に出席を乞ひたれども山根氏のみ出席なし懇談の結果次の提案を出しぬ、（一）理事者（山根磯部吾妻三氏）保證人委員會と聯合して善後策を講ずる事（二）調停者を信任して萬事を委托する事（三）學生は一同文部省指定と退停學處分者取消する事に倚て他の一切は理事保證人會の取扱にて服從する事、斯の如き案を出して山根磯部理事に示せども頑として肯んせず遂に不調に終りき。

五月二十九日

▲日本醫專處分（每日）

▲紳士か落伍者か（萬朝）

五月卅日

▲醫專學生、日本病院を襲ふ（讀賣）

警官數十名の警戒、中には投石せし者あり

▲醫專生又々日本病院を襲ふ（日日）

門扉を破壞して闖入す、警官百五十餘名が物々しき警戒

▲醫學生又騷ぐ（都）

金を返せと理事に迫る

▲學生又も日本病院に押寄す（朝日）

返金を迫り騷擾を極む

▲日本病院に殺到（國民）

醫專生五百の集團

▲醫專生十二名遂に檢束さる（每日）

磯部理事長方へ押寄せて格鬪

▲日本醫專と當局の責任（曙）

五月卅一日

▲今日も亦裁判沙汰の醫專生（每夕）

▲例に依り九千圓を返せ（萬朝）

日本醫專紛擾の其後

十五日退停學者に對する處分取消に就き教授會を開く筈なりしも出席者少數のため流會となり調停の餘地なくなり此所に保證人の一頓坐を來すに到りしは保證人の無能の致す所なりと陳謝なし壇を離れて直に座長の席を占めぬ。

次に大角氏壇上に立ちて曰く道德上の大罪人なる僞教育者の磯部に對し正義を楯として純潔無垢の學生より學校改革を絶叫する前途有望の學生の今の立場憂慮に堪えざる次第である又學校當局の無能にして暗黑界を迎る惡魔の如き者を默視するは實に國家の前途慨かざるを得ないのであると一條の演說終りて拍手喝采の裡に壇を下りぬ、後學生保證人等の演說あり、あゝ賴母しき意氣ある學生よ自重團結を固うして以て此の問題を飽く迄も徹底的に初志を解決せられん事を。

此所に於てか全學生は最初の決議に基き連袂退校と滿場一致を以て可決せられぬ。

決　議　文

「學生は同盟退校をなす。保證人は之を承認す」

斯くして學生の犧牲者に對して潔く殉じたる時學生の保證人の喧々たる拍手悽慘たる氣堂内に滿ち〳〵、その腦裡に刻まる深き印象の或る者に對して暗涙に咽ばざるを得ざりき。後保證人委員大角氏再び壇上に立ちて決議又贊成意見發表なし學生の決心を正して氏の

▲文相慰撫（讀賣）
醫專委員の會見、磯部理事語る
▲醫專の學生再び病院を襲はんとす（報知）
▲醫專問題の演說會（日々）
昨日本鄕大和座で開會
六月一日
▲癈校を迫る（讀賣）
福原次官の意見、醫學生の焦慮
▲醫專の紛擾は生徒が勝か（報知）
磯部理事遂に引退せん
▲醫專生諭さる（朝日）
▲日本醫專紛擾（萬朝）
▲醫專生の委員等福原次官と會見（世界）
▲學校騷動が多い（日々）
又も三學校のストライキ
問題の解決は何うするか
學生の心裡を解せよ
▲日本醫專紛擾後報（日本之醫界）
學生態度强硬、形勢益々暗憺
▲醫專の記事につき（よみうり）
文部大臣秘書官櫛醇二氏より取消
六月三日

決心を述べぬ、吾々は唯一死あるのみと、學生の決心も亦然りか果然らざるか、田園に歸らんと叫ぶ全學生の決心、面上に表れたるその決心如何に。

又しも學生の悲憤演說終り學生保證人萬歲を三唱なし十一時十五分散會しぬ、折しも空は暗として一點の星光すら見とめ得ず細き雨さへ頭上に灑ぎぬ。恰も今日今夜此の會場に於て決議せる刹那の心裡を知れるものゝ如くに。

五月十七日　（木）

開會午前九時、議長　中川義次（舊四）　副渡邊司法（四）

惡魔の手を脫し弱者の學生今や自由の身となり實に快や云ふべからず早朝より集りて議事を進行しぬ、決議として磯部即ち僞敎育者の身邊のあらゆる事情を社會に發表すべく公開演說を開催する事に可決なし期日は五月十八日午後五時神田靑年會館にて前日本醫專校學生團の名義にて又辯士候補者として各縣出身名士に願はんとして學生を運動せしめ又一方各組長をして敎務課に退學願書を呈出せしめぬ。

記錄係にては演說廣告を認め各所に貼布せしめ都下の名士に檄を飛ばして熱烈なる後援を乞へり。

五月十八日　（木）

學生は朝より演藝座に集合協議なし終りて夫々幹部は演說會の支

▲日本醫專の理事、課長取調らる（日々）
基本金の始末に就てか—學生五名も亦取調

▲磯部理事取調べ（萬朝）
日本醫專紛擾の餘波

▲醫專の理事、學生召喚さる（朝日）
基本金の取調、九千圓の用途

▲醫專問題遂に取調べを受く（每日）
六月四日

▲醫專校の悶着（大和）
日醫は總て是れ現代惡辯の結晶體也寸毫寬假なく嚴格なる社會制裁を欲す

▲醫專問題の解決を望む（ポケット新聞）
當局の適當なる處置と、學生の冷靜を望む

▲福原次官目をパチクリ（報知）
貴官は一体敎育勅語を御存じですか
六月五日

▲醫專委員と法相（大和）
▲困つた學生と學校屋（時事新報漫畫）
許可してくれ〳〵
六月六日

▲磯部派學生七名喚問（萬朝）

度に取りかゝりぬ斯くして午後五時

神田青年會館には大會の開かれぬ折しも降雨なりしも聽衆無慮千餘人、その出席辯士次の如し

一、經過報告　奥宮保證人委員長
二、起て五百の健兒　廿世記社長　森川國南氏
三、文相の責任を問ふ　東京辯論社記者　大野伴睦氏
四、當局の責任　曙新聞社長　金原善三郎氏
五、大浦問題と醫專問題　實業之世界社　青柳有美氏
六、弱者の叫　中央新聞社　吉植元亮氏
七、義の同盟退校　代議士　伊東知也氏
八、權威の亂用　弘道館　大角桂巖氏
九、教育營業者を排す　立石駒吉氏
十、學商の曝露　日本醫界社　土屋清三朗氏

以上　十名

斯くして十時二十分中村君閉會の辯辭を述べ金原氏の發聲にて萬歳を三唱して散會せんとするや一名の聽者立ちて學生に反問する處ありぬ、然るに之れ學生に對する熱誠の餘りに發せられし言なりと知り學生一同頼母しげに解散しぬ

五月十九日（金）

午前九時開會、議長　細井（舊）

脅喝罪の嫌疑にて
▲日醫學生召喚さる（中央）
反對派取調を受く
▲日本醫專問題愈苛辣（時事）
磯部氏に對し訴訟、兩者醫視廳に取調
▲日本醫專に警告（萬朝）
當局者對學生の妥協付くや否や
▲日醫學生召喚（都）
七名取調べを受く
六月八日
▲日本醫專最後通牒（日々）
▲日本醫專に警告（萬朝）
▲理事外九名召喚（萬朝）
日本醫專問題
六月九日
▲基本金用途取調（朝日）
▲磯部氏等の取調（日々）
▲磯部理事召喚（中央）
嚴重取調べを受く
▲日醫問題演說（讀賣）
▲醫專問題演說（萬朝）
▲學校騷動一轉して刑事問題（萬朝）
暴を以て暴に易ふ

朝來の雨晴れて初夏の日うらゝかに映えぬ。場内に席亭飼養の九官鳥しきりに「お早う」だの浪花節の眞似や三味線の聲白、さては每夜聞き馴れし「正面が宜ろしゆう」など愛嬌を振りまく。

協議事項　(一)午後二時文部省訪問に就き旗提灯を立つる事(二)後援會の必要あればその意見書完成朗讀し可否を取る(三)前學生側保證人委員會土佐協會に本夕六時半開會する由なれば、各委員に至急通告する事。

昨夜公開演說の時最後に吾人を激勵せる法學士辯護士鈴木順氏來會、一場の演舌あり、官立學校の權力服從の關係と、私立學校の權力服從關係の區別を述べ終りに彼磯部を法律問題によりて制肘し且社會の同情を集め、有終の目的を達せざるべからず。途中頓坐して物笑ひとなる勿れ云々。

第二回公演開舌大會を五月二十四日に開催する事に決す。一時休會して午後一時根津權現境内に集まる事。

高張提灯幷に白布數多買ひ求め、提灯には「世即暗」、自旗には「弱者の叫」「正義の絶叫」「排僞敎育者」「暴火」「どこ迄も」「權劍」「爆烈」等の業々しき文字を墨痕滴るばかりに認めたる折りしも、正服巡査數名來り之を監視しやがて駒込署長臨場し、「學生は學生らしく行動するはよけれどもかゝる不穩文字を認めたる長旗及高張は之を持參

▲磯部理事を訴ふ(報知)

六月十一日

▲退校處分延期(讀賣)

醫專問題の十日

▲仲裁人が入つた(朝日)

醫專問題の混沌

▲物質的學校觀(日本之醫界)

(日本醫專再騷動に就て)

▲日本醫專愈紛糾(日本之界)

(文相非黙の聲高し)

六月十三日

▲醫專委員訓戒さる(每夕)

今朝又々文部省へ大擧して押寄せむとす

六月十四日

▲磯部氏を訴ふ(朝日)

醫專學生又憤慨

▲磯部理事を訴ふ(萬朝)

醫專問題後聞

▲醫專の學生磯部理事を訴ふ(報知)

▲遂に磯部理事を訴ふ(讀賣)

委託金返還請求

▲磯部理事訴らる(都)

する事を許さず」とあり。されど各自のポケットにはそれ等の旗は疊まれ、竹竿は先發せる人々によりて遠く運ばれたるなり。根津權現内に集まりし學生は隊伍を整へ午後一時出發す。裏手の坂を昇り日本醫專及附屬病院を半周しデモンストレーションをなし、本郷通りより、日本病院前に出で、それより文部省内に着せり、駒込署よりの急報によりて麹町神田の各警察幷に警視廳より刑事警官數十名來りて鎮撫策を講ぜんとせるが既に退學願書を提出し決死の覺悟の學生は堂々省内玄關前に練り込み高田文相の責任ある解答を望むと大呼せり。當日は小泉督學官葬儀の爲め文相次官等不在なりしかば粟谷秘書官代つて面接せるも「文相の歸る迄待たん」と耳にも入れず、喧々囂々益々不穩の形勢となれり。

やがて警官の口より「命令に服從せぬ時は警察權を執行するぞ」との聲が起りしより一同憤慨高調に達し「縛るなら縛れ」と鯨波の聲を揚げて殺氣立ちぬ。學生は文相面接の不可能を知り此の上は文相私邸へ推し寄せんと五時半一同總立ちとなるや、百餘名の警官等、諸旗の揭載を禁じ之れを沒收せんとし、學生等の理由を問ふ間も非ず强奪に取掛りし故茲に忽ち兩々人れ亂れ大修羅場を演じたり鐵門は閉され、受付の建物の硝子戸は破壞し、凄愴の光景約三十分にして共に搭闘の際毆打され負傷せる者數名を出し丸山保安部長、石原主事等自働者にて馳せつけ長谷方面監察は秘書課長と打ち合はせ二十

九千三百圓の返還請求

◎日本醫學專門學校（讀賣）

—理事者に誠實なる反省なくんば斯る學校の存在を不用と認む—

六月十五日

▲文部省諮問題（讀賣）

日本醫專問題（高田文相談）

▲前途は宛で暗闇（中央）

日醫の紛擾は擴大

▲醫專學校の試驗場へ亂入（大和）

六月十六日

▲淋しい懇談會（國民）

醫專紛擾の調停策、出席者唯だ卅餘名

▲和解望なし（報知）

永い間の醫專問題

六月十八日

▲試驗場を騷がす

暴行學生を引致

▲醫專生徒へ訓諭（報知）

▲醫專學生へ訓諭（萬朝）

▲輕舉を愼しめ（中央）

醫專生徒へ訓諭

▲此始末を如何着けろ（中央）

二日午前十一時文相は快く學生と面接せる旨を告げ漸く門外に解散す。此の日の事件は警察側の批難世論に喧しかりし。負傷者の手當てを終り、本郷向ケ岡の西敎寺に再び集合し大廣間に於て細井議長開會を報ず、時に七時四十分なり。

協講事項　(一)公開大演說會は二十四日午後五時半(二)學生會醵金取戻しに付き檢事局に告發する事(三)負傷者の處分法等にて八時散會。

五月廿日　(土)　雨

午後一時半、議長　佐倉鐵馬(舊四)　石川(三)

開會するや間もなく駒込署長來場一條の訓諭あり曰く

學生は學生らしき態度を採りて常規を逸する勿れ智識階級に在る諸君は熟議に熟議を重ね冷靜に事を行ひて警察の手を煩す勿れと

決議事項として(一)明後二十二日委員文部省訪問に就き全學生も之に同行せんとせり然るに警察の壓迫の嚴なるを如何にせん、此の時後藤哲君發議にて學生は白薇薔を標として文部省附近に集合なし警官解散を命じなば示威し、委員の報を待てと可決。實行集合時は午後一時と決定しぬ(二)公開演說に就き役員の撰定の要を感じ演說掛會場掛接待掛を合して總掛りとなし各組五名宛を定めぬ、此の外(三)辯士係りを設けて各縣人會幹部に依て活動する事に可決せり

本日左の端書を各在京父兄に送れり

紛糾を重ねつゝある醫專事件、高田文相は見て見ぬふり。

▲醫專生諭さる(日々)

六月二十日

▲依然睨み合ひ(萬朝)

醫專の學校側と學生側

▲仲の退學處分を聞いて割腹す(國民)

日本醫專秀才の父

六月廿一日

▲秀才の父割腹す(毎日)

▲醫專秀才の父割腹(萬朝)

▲日本醫專の紛擾から

▲老父日本刀で割腹す(中央)

退校處分を思ひ遠へて、故郷の人々憤慨甚だし。

六月二十二日

▲Students father commits Harakiri(萬朝)

▲秀才の實父腹搔切る(日々)

村民の有志賴母子講で學費を貢ぐ

六月廿七日

▲仲裁に一任せよ(萬朝)

醫專徒生側の文相訪問

六月廿日

拜啓本校指定運動紛擾以來既に二旬に及び學校側の陋劣なること既に社會一般の公論にして文部省にても決して不當なる處置を取らざるものと信じ居り候此間學校側にては種々奸策を弄し或は保證人の一部を誘惑し或は國許なる父兄に屢々書面を送りて學生の復校を迫り居り候へ共學生は全部退學願を提出し在京保證人は之を承認致すの止むなきに立到り候間今後一切學校側よりの通知等に對し決して御返事無之樣此段及御願候　敬具

五月二十日

前私立日本醫學專門學校保證人委員長
海軍少將　奥宮衛

五月二十一日（日）

午前九時二十分、議長　嘉陽宗正（舊）　副　原三郎（二）

本日の決議事項として　（一）廣告問題　（二）本部の必要　（三）後援會趣意書發表

一、學校財團を確立せしむること

二、確實なる他學校に繼承せしむること

三、學校の處置に對し文部省に責任を負はしむること

（四）文部省訪問し文相との會見委員選出に關し樣々の意見發表あり曰く保證人と同伴すべしと斯る提議の多かりしも保證人に對しては意考を正すのみにて學生より委員拾名を選びて會見の任にあたらしめぬ。

▲醫育德育不均衡（萬朝）
四醫專同時の紛擾に關し文部の留意
七月七日
▲明大が日本醫專を買收（中央）
噂が事實なら双方が結構、當事者の間に相談が進捗
▲醫專復校の勸誘（朝日）
七月廿二日
▲首相文相の名に於て（中央）
醫專學生を繰る策士あり、紛擾を餌に何事をか企圖
▲日本醫專善後策（朝日）
▲日本醫專は何うなる（萬朝）
生徒の團結依然固し
七月廿四日
▲醫專學生の請願（萬朝）
七月二十五日
▲日本醫專の其後（讀賣）
▲日醫退學生の決心（中央）
七月廿八日
▲磯部理事の辨明（萬朝）
日本醫專の記事について
八月六日

(二)佐多　佐藤　(三)迫田　須藤　今藤　(四)丸山　土志田(舊四)後藤(哲)　中本　上野　以上十名

以上滿場一致を以て可決なし又本部は

本郷追分二十番　西濃館　電下四八〇番

又徵兵檢査のため歸國なす學生に對しては組全體と各組代表者一名之を見送り徵兵官に對しては辯明書を發送なするに決し午後一時解散しぬ。

五月二十二日　(月)

午前八時全學生文部省附近に集りしかど警官隊の爲に妨げられ委員の會見顚末を聞く事などして散會し直に演藝座に集合せり午後一時

議長三輪信一郎(舊)を推して議事の進行を計れり

前私立日本醫學專門學校學生後援會設立趣意幷に梗概

趣意

私立日本醫學專門學校學生五百名別記の事情により退校せるに付き今後の方針を定め醫師たらんとする當初の目的を貫徹せしめんが爲め左記項目の中より有識諸彦の御援助を仰ぎ之が救濟法を講ぜんとす希くば何卒御加盟御盡力被下度候

一、學校財團を確立せしむること

一、確實なる他の學校に繼承せしむること

▲眞泉病院滅ぶ(世界)
舊蹟大八幡跡、風雨の弄ぶ大立物
例の日醫紛擾の飛沫を蒙り
八月八日

▲東京醫專新設議(朝日)

▲醫學校新設迄の豫備(讀賣)
八月十六日

▲日本醫專の開校(朝日)
退學生は別に新校新設の運動中
八月十八日

▲日本醫專解決(國民)
八月二十日

▲復校かそれとも新校新設か(國民)
曖昧に迷ふ醫學生
八月二十五日

▲其の後の日本醫專(東京府民)
八月廿六日

▲九月十一日より開校(中央)
牛込物理理校を假講堂として
八月廿八日

▲新醫專門設立(萬朝)
日本醫專の退學生の爲
八月廿九日

一、學生の處置に對し文部省に責任を負はしむること

右發起人（イロハ順）

伊東知也　井上角五郎
西澤本次　大角桂巖
奥宮衛　渡理三郎
金子榮一　茅原廉太郎
吉植庄一郎　田村賢一
田代亮助　中岡吉六
蘆原惟郭　熊谷直太
山本實彦　松本正二
丸山長四郎　清水廣良
諏訪龜太郎　鈴木順

梗概

謹而先輩諸先生に苦衷を披瀝し伏て其の援助を希ふ吾等五百の學生は私立日本醫學專門學校の指定獲得に關し本校理事者の人格及學校計營等に信を置き難く其引退を必要と認め血判決議して之れを理事者に逼りしが學生の主張は容れられず次で熱心なる保證人の調停も遂に理事者の退くる所となり加ふるに多數の犧牲者を出せるが故に吾等は醫約に基き五月十六日を以て同盟退校を斷行せり抑も本校が大正元年七月文部省の認定を得し以來學校當局者が學生に對して行へる横暴は言語に絶したりと雖も然も尙之に服從して隱忍自重默して勉學せるもの只吾等の將來を重んじ且つ

▲難つた醫專生（萬朝）
結束して新醫學學入校
八月卅日

▲日本醫專紛擾の其後（日本の醫界）
九月四日

▲立教大學醫科成らん（國民）
日本醫專を併合し、新校舍を池袋に新設の企
九月六日

▲醫專併合は無根（萬朝）
國際病院計畫の噂

▲立教の醫專併合と反對運動（時事）
併合とならば生徒團の感情を融和せん
九月八日

▲日本醫專が又一つ出る（時事）
磯部氏に浪交渉に、順天堂病院が助力

▲日本醫專生徒の後處分（朝日）
九月十一日

▲東京醫學專門學校（都）
新に創立されん

▲迄專講習所開始（朝日）

▲東京醫學講習所、中央）

▲醫學講習所の新設（讀賣）

私立學校經營の苦心を察したるが故に外ならず然るに日を經るに從ひ其誠意なき言動は停止する所を知らず何等信據なくして將來をトし指定を云々して父兄及學生を欺き其の責任を問へば恬然前約を忘れて言を左右に托し拙劣なる瀰縫策を以て一時を糊塗せんとするが如き擧げて數ふべからず

斯くの如く經營に方針なく學務上無權威にして而も理事者が文部當局に信用なきを知るに及び卒業と同時に起るべき切實なる生活問題に對して保證なきことゝ不誠意に對する精神上の不平とは抑壓せんとして能はず遂に之が排斥を決議するに至れる也

然るに學校當局者は此決議を撤回せしめんが爲め暴戾にして不當なる退學及停學の處分者三十七名を出し此等學生は今や滿腔の恨を理事者に懷きて修學の中途に當り徵兵に應ずるの止むなきに逢着し伏て全學友は決議に基づき涙を揮つて學校を去るに至れり

然りと雖も吾等は吾等の目的を捨つる能はず醫師たらんとする當初の目的を貫徹し併せて吾等の背後に纏綿せる幾多の系累を安んぜしめんとするの情や甚だ切なり玆に賢明なる先輩諸先生に向ひ吾等の父兄保證人と共に吾等が行路の開拓を衷心希ふと爾云

學校側より左の書狀來る

學生團

拜啓過刻得貴意候件に付其後の經過御報告申上猶又今後學生就業上に付篤に御協議申上度件有之候間明二十三日午後七時より神田區淡路町二丁目四番地日本病院内に愈よ今日開所

九月十二日

▲東京醫專開講式（讀賣）

▲希望に輝く（都）

舊醫專の學生

九月十九日

▲醫術試驗打切（朝日）

新制度の試驗開始

醫專の再紛擾（都）

講習會の差止

▲埼玉新聞、群馬新聞等の地方新聞にも記載されたり

× × × × × ×

雜誌其他刊行物

▲日本醫學專門學校

▲日本及び日本人（大正五年三月一日號）

…日本醫專の紛擾…困つた資金問題…

…濟生學舍の沒落…生れ出づるまで…

機部混澤の爭ひ…寄附募集の魂膽…指定は次の問題…望むらくは一奮發

●無覺！日本醫學專任理事機部檢藏（上）

▲欺詐奸邪を以て父兄を陷れ、私利我

於て有志保證人會相催候間萬障御繰合せ御來車被成下度得貴意候也

追て當日は學校當局者より主務省の方針に付報告有之筈に御座候

大正五年五月廿二日

日本醫學專門學校　學生保證人有志會

文相會員委員の報告あり、文相は學生に對し私立學校に對する文部省の立場より學校の設議の事を述べ終りに諸君等學生は一度學校に歸りて善後策を講ぜよ之が學生の最良策ならんと、終りて公開演說出演辯士を協議する所ありて四時二十分散會。

五月廿三日（火）

開會午後一時、議長　關基（舊）　高畠秀勝（四）

（一）磯部側にては學生有志保證人會の名目の下に保證人を集めて學生に反對に出でんとするを以て學生は各自保證人を充分說くべき事となしぬ（二）異分子除名說出でたるもその旗織鮮明なる者を除名なし然らざる者を之を除名なさゞる事と決し同時に發表せられたる異分子左の如し

（一年）岡田一布、八木德三、齋藤松三、岩本達三、阿久津某（二年）林榮次郎（三年）佐々木二朗、池田淸、高橋修男、星野孝治（四）八木忠作、小泉富衛、小室卓爾、阿部田滿、眞家由藏　以上十五名

本日草稿部柏村、三輪兩名各徵兵檢査執行せらるゝ者に對する學生側保證側人よりの辨明書を起草せり、徵兵檢査を受くるもの

憂の爲に學生を犧牲にす

▽斯の如き佞物を葬らずんば、嗚呼社會人道を奈何……

（東京魁新聞五月下旬頃）

●文部の責任を如何（同號）

●惡魔！磯部檢藏（下）（六月上旬頃）

●日本醫學專門學校に就て

（茅原華山氏洪水以後五月下旬號）

●日本專醫紛擾經過錄

（大角桂巖氏、同號）

●日醫問題に就て當局者を戒む

（大角桂巖氏洪水以後六月上旬號）

●日本評論を發行するに際して

（華山氏、日本評論七月號）

●醫專問題と當局の責任

（金原善三郎氏著、六月十日東京曙新聞社發行）

●高田文相を叱る（血淚慈轉載）

（國論七月號）

●健在なれ醫專學子（國論八月號）

●東京醫學講習所開設（國論九月號）

●果して正義は最後の勝利者

（國論十月號）

武田光麿　宮崎縣　本郷區聯隊宛
丸山郁雄　東京府　同
波津久統重　大分縣　大野郡役所宛
今藤繁郎　鹿兒嶋縣　入來村役場宛
和田馨　北海道　旭川區役所宛
以上五名

來廿四日公開演說に就き廣告ビラ新聞紙に挿入なし又午后四時神田青年會館に集合の事に決して午后二時四十分散會。

辨明書

原籍　姓名

某

右は日本醫學專門學校學生に有之候處今回全校指定運動のため退學處分受け候然し其該處分たるや全く學校當局の詮議其當を失したる者に有之候事學生團より貴官に具申せし辨明書及び血涙錄記載通りに有之候追而全校尙紛援有中に有之り落着次第復校致すべき性質のものに有之候間本人の爲辯明候也

年　月　日　私立日本醫專學校學生保證人委員
海軍少將　奧宮衛㊞

徵兵官宛

五月廿四日（木）

●文部高官の墮落を別抉して學商日本醫專を征伐す

……醫界廟淸の醫鐘頻りに鳴る、山根正次、磯部檢藏其れ何者ぞ。

……制度缺陷尙原因の一部をなす、彼は跛者にして前科者なり。

……磯部學生より九千圓を詐取す、五百名血判嘆願書を文相に提出す。

……中央會堂に五百名連袂退學を決議す

當局者學生の老父を殺す。

磯部檢藏と福原次官の醜關係、

……五名士の獻身的盡力により新校設立

（日本浪人陰謀號）

其他醫事雜誌として次の如し

○醫海時報　○醫事中央雜誌
○醫事公論　○醫事月報
○醫事新聞　○日本醫事週報
○日新醫學　○東京醫學會雜誌
○東京醫事新誌　○中外醫事新報
○日本醫學

學生團刊行物

第二回公開演說

開會午后五時於神田青年會館

一、開會之辭　學生委員　迫田君
二、經過報告　後藤（哲）君
三、敵に非ず　有柳有美氏
四、止むを得ざるストライキ　文學士　大町桂月氏
五、感想　大角桂巖氏
六、主務大臣の責任を問ふ　土屋清三郎氏
七、當局の怠漫　市會議員　伊藤仁太郎氏
八、共同一致　森川國南氏
九、一大事一小事　大野睦雄氏
十、滿都の法學生に檄す　中央大學生　神野新三氏
十一、三つの病根と醫專問題　金原善三郎氏
十二、學生諸君に同情す　佐藤稠氏
十三、自已の權利を發揮せよ　市會議員辯護士　笠原文太郎氏

以上十三名士の外長谷川富士太郎氏の所感、岩本一介氏の無力なる後援會の題の下に同情ある熱辯を奮ひ會場内には聽衆の滿ち頗る盛會にて學生迫田閉會の辭の下に十時二十分閉會せり。

五月二十五日（木）

▲血涙錄（國報第一號）（五月九日學生團本部發行）
▲團報二號（五月廿日同團發行）
▲團報三號（七月八日同團發行）
▲團報四號（八月四日同團發行）
▲血染の歌（路人作）
▲祝賀の歌（路人作）

× × × × × ×

エピソード

▲神田淡路町町民の近頃に迷惑と云ふのは、日本醫專の生徒が磯部理事邸へ押寄せる騷ぎと高田實の宅で朝から晩迄琵琶をベロつかせてゐる事である、そして琵琶の方が毎日だから罪が深いと溢ぼしてゐる（日々）

▲學生の同盟排斥を受けて居る磯部、日醫理事は此度の紛擾を以て寧ろ直接自分の死活問題と思ふて居るので毎日跛を引きつゝ早朝から文部省へ出かけては福原次官や松浦局長の出勤を待ち受け醫師資格認定の泣訴をして居るが之には次官も局長も弱つて居るそうだ（毎日）

開會午后一時、議長　影本速男(舊四)　副　山本仁(四)
格別なる議事もなく第三回公開演說開催に就き時日會場等は委員附托の事。委員

一　伊藤　青木　海江田　高尾　山本
二　馬詰　灘波　吉澤　原　佐々木
三　中川　野家　和田　調　市原
四　城戸　松岡　前田　宮崎　山桝
前四　細井　嘉陽　石橋　藤牧　須藤　以上二十五名

二、諸學校辨論部誘說の事　委員名
後藤　關　中川　迫田　山本　波津久　須藤　並河　柴田
鈴木(明)　武田(光)

三、代議士及新聞記者訪問の事　委員
記者係　後援會係　各縣人會員

四、後援會保證人學生懇談會開催の事
後援會係代議士訪問委員一任

右決議事項あり次に後援會委員伊東知也氏渡支に就き學生一同東京驛に集合なし送別し歸途一同日本病院を訪問せんとせる折しも萬一を慮り警官數十名警戒せると睨み合ひて散會す。

五月二十六日　(金)

後援會名士訪問の爲め奔走、左の端書來る

▲學校騷動の代表委員とかゞ、二十二日(五月)文部省に押しかけた、高田文相は次官參政官立合の上で之を引見したが、屏風の蔭には四人の角袖が頑張り扉の前も嚴重に警護すると云ふ有樣、餘り仰々しい用心の仕方と眉を顰める人もあつた(日々)

▲廿二日、日本醫專の退校連が復も文部省へ押寄せたと聞いた荒川副參、若一彼等にして秩序ある行動を取らば乃公豈援助を惜まんやとあつて早速駈けつけたが、彌次馬と間違へられて警官に捉まり、威丈高になつて「吾輩は遞信省副參政官荒川五郎ぢや」、其荒川が援助を斷念して歸つて來て「吾輩が官名を名乘ると警官の態度一變サ、官吏は實に有難いものだね」(時事)

▲指定問題で騷いで居る日本醫專の紛擾も久しいものだが何分文部省が動かぬので學校側は設備や基本金でヤキモキする學生側は自己の成績を棚へ上げて經營者に信用がないからだと攻擊し今度何うしても指定にならねばコンナ學校はブヅ潰

本校第一回卒業試驗大正五年六月十五日より施行の事に相定め候條受驗者は來る六月五日迄に卒業受驗料を納附すべし尙今回の試驗に受驗せざる者は明年度の卒業試驗期にあらざれば受驗するを得ざる規定に有之候間爲念申添置候

大正五年五月二十五日　　私立日本醫學專門學校

五月二十七日　（土）

午前八時開會、議長　後藤吉勇（舊）

議事を進め後援會の事に就き大角氏邸に四年小川東洋佐藤理兵衛二氏を送りて其後の經過を尋ね一元社に茅原氏を訪ひて報告しぬ、又學校側よりは父兄に勸誘狀を送り又卒業試驗の通知を發して盛に團體を亂さんとする故を以て學生側にても父兄に夫々安心せしむへき事となり、又本日文相訪問につき委員數は十名となしその人名は（前四）嘉陽、小谷、猪股（四）菅野、山本（三）須藤、本保、追田、波津久なり、而して午后二時迄休會なし再び午后二時に開會なし文部省訪問委員の顚末報及日本病院に於ける磯部との交渉顚末の報告あり、而して文部省にては大臣次官不在の爲め局長に就きて日本醫專の敎務上に關して諮すところあり一方日本病院にては醵金を請求せるに磯部は不在のため吉村氏に面會せるに個人にて名刺を持參せば直ちに反却すべしと又後援會に就き種々協議する所あり次に中本氏より會計報告あり之に就きその主任を本部に設置する事に可決せり

して校舍を燒いて了ふなど、脅かす學校では急に新築の大講堂に對し明治火災へ二萬八千圓の保險契約をしたとは、マア〳〵用心に如くはなし（朝日）

▲昨日靑年會館で日醫問題演說會に大町桂月氏は「今回のストライキは眞に理想的とも云ふ可き物で眞に已むを得ざるものである」と（中央）

▲一兩日前、文部省で日本醫專の學生側代表者を省內に呼び、福原次官、例のヌーボー式慰諭を試みると、代表者連學校の遺方が敎育勅語に反して居るとて、大に理事者の不都合を鳴した末「貴官は一体敎育勅語を御存じですか」は、流石の次官も目をパチク（報知）

▲日本醫專の問題は學校騷動より一轉して刑事問題となる暴を以て暴に易ふとは是か（萬朝）

▲目下紛擾に紛擾を重ねて居る日本醫專の保證人を生徒が聯合して學校へ退學屆を提出したがこれに一場の喜劇がある。所は右の退校屆が學校へ出ると當局は大に驚き早速學生達の國許へ向け果して父

其他樣々協議する所あれども多くは否決されて午后四時四十分散會しぬ。學校側にては學生の復校を各父兄に迫まり廢校を免れんとす樫田二郎と云へる警部上りのもの學監となり教授は五六人の學生に講義するの馬鹿々々しさをコボシ居れり因に記すマニラ留學生は慈惠醫院醫專に轉校すと愈々學校の廢滅即磯部の滅亡期は來らんとす吾人は更に團結を強固にし最後の勝利に新たらしく蘇へらざるべからず

五月二十八日（日）

開會午后一時、議長　青山豪一（舊四）　副　今藤（三）

本日　公開演說に出席辨士決定發表せられたり

又決議事項として（一）欠席者に對する處置に就て協議する所ありたれども遂に調査掛に一任して規定制定とし而してその態度不明なる者は之を處分する事とせり。（二）中本計會主任より第三回團費徵收に就き二十九日納附せられたしとの通知あり（三）、公開演說廣告は各區にわたり係を定めて貼布する事とす（四）、學生は任意に磯部氏宅に居据り醵金の返濟を請求すること、斯くして時ならずして日本醫專理事なる吉村氏來訪あり學生之を罵聲の中に迎へ漸くして登壇せしめて來訪の旨を陳さしめ學生に同情等厚顏しき言の喋々として述べければ學生之に樣々の問を以てせしに答辨なす能はず斯くして學生も四時五十分會場を去りぬ。

兄は御承知の事かと照會に及ぶと之れ又大に驚いて早速上京なして保證人の許へ駈け付けて一体貴郎は誰に相談して退學届へ判を御捺しになつたかと膝詰談判に及ばれ大に弱つてゐる連中が尠なからずあるさうだ（日々）

▲學生尙文部に迫り據校運動を爲す兩多摩郡の電車撤廢運動と好一對の不可解運動（萬朝）

▲日本醫學專問學校の生徒で波津久某と云ふ秀才が旗頭になつて活動したが此生徒は鄕里大分縣で賴母子講などから金を贈られてゐたのだ、處が實父は息子の行動が鄕里の人々に對して相濟まぬと云つて腹搔き切つて死んださうだ（日々）

▲日本醫專が今一つ出來るとは眞か醫師の粗製濫造は眞つ平御免なり（每夕）

▲近頃乃木大將を盛んに擔ぎ廻つてゐる奴が居るが大將も定めし地下で憤慨してゐるだらう（ポケット新聞）

▲日本醫專の某と某の重い位置に在る連中が結托して學生から絞り取つた寄附金を昨春の選擧運動に使つたげな實際だと

五月二十九日（日）

開會午前九時、議長　中本富太郎（舊）　副　片岡己代治（三）

（一）欠席者數報告又之に對する罪金等定むる所あり

（二）後援會に關する報告ありその中此れか會に入れる名士に近藤次繁博士等あり

又明日文部省訪問說日本病院に磯部氏を訪ひ據金請求なす事とせり文部省は委員托とし之か選定は調査係に一任なし（二）柴田、早川（三）菅野、尾形、迫田（四）土志田、金成（前四）後藤（哲）嘉陽、猪股以上十名とし日本病院には全學生にて決行なす事となれり、斯く決定の結果十一時半散解して午後六時日本病院前に集合せり、然るに又もや警官隊の警衛嚴なるも早や激したる學生は之か壓迫をも顧みず殺倒せんとせり折しも警官によりて門扉鎖せられたり而して堰かれた水の力强き如く學生之に一場の活劇を演じて潮の如き勢を以て遂に門扉を破碎するに至れり、此の時の有樣又慘たる言ふに語もなく、或は金を返せと或は罵聲をあけ或は警官と衝突して帽子を失ひ提灯を碎き拳は宙を飛び棒は空に鳴りて目さす警官にと飛びぬ、斯くして爭鬪十數分に及び警視廳よりは係を派遣し大通りは人の山を築きてその喧々たると相待て警官の叱聲又蚤　囂にも等し、斯る內に警官の人數數倍なし遂にその鎭撫せらるゝに到れり、然れども金を返せ九千圓の金を返せ、金取りに來るに何の官權を以て壓迫の必

すれば怪しからん（ポケット新聞）

▲日本醫專の生徒、學校理事者の違約に憤慨して一同退校屆を差出す、結局は如何になるや。

▲五百人みな燒糞の匙を投げ（ポケット新聞）

▲紛擾を專門にする醫學校（萬朝狂句）

× × × × ×

昨冬十二月に我等が奮起せし以來各地に學校騷動の頻出せしに驚く。我等の正義の擧と其原因を比較せられん事を望む。

金澤醫專（福田博士排斥）

愛知醫專（熊谷校長排斥及教授の衝突）

長崎醫專　青木博士と田代教授の衝突）

朝鮮醫專（角帽を冠り度き爲）

日連宗大學（學校移轉に反對して）

岡山醫專（風見教授排斥運動）

熊本藥學校（國峰、安本兩教授排斥）

大阪齒科學校（理事者不信任）

仙臺第二中學校（渡邊校長排斥）

岩倉鐵道學校　理事者排斥）

美術學校　正木校長排斥）

前橋中學校（校長の墓を門前に建て排

要あるなど盛に絶叫せり、而して間もなく急報に接し鈴木辯護士の來り調停する所あり遂に十名の委員をあけて面談請求なす事と定め一方學生は九時一先散解せしめぬ、その請求直談に及べども要領を得ずして解散せり

五月卅日（火）曇

開會午後一時、議長　上野賢太郎（舊四）　副　高畠秀勝（四）

昨夜の大活劇を演ぜし全學生その樣子を語りつゝ會場に集るや間もなく議長より欠席者數の報告あり同時に文部省訪問委員迫田、緒方、後藤、福島氏等の文部省に向へり

後駒込署長來場、一條の訓諭あり

昨夜の行動に就て學生の後藤哲雄、波津久統重、關根の三君拘引せられし事は殘念なりと又言を連けて曰く今後斯る行動に出でざる事を誓はれたしと斯くして學生と堅く誓ひて拍手の中に場を退けり某氏等三名拘引せられたる事に就き小野君よりの報告あり又昨夜磯部との會見報告あり（一）名刺を持參せば返金すなど云ひたる事なし（二）返金を望むなら法律にて取れ（三）吾は教育者にあらずと、以上の如く斯く言へば斯く逃れ、逃れては斯く言ふ彼の毒舌三寸何で一秒時前の約束も約束とせず、言をも非認するが如き彼之を以て己が逃れ路とするが如き云ふに言葉なく書くに筆なし、又文相訪問報告は大和座に於て公開演說の席上にて之を發表する事となれり、散會

斥演說をなす）

岐阜商業同盟休校

千葉中學校　端艇競爭禁止問題）

千葉縣佐原中學（四年生對五年の葛藤）

盛岡農學校（退學所分を無法なりとて）

茨城縣下妻中學校（橋詰校長不信任）

高崎中學校、校長排斥し團結の約を守りし者三十名退學さる）

長崎商業（停學處分を怒る）

熊本玉名中學校（血判し教師を排斥す）

弘前中學校（舍監を熟睡中に袋打きにしたる嫌疑によりて）

佐島中學校（連判狀を作りて教師を排斥す）

成田中學（古家教諭の試驗問題不吉の爲）

明倫中學　校主と校長の意見の衝突）

大分師範學校（四年生全部姿をくらます）

× × × × ×

（委員附記）學生團本部のスクラップ及び僕のとH君A君のお參考にしたのである。都下の新聞は大凡網羅した積である。

二時十五分四時半大和座(本郷三丁目)に集合なす事として散會しぬ。

△於本郷大和座第三回公開大演說會

議長須藤元

五時、文相會見顚末を報告せり、終りて直に演說會を催して後藤哲雄の經過報告あり次に順次左記の題目の下に熱辯を振へり。

一、吾々の問題なり　高島米峰氏
二、岐阜の奇人　青柳有美氏
三、醫專問題と當局の責任　金原善三郎氏
四、磯部檢三論　森川國南氏
五、此の信義を如何にせん　大角桂巖氏
六、演題未定　土屋清三郎氏
七、同　大町桂月氏
八、小さい樣で大きい　向軍次氏

此の外學生の演說ありき又聽衆の多き事無慮數千人女醫學校始め數多の婦人も見えたり。斯くして解散せしは十二時近き時にして電車の走る稀なりき。

五月卅一日（水）晴

午前九時、議長　青影(舊四)　副　迫田順一(三)

昨夜の閉會遲きにも關はらず學生の出席數多きは喜ばしき事なり

缺席人員報告後徵兵に關して本保より注意あり又後援會長より報

我等は都下の新聞紙が連日筆を揃へて同情ある記事を載せて呉れし事に感謝しなければならぬ。其事は我等の學が正義にして且つ大なりし事を證明して居るのである。新聞に反して雜誌は一般に冷淡であつた、其内でも國論が數號に亘りて我等の爲に筆を揮ばれし事に感謝せねばならぬ。其の外日本浪人の陰謀號に載りし「文部高官の墮落を剔抉して學商日本醫專を征伐す」は原三郎君の書かれし物にして言々句々血と涙の結晶よりなり一物なれば是非一讀あらむ事を望む。僕は本日A君と日君と三人で某小學校の展覽會を參觀した。一教員は現今教育界の腐敗及び當路者の無能を痛罵した、常から理屈つぽい三人でも此先生には受太刀たるを得なかつた。それから話は日醫の紛擾問題に移つた。先生曰く「僕が學生であつたら校長を刺し殺したネ」から初まつて惡罵に亞ぎ嘲笑、殆ど完膚なき迄も日醫專を罵つた。僕等に一面識なく勿論東醫の學生であゝ事ハ知らぬ小學校の先生に此言を聞くに及んで微笑を禁ずる事か出

告あり、即ち賛成者頭山滿翁以下二十三名の多きに上れり、又奥宮氏私用のため後援會より脱會せらるゝ事を大角氏より報せられたりと又後援會の事に就き奥宮委員長の事に關し樣々の意見發表せられたれども之を省略せん、又調査掛協議にて軍隊制度を採りてその命令傳達等を秘密裡に速ならしむる事とせり。

團報第二號本日發行配布、十二時半解散。

今月一日以來連日の活動も茲に一ヶ月となりぬ、多忙多憂多感なりし、新緑の五月は逝かんとす。

六月一日（木）

月更りぬ學生の心も亦更りぬ、憶へば早や一ヶ月はすぎぬ、此間の奮鬪も亦輕々しき者ならず、之れ學生の自重して以て團結せしに倚る者なり、心淸き學生よ、願はくば何處迄も解決する迄は倦まず撓けず奮鬪努力せよ。

開會午前八時、議長　酒井敏雄（舊四）　本保秀（三）

缺席者報告終り、後援會委員の活動報告あり各政黨幹部を訪問したるに、島田議長始め正義に組する人士の吾等のため努力すべしと又會計部より傳票制度の發表ありてその整理上の方針を述べぬ、解散十時二十分。

六月二日（金）晴

開會午前八時、議長　波津久統重

來なかつた。（馬詰嘉吉記）

地方新聞記事は收集困難につき省略す。

その前後

安部路人

四月十七日

Aは今日學校から級長の辭令を受取つた、その辭令には校印も何も捺してなく下手の文字で書かれてつた級（クラス）の撰擧でないならば突き返さうかと思つた程氣を惡くした、然しこの辭令も老巧した醫學博士××校長が手づから渡されたのであるから生涯の光榮にはちがいない。

產科が早く終つたのでAはN保證人委員を日暮里に訪問したが不在だつた。

花曇りの空を暖い風が吹いてまた一しきり往來を花見の生醉連中がどよめく

夜は折々雨が降つた、再びN氏を訪問十一時過ぎまで相談した、その結果兎も角、近日に××大學の當局に紹介してもらふ事として辭した、Aはうすら寒さを覺ゆる春の夜更けを花見寺の坂を上りつゝふり返つて、だん〳〵灯影の少なくな

後援會委員の報告あり又提議として後援會相談會開催の事に就き滿場一致を以て可決なし頭山翁をしてその發起人たらしめん事を希望せり。後援會係の外各縣人も之と協同して後援者の詮衡に盡力せられたしと協議終りて九時半解散せり。

六月三日（土）晴

開會午前九時、女川精太郎（舊四）副　前田（四）

缺席者報告終り各縣人會の名士訪問の報告あり又旗色不鮮明なる者に對する處分等提議さるゝに至りしかど臨機應變にその處置に出づる事と決しぬ、斯くして日本醫專に登校せし者の氏名發表あり「四年」富永、眞家「一年」岡田、齋藤、八木、小澤、村瀨、阿久津、岩井以上十一名又瓜生、奥川二名を彈劾なし議長より之に除名を宣しぬ。

又學生全部住所氏名を記して駒込署に提出なし一時十五分解散

六月四日（日）晴

開會午前九時

各組缺席報告終り各政黨本部訪問せし者の報告あり、その中、島田三郎氏學生と共に正義の爲には努力せん事を誓ひたり、提案として公開演說の件あり議論樣々なりしも大多數を以て十日以前に開會の事と決定しぬ、各組より會場係の選擧あり期日場所等は皆之が附

つて行く駒込の方を眺めつゝ「一騷動起すのを辭してはならない靑年時代は元氣ある血潮をたぎらせて若き思ひ出を豐にせやう」と呟いた、花よ散れ、世はまた努力の季節に入るのだ。

四月十八日

Aが登校する頃もう飛鳥山への花見客が赤の手拭を肩にかけ眼の緣をポツと紅くしながら行く、墓地の吉野櫻も茱色の葉が花をかくす程になつた。

內科及外科よりつぎの衞生學が引きつゞき五時間休講なので學生は思ひ思ひに花見や散步に出かける。

Aは實行委員の二三のものに「××大學との合併問題を實現するには今少し學生が强更に學校當局に迫らねばならぬ」と述べるや意外にも委員長のSや委員のWが直ちに贊成しすぐ之からN保證人委員を訪れやうと云つて出かけた、解剖室の橫手の坂を下り動坂へ通ずる廣い道路を右に折れ小さな家のかたまつて居る初音町を通つて日暮里に入つた、N氏は不在だつたので、三人暫く躊躇したがS保

托となせり。又記錄部より在鄕保證人に發送する葉書、大角氏の閲讀を經て發送する事となれり。十一時三十分閉會。

六月五日（日）晴

開會午前八時、議長　石橋（舊四）　副　和田（三）

（一）缺席者報告（二）文部省に本日開刻五名委員を遣して先日の回答を求むる事とせり、委員名（二）佐多（三）馬島（四）佐藤（舊四）酒井嘉陽以上五名駒込署の認可を得て行く（三）公開演說六月八日午後五時大和座に於て開催に決定す、九時、解散す。左の端書を發送す。

初夏之候各位益々御多祥奉賀候其後本問題には保證人會及學生一同の努力今や進行仕り、社會の反響日に增し有力にて旬日を出でずして解決の運びに相成居り候間御安神被下度候、就ては兩三日中に學校側より教授會の結果なりとして斷然退校せしむる趣を以て故鄕父兄諸賢に對し、欺かんとする事及聞候に付、何卒學校側の通知には決して御返事無之樣懇願候也

大正五年六月五日

前日本醫學專門學校

保證人及學生團一同

六月六日（火）

開會午前九時、議長　武田幸治（舊四）　副　佐々木政雄

報告事項　（一）缺席者報告

證人委員は田端であるから其處へ行かうと一決して足をめぐらした。

「早く××大學の學監に逢へるとよいがれ、何にしろこの學校の窮狀と學生を救濟するには合併問題より外にはないんだから」とSは眼鏡の奥から白眼をむきながら口を尖らした。

「實際だよ、あんな△△△に何か信用できるものか、××大學に合併するのが一番いゝんだ、然しN氏もあてにならんからな」とWは附け足した。

「僕もN氏を絶對に信頼はしない、何處か輕卒で人氣に投ぜんとする氣分があるからね、然し僕の思ふに現在のところ救濟の方法としてはN氏の提案である合併問題はかりだから何れにしろ早く確實にしたいものだ」

いつか見晴しのよい丘に來てしまつた春の光りは野にも滿ちて荒川堤のあたり霞がこめて居る。

S氏の家は田端停車場の崖上で東郊を一眸に收むる二階屋である、黑く濕つた土に一重の落花が白く地を染めて植込の木

（二）後援會員活動盛にして又各縣人は出身の名士を訪れて吾人の境遇を陳情し同情を求めては吉報をもたらす事頻なり。殊に本日の報告として、古川道之助の埼玉縣人として本多博士訪問、成田義英の澁澤男息基次氏訪問し又秋虎太郎氏大角桂巖氏等の島田衆議院議長訪問の會見談をに報告せり。曰く大に團結を固くして努力せよ又私等も一味の後援會者とならんと。

酒井、文相との會見談の報告あり文相曰く學校側より具体的案提出なき迄は彼此と當局として干渉する事能はずと又曰く今後學生が飽く迄決心固く復校せざる時は第三者の出でざれば本問題は解決をせざるべしと又福島縣人會として佐倉君山川大學總長を訪問せし事報告しぬ總長曰く學生の境遇には大に同情す又その行動に就て研究中なりと、又文部省には毎日今後委員三名を訪問せしむる事とせり。其外會計係法律係より注意事項ありき。

議事終りて十一時十五分解散す。

六月七日（水）

開會午前八時、議長　嘉陽宗正（舊四）　副　村上（三）

一、缺席者報告

文部省を訪問し文相に面接する能はず秘書課長に面談せし報告あり、又公開演說開催期日に就て討論する所ありしが九日と決定せり又各縣人が主任を作る事に決したり。

々も森閑として居る、照田泊と支那風の扁額をくゞり玄關に入つて案内を乞ふと壁の彼方で茶碗を洗ふ音が絶えたと思ふと大きく足踏みならして逞しい青年が表はれた、ブルドツクの樣に肩をいからして私等を見上げて「先生は不在です」と云ふ、奥の方では尙大きな足音がして大男が動いて居る、生意氣を云つたら張り飛ばされそうな權幕である、玄關の式臺には泥の附いたまゝ大きな甘藍が放り出されて居て、蠻氣滿々たる主人の性格は至る所に表はれて居る。

「それでは明朝伺ひます」

「ハツ」と怒鳴られる樣な聲を後にして外に出た。

「驚いたね」

「だから支那の亡命客をかくまつても警察で手が入れられないそうだ」

落花の庭を顧みつゝ麥畑の短い畑道を辿り建ちかゝつた寄宿舍の方をまはつて歸途につく。

Wは非常に熟して軟派の處置を憤慨した。

六月八日（木）晴

開會午後一時、議長、須藤力三（舊四）副　山田（四）

前日二年級生の緒方博士の訪問報告あり、決議として人心を新にし又新活動を開始すべしと而して會場係は之を定めて明日より菊岡亭を會場とせり、又保證人委員諏訪氏登壇して經過報告及び大角氏との感情錯誤を述べ學生をして不安の念を抱かしむ之に於てか學生が仲介をなし鎮撫する事となれり又諏訪氏の報告にて新井氏學生に誠意なき事を知りて大に憤慨せり、而して今後感情問題に入る事を注意して四時散會しぬ、又本日公開演說開催せり。

於本郷大和座第四回公開大演說會

開會の辭　後藤哲雄君

一、經過報告　大角桂巖氏

二、三十九日　金原善三郎氏

三、虛榮の禍　鈴木順氏

四、所感　向軍次氏

五、文相の責任　土屋清三郎氏

六、人心動もすれば歸向を誤る　高島米峰氏

七、所感　高崎の一醫師氏

八、所感

其他學生十餘名の熱辯ありて十一時閉會せり

「とにかく濱邊に學校を任せて置いたらとても駄目だと云ふ事は分り切つて居るのだ、あの山師と來たら何んでも胡魔化してしまつてとても僕等は及びはせぬよ又委員會の委員長Uをはじめ多くは買收されて居るし、事情を知らぬものはうまく彼等の辯說でだまされてしまふのだ、僕等の樣な暗い裏面ばかり見て育つて來たものには人以上よくそれがわかる、だからKにしろ君（A）にしろ、いつも裏に裏をかいて行く彼等の辯に飜弄されて居るのが僕には癪がゆくてならない、實際だよ、だから僕等は今度こそは濱邊に裏をかゝれぬ樣な堅い同志が募り徹底的の一騷動を起し大にやらなければ駄人どもを追ひはらふ事は到底出來ないのだ……」

Sは近眼鏡を光らせながらつけ加へた

「君（A）なんか始めて委員になつたのだから內幕は分らないでせうがね、僕の樣に長く一年時分からやつて內情を知つて居ると嫌になつちまふからなあ、委員の中有力の奴はすべて軟化して居るので……殊に彼等には辯論家と腕力家が連絡して

聽衆千余名稀有の盛會にして萬都の名士の同情學生の身邊に集り〳〵てその光明を認めたる實に學生の喜と云はざるべからず、奮鬪努力事をなすにあたつて、正義を以て成して何ぞその結果の揚らざる、即ち學生は將に光明赫々たらんとす、それ五百の青年の意志の堅き怖しと云はざるべからず、昔の言に曰く「正義に組する者は弱と雖も冠を頂かれん」と實にも然り。

六月九日（金）

午後一時集會　於根津菊岡亭

議長、行實憲親（舊四）　副　大森興仁（四）

本日より會場を便宜上、菊岡亭に變更せしも狹き爲め明日より他へ定むることにし、協議事項に移る。

（一）文部省訪問本日の委員撰定（二）、各教授訪問の件は鬪議の結果、否決となる、（三）、金原善三郎氏著「醫專問題と當局の責任」なる小冊を各自二冊宛購入の件（可決）、（四）、縣出身關係ある參政官訪問の件（可）

次に會場は明日より本郷鈴本亭と定まる。

午後三時解散。

六月十日（土）

鈴本亭　午後一時開會

議長　齋藤周德（舊四）　副　丸山郁雄（四）

居るし……今度も非常の覺悟を要しますよ」

Aはいろ〳〵と古參の二人の委員から事情を聞かされるに從つていよ〳〵その決心は强くなつた、どうしても濱邊を葬られればなるまいと心に誓つた、二人の說明が長くつゞいた後Aは口を開いた。

「そんな暗流が委員會の中心にあるのかれ、多少は自分では怪しいなと思ふ事はあつたが何しろそれを解決する程の經驗がない、僕は彼等の策略が餘りに巧妙なのでいつもそれが正當なものと解して居た、そしてW君などが躍起になつて反對するのを反つて苦々しく思ひ常識のない者と考へて居た、こんな裏面の策略などと云ふ事は僕などの樣な境遇……社會の經驗に暗い者には悲しい哉それを洞察する力がないのだ、それならなぜ僕が今度一騷動しようと力說したかと云へばN氏の意見に動かされた結果、この純な良心正義心、道德心が一時に焰え上つて、云はゞ若い心が欠乏した正義を望んで突進したまでだ」

今朝文部省訪問の報告、安部對局長との會見、要するに學校さへ善くなれば學生の幸福なのだから君等も磯部と山根を殘してもいゝだろう。又學校側の保證人より文部省に案を出してある……云々。

明日は日曜なれば、文相、次官、局長、參政官、副參政官の各私邸訪問の件可決、委員撰出。

次に鈴本亭には電話あるにより、學生中に醜漢交りて會議の模樣を磯部派に通ずる恐あれば電話係二名を撰び、本部及各所との連絡を計る。三時閉會。

六月十一日（日）

午後一時開會、議長　福嶋辰三郎（舊四）　副　宮崎喜一（四）

（一）文部大臣訪問委員報告、明日文部省に來れと（二）、秘書官面會、中川委員報告、學生側より先日磯部を排斥すれば指定は眼中になしとの過言を取り消し、保證人に學校側と學生側と二種あれば混同せぬ樣に願ふ。秘書官曰く、廢校は易いが君等が損だろう。寧ろ第三者を探ねるが一番だ、尙斯んな學校に認可したのが惡いのだがあれは政友會內閣の時やつたのだと。又官立學校へ分配は困難なるべし云々。

（三）福原次官面會、中村委員報告。次官曰く、君等訪問委員は一定すべし、君等は受業しながら磯部を排斥すればよいではないか、學校でも一生懸命にやつてるらしい。學生は少しづゝ退學するらしいか

「まつたく、僕にはなぜ人の爲す事の裏面ばかり見ゆるかと云ふのに自分の境遇が然らしめたのだ、繼母に對する僻みが世界を暗くしてしまつたので、その暗い心で見ると君などはまだ觀察が上辷りだからなあ」と云つて大きくWは笑つた。Wは面上いつも暗影をたゝへて居て「境遇の私生兒」と云ふ名もある位である。その笑には始めて今度自己の意見を貫かうとし且つそれが成功するに逢ひないと云ふ自信があるらしかつた。

こうして各自の胸の血を沸しつゝ學校にもとつた、控室に入つて賣店の婆さんの店前に腰下していくつも欠伸を嚙み殺して內科の時間を待つて居た。

夜は滿月が東南の空に上つて白い薄雲の間に星さへ見ゆる、Aはだるい体を上野の夜櫻に運んだ。春の宵は何となくひとり身の淋しさにつまされ櫻の木かげを縫ふ人のすべてが甘い戀を呼きつゝある一對であるのも自然の姿として眺められる、あはれ我と手をとる乙女もがな。

四月十九日

一体退學届を出す事は間違つている。次官曰く、それは凡て理想であつて不可能なり。磯部とは絶對に縁を切るつもりですと、次官又曰く、指定になると斷言した言葉を出したのは磯部が惡いのだ局長から磯部を詰責した筈だ。當局は指定條例に適合しなければ指定は斷じてしない。又財團に交渉して左右し、學校買賣の仲介も出來ない。青山博士說の官立學校へ分配も不可能なり。君等は實力あれば名譽ある國家試驗を受けたらよかろうと。學生はそれは拒絶し、且今日迄堪え忍んで來て破裂したのだから、飽く迄目的を逐行せねば如何なる提案にも贊成出來ませんと云つて退く。

(四)副參政官面會三輪委員報告。來意を告げたら私邸へ來られては困まる。文相も此の問題には手古摺つてる。廢校は容易だがこれを逐行すれば大問題となるから考中だと。

(五)大津參政官面會和田委員報告。曰く全生徒退學許可を見合はせる樣に當局から注意した。磯部側の案を省では採用するらしい。君等が入學したのが惡いのだから父兄のことや君等の立場を考へて見たらいゝだろう。

(六)局長會見吉澤晁員報告。大略前同斷

警察よりの注意。昨日及今日で十八人が張本人と目されて署に召喚せられた、署長曰く「昨日から會場が變更したので、所轄署も變つたから一層愼しむ樣に。先日の約束を背いて、徵兵歸國學生を團

朝早めに出て田端に行く、小田一面に蛙の聲がひゞいて道灌山から見渡すと荒川の櫻は紅雲の樣に連り素の線と菜種の黃が繪具皿の樣に野を綴つて居る汽車は白い烟をはいて走つて行く

今朝はN氏に面會が出來た、然し直ちに旅行に出ると云ふので五分ばかり面接された、二階に通されるとS氏は白地の浴衣に長髯を撫しつゝ机に椅つて手紙を書かれて居た。

「今度いよ〳〵最後の手段として一騷動しやうと思ひます、それより他に道かないのです」

「そうか、然し磯部は一昨日會つた時もう金も集つたと云つて居たぞ」

「うそです、それは本當に嘘です、先日にまでそんな事を言ひましたが、金なんか一文だつて集りはしません」

「そうか、よければやるさ」

そうして匆々は其處を辭し淡い日影を背に受けつゝ登校した。

SとWにその事を通じさて同志募る事にした暇を見てSとAはTを誘つて上野

体で見送りしたのは惡るいと。又內山刑事は此の頃秘密に學生が協議する樣であるがこれは止して呉れ。と

明夕後援會懇談會を萬世橋ミカド倶樂部にて開くに就き會員諸名士に招待狀を發す。

協議事項としては明日の文部省訪問委員撰定、新聞紙利用、社會有力の士を說く事等、散會四時半

六月十二日（月）

午後一時開會、正　猪股省三（舊）　副　安村政明（四）

緊急動議として舊四年中に密に磯部に內通し、來る十五日よりの卒業試驗を受けんとするものあり、それにつき散會後舊四年級のみ集まり秘密會として前後策を講ずる由聞き各年級よりも代表者を臨席せしむる樣提案し可決せり。尙今晚の後援會諸名士招待會に學生團よりも委員會委員及團員若干出席する事可決す。

報告事項　（一）文部省訪問迫田委員報告。局長は博士號授與式の爲め又參政官は內閣の登報の爲め面會不可能、大臣次官副參政官へ面會。學生曰く、學校側後援會は、野心家揃にて不都合の者のみなり。それ等よりの提案は採用ならぬ樣に願ひたし、又今晚學生側後援會の會合ありと報告し、且つ開業資格もなき者に日本醫學士の稱號を與ふるの不可解なるを述ぶ。大臣曰く後援會の成立及性資は當局の知る所に非ず、君等及學校に對し利益になれば採用すべしと。

に出かけた、何處も落花露々として花は一日見ぬ間に殆んど色褪せて醉つた人も眼を瞠るばかりの姿になつて居る、不忍の池の汀を鵜が白く埋めてその下に鯉が戲れて居る。T君に歩きながらいろ〳〵と事情を語るとT君は笑ひながら「僕は喋れたいのだから役には立たんよ」と云つてまづ同志の一となつたのである。

精神病の後には級長就任の辞について同志會醵金還元問題を提議した、勿論之はAとSとWの三人が今回の騷動の第一の導火線として昨日謀策したものであつた、爆發迄に暫時この問題で熱を高めつゝ置く必要があつたのである。

S君W君等が已に期限も來た事であるし指定は別に來ぬのであるから最初の約束通り返却に贊成する意味の演說された

W君Sは及びSの方から事情を通じて同志の中に入つたのであつた、しばらくすると議論は沸騰して漸時その口調によつて硬軟兩派が明瞭に分れて來た、よい加減に切り上げて採決は役目にゆづり散會した、まづ之が旗上げの第一歩であつ

尙學生は最初の目的に向つて只進むのみなることを述べて退場。次に運動費として團費は責任を以て納むることや、某新聞社の磯部に買收されし事實等報告ありて二時四十分散會。

六月十三日（火）

午前十時開會、正　酒井敏雄（舊）副　水野宗雄（四）

報告事項、辯護士關幸太郎氏學校側後援會として學生代表者五名を呼び左の提案を出したり

山根磯部を殘し置き、通常理事を五名及評議員十名を置き、退停學處分者の取消しを條件として歸校すること。

右につき退學者の中既に徵兵猶豫無效となり檢査に合格せるものあり、その他磯部山根を殘す事は元より不可能の事として代表者五名より却下され、關氏も磯部側に調停の勞を取らざることにせりと。

協議事項　（一）來る十四日學校側より保證人大會を開く由なれば磯部及學校側後援會より瞞着さるゝを免る爲め之が妨害運動を試むべきこと可決となる。（二）警官の二階棧敷へ臨場は會議の不便を感ずる故次室へ退場を乞ふ事、可決。警察係交渉して、臨場警官次室へ退場せらる。

注意事項、調査係曰く、父兄宅より通學せるものは父兄をして學生の團結を破らしめんとするものあり各自注意を乞ふと。

次に昨夜のミカド倶樂部に於ける後援會相談會の內容を報告あり

た、夜Aは二年級委員のH君を訪ふたが不在であつた爲め一人でN氏宅に行つたいよ〳〵本物になりかけた事を告げるとN氏も元氣に「途中で崩れなければきつと成功する。それから××大學の方も明日遇へる樣にして置きました」と云はれた

いざよひの月はほの〴〵と黃ばんで夜風のわたる銀杏の梢にかゝつて居た

四月二十日

わが同志の活動に對して反對派も非常に警戒を加へて來た。それで今日××大學々監との會見にも我黨の士は或は行かれなくなるかも知れぬと云ふ憂びは三人の顏を曇らした、然し委員會の結果——此頃實行委員會は前四年級と分離し僕等の四年級が首腦となつて會議を繼續して居たそしてその委員會の實權は腕力を以て暴君の如く振舞ふ同級生のYに歸し彼は更に前四年級委員軟派の首腦と親密に通じて居た——ともかく暴君（以後彼を呼ぶにこの名を以てしやる）の指名でSとAと反對派側からは三年級の策士H及

三十一名の來會者重なるものは齋藤東京府會議長、高橋前沖繩縣知事、寺尾博士、向軍治氏、茅原華山氏、秋虎太郎氏、笠原文太郎氏其の他有力家數多あり、第一回の會合なれば具体的案としてなけれども大に樂觀して可なりと。午後二時散會

六月十四日（水）

午後一時開會、正　小野庄次郎（舊）　福富行雄（四）

報告事項、池上教授學生側に同情し調停の勞を取らんと、又大角氏より齋藤氏一派の軟化說に耳を傾ける勿れと、二時散會。解散後舊四年級中の受驗者問題に就て協議す、決議事項左の如し

一、新聞紙上にて今回の卒業試驗の不正なるを公表し二、未だ辭職せざる各教授を訪問の件三、文部省に不正試驗の報告する事

本日左の端書各學生に來りぬ。

拜啓　日本醫學專門學校に關する件に付き諸君の前途憂慮のあまり此際至急小生等の意見御話し申度候間保證人御同伴萬障御繰合せ御會合相成度此段御案內申上候、敬具

場所　神田區表神保町南明倶樂部

日時　大正五年六月十五日午後四時

大正五年六月十四日

笠原文太郎

藏園三四郎

びIが行く事になつた、二人行かれはするものゝ相手には非常な警戒を要する。四人は出かけた、出かけにWは小聲で「しつかり賴むよ」と注意したSとAは默つて笑つた、往來は風が强くて砂ほこりを立てゝ居た、四人は妙な心理狀態の反目から二人づゝかたまつてお互に間隔を保ちつゝ沈默の中に不安と警戒とを抱いて電車に乘つた、敵と味方！この不思議の現象はAは生來はじめて經驗した所であつた、表面では笑ひながらも一擧一動悉く掛引を要するものゝ如く强いられて來る、敵と味方とは席が隔つてその間には無心の乘客が幾人かつまつて居た。

「困りましたねえ、奴等が交涉の邪魔をするに定まつて居る、若し奴等がつまらぬ事を云つたら全々向ふだつて信用しなくなりまかすらネ」

「……」Aは默頭しつゝ見やると敵の二人も何か小聲に打合せをして居る所だ且は賢こさうなそのカイゼル髭をひねつて居る、Iは蒼白い顏にひすてりつくに光る眼を以て此方をぬすみ見た、その眼が

關　幸太郎
齋藤孝治
本間廣清

六月十五日（木）

午前十時開會、正　嘉陽宗正（舊）　本保秀（二）

報告事項。後援會は或る具体案に向つて進行中なり安心せよと。又學校にては本日より舊四年の敗德落伍者十五名に卒業試驗を施行せりと、受驗者中瓜生與川等は學生會の委員を勤め、今回の事には重大なる責任あるにも關せず同盟の議を破り、自己の利益に走る。全學生團は彼等の肉を喰はんも尙罪を許すべからず、議場なんとなく殺氣立つ。

協議事項、今夕の學生保證人調停申込會に出席せざる事を可決す

正午散會

六月十六日（金）

午後一時、正　後藤吉勇（舊）　副　大森木（四）

報告事項、迫田君駒込警察署拘足の件、詳しくは君の「鐵窓謾語」を見るべし。

昨夜南明倶樂部會合の調査報告、八百名の招待狀に參會者二十名のみ、齋藤氏曰く學校より磯部を去らしむること不可能、關氏曰く諸君が學校に行かなくとも新入生が入るよ。笠原氏曰く諸君を醫師

丁度Aの眼と途中に出合つたのでまづ歩哨線に於ける第一發の銃火が開かれたのである、二人はあはてゝ視線を外らせた

駿河臺で電車を捨て××大學に入つた五年前にはこの豫備校に通ふ爲めにこの門をくぐつたのであるが現在こんな役目を以て再びこゝに來やうとは夢にも思はなかつたのである、左方の講師入口から刺を通ずるとN氏の招介があつたので學監室にすい通された、青いテーブル掛の落着いた色をかこんで椅子が數脚ある、それは二人づゝ並んでかけた、學監は六十近いと思はれる顏面筋のしまつた口調に力のある人であつた。

「N氏の招介で我日本醫專と本校と合併問題について御意見を伺ひにまゐりました」とまづSは口を切つた。

「はあ、そうですかN君から一寸聞きました、そしてそれは學生全數の意向ですか」

「左樣です、學生は現在の境遇から救はれて最良の方法は之を置いてはないと信じて居ります」とWが答へる鵬の樣な眼

に成したいのだ、その外に何もない。藏園氏曰く軟派硬派のあるべきに非ず早決を要す。本間氏曰く、參集者少なきは學校側に反對なる證なりと。茲に警察側にては如何に吾人を壓迫せるか一例を述べん。迫田君の拘束の如きも一例なれども。尙甚だしきは昨日一學生が舊四年より十五名の受驗生を出したるを憤慨し、彼等の受驗を妨害すべし。又瓜生一派の奴等と途中で出逢ふたる時には、面上に唾液を引つかくべし。と云へるを解散後直ちに本富士暑に召喚され「試驗を受くるは本人の自由意志なる故之を妨害する時は犯罪を構成すべし、又唾液を引つかくべしなど云へる言は不穩なれば取り消せ」と、警視廳は正義の學生に大なる壓迫を加へ、背盟の徒に被護を加ふ。記憶せよ、十五名の受驗生は制服巡査數名の保護の下に都合のよき試驗問題を學校に作らせ不正なる試驗の受驗を爲せることを。

二時半閉會

六月十七日（土）

長午後一時開會、正　道津幸雄（舊）副　尾形文夫（三）

報告事項、警察召喚者報告、學生二十名本郷本富士暑にて駒込暑永谷方面觀察立會の上種々の注意ありたり。

本日三年佐々木君徵兵檢査歸國、又兼ねて歸國せる波津久君より來信あり父の死は事實なり、されど子として父の死を悲しまざるに非ざれ共それ以上に諸君の團結の强固を念頭に置くと。

を光らせて居たHはいよ〳〵口を切つた

「然しですな、確實に合併が出來るとなれば誰も異存はありませんか……」

Sはあはてゝその故を言ひ消した。

「それはすべてが渴望して居るのです」

學監はさうして、Hの言葉を氣にとめなかつたのかそれとも萬々承知して居たのかわからないが同樣に落着いた態度をくずさなかつた、そして云つた。

「それで學校當局者の方はどうですか」

「そこが問題なのです、機部理事はなか〳〵手離す氣色は見えないのです」

「それではもし本校に合併の意思があるとしても當局が否定したらどうしますか」

學生心理に通じたT氏の質問は私等の答を躊躇せしめた、HとIとは更に躊躇したらしかつた。

しばらくしてSは云つた。

「そこまで話が進みますれば學生は相當の決心を以つて斷然たる處置に出ます」

然し之れほど抽像的に答へるにもかなりの氣兼が敵の前にあつた。

T學監はそれから××大學の財團の事か

注意事項として、吾人の堅き團結は各自覺醒の結果なり。故に磯部派より不正手段によりて誘引する事のある時は、個人の自由意志を妨碍するものなれば、誰人もこれを受けたる時は本部迄通知せられ度し。と、本月十日附にて退學許可書學校側より若干出せり。二時半閉會

六月十八日（日）

午後一時開會、正　野尻滋吉（舊）　副　石川内藏之助（三）

報告事項、迫田君曰く、過日來の出來事に就き心配せる一同に述ぶ、私は駒込署拘足は、恐喝、毆打、家屋侵入の名儀の下に警視廳に送られしも後區裁判所にて調べられ昨日歸宅を許さる、明日再び檢事局に出頭する筈なり。と、之れを聞き學生は異樣の感に堪えず吾人團体の規約を破り、友を賣り卒業試驗に趣きし十五名に忠告に行きし迫田君を、恐喝と云ひ毆打と云ひ、家屋侵入と云ふ。

吁、正者は常に迫害さるゝ世の中なり。

次に在鄕保證人に左記の印刷物を送附す。

拜啓梅雨の候貴家益々御清榮之段賀上候　扨て保證人及學生團の狀況に付ては已に血涙錄團報等にて御通知申上げし如くなれども尙意味の御了解に便せん爲この一文を草し兼て其の後の經過を御報告致さん所存に御座候　くど〳〵しく申陳ぶる迄躇なく今回の事件は過去四年間にわたりて漸時根底を蓄積されしものにて一言以て蓋へば學校當局者の不信任、枚擧に遑あらざる磯部理事の奸策の對する吾等の正義の

ら學校管理上の理想及び醫科大學の必要は先年からの宿題である事を語つた。

しばらくして四人は辞した。

「まるで話にならんぢやないか、ちつとも具体的の話はありはしない」とHは嚙んでて捨てる樣に云つた、私はその言葉が癪にさわつてたまらなかつた「誰が日本醫專の樣な學校を先方から頭をさげて買ひに來る奴があるものか、此方から懇願的の態度に出てはじめて、多少話がつくのではないか、非常識め」と口に出かゝつたのを危く抑へた。

歸校するとWはすぐ出て來て氣づかわしへに問ふた「御苦勞樣どうでした……」

Sはあたりをうかゝひながら注意深く答へた。

「有望ですよ、あの位なら結構です、奴等（HとI）が居たんで隨分心配しちやつた」

「僕はねえ、以前から合併問題の受持で三年のMと二人でN代議士を訪問して、直接××大學の意向を用いてもらつた事があつたのです、N氏だけでは不充分な

絶叫に外ならず候　報知の不完全なる爲遠隔せる御地にありては只血氣青年の盲動の如く思召すやも計られざれども之れ吾等にとりては最大の苦痛と爲す所、父兄諸賢が一時も早くこの間の消息を御諒察被下吾等の衷情を理解し給はゞ本懐之に過ぐるもの無之候　若し今回の事件に於て學生側の主張が非なりとせば五旬に垂んとする時日を整々として經過する不可能の事に候ひしならん、事實は反之在京保證人は學生の意を諒とし都下の大新聞雜誌も筆を揃へて味方となり　更に近來に至りては都下知名の士によりて前日本醫學專門學校學生後援會なるもの組織せられ現在着々進捗中に候　要するに此の事件は單に山根機部兩理事の排斥のみを以て目的とし徒らに廢校を希望して已まざるが如く傳へらるゝは誤りも甚しきものに御座候　抑も學生最初の決議に於ては指定獲得運動の第一歩としてやむなく障碍者と認むべき兩理事の排斥を爲せしものにて吾人の目的は終始一貫常に學校の有形無形の發展に全力をそゝぎ居るものに候　學校は本來營利會社と異り德義上の發展を尊重する事寧ろ形式上のそれよりも以上に候、されば德義に欠陷ある理事を排斥するのみにても學校の將來は無形上如何許の發展を爲すやは吾等推察に難からざるものに候　加之他方には前述の後援會ありてその主張とする所は次の如くに候

一、適當なる後繼者によりて學校財團を確立せしむる事

二、確實なる他の學校に繼承せしむる事

三、學生の處置に對して文部省に責任を負はしむる事

第一回後援會懇談會は六月十三日神田ミカド倶樂部にて開催されその具体的成案も數日中には發表の運びに至るべく候

ので日氏はたのんだのですが、今日行つたら隨分有望だと思ひましたよ、だから僕はもし委員會で合併案が否決されたら斷然辞職しやうと思つて居ます」Aは言つた。

「勿論僕もそうです、之が通らぬ位なら辞職しませう」三人は默つて顔を見合せた。

「きつと奴等一派は反對するに定まつて居るのだから、否決されたら辭職して學生に事情を明らかに傳へる外はないぢやないですか」○も云つた。

やがて委員會を開く、成行は豫想外にも反對であつた、暴君が贊成したので、HとIとは極力反對した忠義ぶりが泡になつていさゝか拍子抜けの体で氣の毒にもなつた。

その日の日記にAはこの樣に書いた

「自己の名利の爲に地位も使命も忘れて友を售り公衆を陷れ、辨は極力自己の非を庇ひ、行ひはすべて忠實を懷ふ、かくの如き人間が世には甚だ多いのであらう現に私は我校の指定運動の委員中にも二

かくの如く漸く建設方面に成果有之次第なれば何卒吾等の行動に對しては御信頼と御援助とを被下度く此際吾人の團結さへ鞏固なれば成功疑ひも無きは明々の事實に御座候　又早晩學生は退學處分に遭遇するやも計られざれどその際救濟の道も有之べき樣及聞居り候へばその邊餘り御懸念なき樣希望仕り候　然るに學校側よりは種々の奸言を以て父兄諸賢を誘ひその力によりて吾人の團結を崩壞し立つ所なからしめんと努力致し居り候へば宜敷御承知の上學校側の言に御迷ひ無之樣伏而御明斷を願仕候

尙日本醫學專門學校後援會なるもの別にありて磯部氏個人の利益を中心として活動―兩者類似せる爲文部省さへ混同して學校側の甘言に乘せられんとせし程なれば篤と御注意被下度候　草々

大正五年六月十八日

東京市本郷區追分町四〇四鴻館内

前日本醫學專門學校保證人學生一同

警察係報告　昨日學生三名日本醫專附近に所用ありて停立せる爲め暴行者と見なされ駒込署へ引致されその取引き方の通知を受け昨夜連れ歸る、うつかり學校附近に徘徊する危險を說く、尙七月十一日午前九時民事部第一號にて公開判始。同志會醵金返濟對磯部の件なり。

第二報告　講師高島平三郎氏辭職せりと、又昨日の敎授會は不參多數の爲め流會、生徒處分は二十日迄延期の由。

三を見て居る、彼等は小利の爲に大利を抛ち、正義に代ゆるにあらゆる瀰縫と策略とを以てする、實見なき人間はその甘言にたぶらかされ徒らに盲動して時に正義は邪の爲に被はれ、意志の弱き正義の人は現世は到底正義の通らざるものと斷念して口を閉じてしまふ、正義は人倫の歸着する處、策略は邪の常套手段である吾人は內心に顧みて安らけき心の港を得んか、そは必ず正義の防波堤によつて抱かれて居る、內省强き。自己を爲り得ざる人にとりて永遠の眞理は是に正義あるのみである「我はたゞ正義に導かれんのみ、死はた何するものぞ」「自ら反りて直ければ千萬人と雖我行かむ」私は思ふ正義を唯一の信賴とする人は心の怯懦にして行爲の大膽なるものであると、遠慮ある人は一瞬間と雖も酒に醉ふ暇はない」

四月廿三日

庵に靜座すれば蜘蛛の巢よりも細い雨は音もなく楓の芽の上に降りその下の地藏尊は半ば濡れたまゝじつと雨滴の音に聽き入つて居る。

東京日々新聞に波津久君の嚴父學校問題を憤慨し切腹せる記事あり。次で本保君立つて波津久君の經歷幷に家庭の狀態を述ぶ。切腹の事實を問ひ合はせ追悼文その他の協議をなす。

協議事項　文部省問訪(可決)　政黨同志會本部訪問(可決)、閉會

午後三時

六月十九日　(月)

午後一時　正　新井亮(舊)　佐藤憲次郎(二)

協議事項　同志會本部訪問緒方委員報告、黑須龍太郎氏曰く、自分の研究したる事と、教育調査會にて山根正次氏の言とを參酌して學生の爲めに努力せん。福田氏曰く、學生とは一度も合はないが新聞で調べてる島田議長も學生に同情し教育界の問題としてゐる、努力してやろう。

文部省訪問本日見合せたりとの報告あり。次に保證人委員より曙光見えたれば安心して、團結すべしと且第一回の退學願書は不正式を名として磯部が許可しないから、各自正式の退學願書を提出する事に決し、三時閉會。

六月二十日　(火)

午後一時、正　松本兼吉(舊)　並河元勝(二)

波津久君より返電あり、自刄は事實なりと、同氏への吊慰文朗讀又吊慰金募集案提出されたり。

けふは不快を覺ゆる、頭は痛むし心富部には輕重の感があり、昨夜ひどく盜汗のあつたのを思ひ合せると、また病氣が起つて來る兆候ではないかと思ふ意氣地ない体だ、故郷の士を離れゝばすぐこうなつてしまふ、鍬をとつて耕し雨に氣まゝ筆をとり得る身であるなら……云ふまい、云ふまい。

人生は奮闘だ、勇士は逆境に於てはじめて價値と光輝とを增すのである、今宵も雨は止まぬ。

「自ら進んで健康を得ざれば必ず病に追ひつかれむ」とAは日記に記して寢た。

四月廿四日

Aはけふも氣分が惡い、強いて氣を勵まして出校する細菌學の講義の後で同志會を開催し四十四圓還附問題に就て再議したが出席者小數の爲中止した、然し刻々と形勢不穩の暗雲がこの講堂、この校舍を被ふて行く樣に思はれる。

四月廿五日

「ともかく今日は午後三時から學生大會を開いて一般の輿論を喚起せねば默目で

報告事項　文部省行佐多委員曰く、大臣不在、局長に面接、齋藤府會議長の妥協案及現下施行中の卒業試驗につき上申せり。局長の言として、試驗には監督者を派出し置けり、尙後援會に兩派あることも承知せり、自分としては決して磯部に同情するものに非ずと。

次に有志演說數番あり、三時廿分閉會

六月廿一日（火）

半後一時開會　正　桃井文伯（舊）　佐多正藏（二）

注意事項として警察係本保委員より述ぶ、重なる事は、此後は斷然と人身攻擊、警察攻擊を爲さゞる事、少しの事で警察係委員が本署に呼び出され厄介なる故なり。又此處にて演舌を爲しその人が警察に召喚せられたる時は一應警察係迄通知せられたし。と、警察は先に吾人の行動の自由を奪ひ今や辯論の自由さへ奪はんとす。

本日　騷動の巨魁と目され第一番に退學を命ぜられたる舊四年の武田光麿君、久しぶりにて來會、家事都合の爲め缺席の申譯けをなせり。二時半閉會

六月廿二日（木）

午後一時開會、正　久松新一（舊）　鎌谷國男（二）

本日は重要記事なし、菊地秋水君、歸京の挨拶あり高畠、土志田兩君の演舌あり、二時閉會

六月二十三日（金）

すよ、いま委員會が臨床講堂でありますからすぐ行つて下さい」

Sはオーバーを肩に引つかけたまゝ急ぎ足に行き過ぎた。

Aは便所の臭氣の鼻を衝く石段を下りスリツパーのまゝ數板傳ひに臨床講堂に入つた。

暴君が中央に腰かけてその一派のKやI、H等が揚々と控えて居る。左側の階段には二年の委員が事情も知らぬので陽氣そうに話し合つて居る、吾黨は議長のSとAとMとであつた、Wは殊に暴君と反目して居るので二人の間には雷の樣に視線が衝突して居るWは私の直ぐ左側に席についた。

「先日の委員會で決議したとほり、いよ〳〵今日は學生大會を開催しやうと思ひます、それについて諸君の御意見及び覺悟を願ひたいものです」と議長が云ひ終ると意外にも敵方のKは第一に發言した

「勿論だ、大に徹底的に一騷ぎしてよ、磯部を追拂つて合併させなきゃ駄目だぜ此前の樣に途中で折れない樣にやつつけ

午後一時開會、正　後藤吉勇(舊)　副　藤中　正　(二)
第五回團費の請求豫告
同志會本部訪問委員撰定左の如し、一時半閉會。

六月二十四日　(土)

午後一時開會　正　武田光麿(舊)　副　村上清作(三)
政務調査員中の黑須氏、福田氏、樋口氏に委員派遣、田中義一主筆の「醫海時報」は廣く世に渉り、且つ可なり信用せる人もある故、該雜誌は磯部と特別の關係ありて學生側の不利を計りつゝあるものなれば各自知己父兄に通知し記事に迷はされざる注意すべしと。午後二時散會

六月二十五日　(日)

午後一時開會、正　中山隆治(舊)　副　向井鎌次郎(三)
重要記事なし、注意事項の後に熱烈なる演說數多あり二時半閉會

六月二十六日　(月)

午後一時開會、正　萬袋道三(舊)　副　塚田英太郎(三)
報告事項　政務調査會訪問員の報告あり。
文部省訪問丸山委員報告、文部大臣曰く「學校側より具體案は出ですず、學生側後援會の案を待つ。卒業試驗の件その正邪は取調べて見るべし、目下の所文部省としては方法なし、名士の助力を傍觀するのみ。又日本醫專の廢校を求めしに、元來認可取消しの前例なし」

るんだ」と云ひながらAの方を向いてその覺悟を促すらしかつた、Aは立上つた「僕はもとより大賛成です、殊に私は四年級の級長として本校最上級の責任者であり、然も學校に對して騷動するからには全責任は僕が引きうける、退校處分は僕一人で背負ふから安心してやり給へ」

語調は亢奮のため亂れて居た。

「それはいけない、誰だつて責任は等分であるから」

「それぢや學生大會と同時に委員は辭職すればいゝぢやないですか、そうすれば學校だつて責任者がわからないから」ある者は二の足を踏むのであつた。

「それは全々不賛成だ、そんな事なら始めから騷動はやめた方が增しである、この場合、委員は增せばとて減員するなどは以ての外だ」Aは更に激した。

退校處分は學校當局の每に用ゐた威壓手段であるので誰しも其に所思ひ及ぶと多少躊躇するのである、暴君は殊に迷惑相な顏をして文身のある腕をまくり上げて口を歪めて居る。

と。今更云ふも愚なれ共文部省はかゝる學校に專門學校の認可を與へ如斯き重大事件を突發せしめ、四百の學生を彷徨に迷はしめ、然かも前例なきに依り認可取消は不可能なりと、吾人亦何をか云はんや。

協議事項、正正倶樂部、交友倶樂部訪問の件（可決）辯護士增員の件（可決）

次に學校の廢校になる樣、磯部に致命傷を與へる方法を研究す、ネルソン曰く「吾が成効は人より十五分間早く考慮斷行せる故なりと、磯部の大なる活動より以上に進んで吾人は奮鬪せざるべからず……等演說あり、三時解散。

六月廿七日（火）

午後一時開會、正　佐々一雄（舊四）　副　大澤龍雄（四）

注意事項數多あり、各種の風說に迷はされず、後援會を信じて團結を堅くすべし、磯部は新聞その他に色々と團結を攪拌し父兄の不安を招く如き記事を載せ運動盛なりと、中本會計係より、本朝本富士警察に呼ばれ會計の取調べを受けたり云々。三時閉會

六月廿八日（水）

午後一時開會、正　岡崎勝一（舊四）　古川道太郎（四）

提案事項　近頃雨天なれば缺席多し、充分なる調査を乞ふ又後援會委員は大活動をなせる摸樣なれ共其後何等の報告なき故、父兄に

「さつくばらんにやつつけちまへ」とKが元氣よく云つて暴君をひたすら說得して居た。

「實際この際退學處分なんぞ恐れて、どうするんだい、處分分處てそれは磯部の脅迫手段ぢやないか、僕等は言ひたい事を言はうとすりや腕力の壓迫で無理におさへつけるし、四十四圓の金だつて搾り上げたまゝ歸しはせずさ」とこゝまで來ると暴君の眼光が焰の樣に焰えてWを睨みつけた、Wも見返して

「僕等は言ひ度い事があつたつて充分にも言へぬし……」

「何つ」暴君は遂に爆發した「君の事を云ひはせぬぢやないか……」

Wもそちらへ向き直つた。

會議は混亂に陷つてしまつたかそれぞれ兩人を宥めてその場はおさまつた。

「靜粛に願ひます、兎も角議論は打切つて、本日午后三時から學生大會を開く事とし委員よりは指定問題の絕望、合併問題の必要並びに合併には何うしても學校當局をしてこの學校を手離さしめねばな

も安心なる通知をなし得ず、有力なる先輩に來場を乞ひて其の後の經過報告あらん事を求む、正式退學願書各縣人會にて至急集められ度し等あり何れも可決。

報告事項、中本會計係長より、各學年會計主任は明日本富士署へ會計部書類持參出頭すべし、と。三時半閉會

六月廿九日（木）

午後一時、正　武田光麿（舊）　副　宇津木賦（四）

協議事項　近頃暑季に向ひたる故、開會を午前になされ度しと、依つて鈴本亭の席亭と相談し午前九時と定む。

注意事項、近頃學生中に色々と氣迷ふもの出で且つ某々氏等の妥協案なるものに贊成し學生の復校を計り、團結を覆さんとする獅子身中の蟲なり、近日奇怪なる事實表はれん諸君も注意せよ、若し軟分子が誘惑に來たりし時は本部に通告せられたし云々、それに就き硬論數多あり議場に活氣を添へたり、三時閉會。

六月三十日（金）

午後一時開會、正　女川精太郎（舊）　上村　透（四）

提案事項、磯部彈劾を社會に公布する件、之れに就き議論紛々、遂に今更この必要なしと、彈劾案提出者より徹回す。

決議事項、正式退學願書を期日を定め全部取り集めたる後に學校に提出する事。

らない事をありのまゝに述べ輿論の如何に從つてその後の事は定めやうではありませんか」

「贊我！」

「異議がありませんれ、それぢや閉會します」Sはホッとしたらしかつた。

いよ〳〵學生大會開催と定まるとAは氣が弛んだ爲か非常に疲勞を覺えた。自分でもやり切れないと思つた。それに數日前から母が歸鄉して靜養しろとすゝめるので一旦故鄉に行かうと決心した。

SとWとに役をたのんでAは月謝を收め正午に早引してとぼ〳〵と家路についた、坂を下りつゝ振り返つていよ〳〵今日はあの室から熱辯と拍子が湧き起る事であらう、そして私は疲れた身を扶けて故鄉に向ふのである、感慨無量にいつか墓地に來た、谷中の五重塔よ、しばらくの別れぞ、さらば。

その夜Aの日記は故鄉の家で次の樣に書かれた。

「さて私はこの場合すべてを忘れてしまへばよいのだ、一私立學校の運命や教育

これは磯部は尙學生全部とは絶縁せずと社會に公言し、磯部側にても、僅々二十名ばかりにて授業開始し、四百餘名が斯く紛擾しつゝあるに關せず何等學校に沙汰なきは吾人の團結と意向を疑ひ居る爲めなり、故に徹底的に彼の學校と絶縁せざるべからずとなり。

協議事項、本夕七時迫田君市ケ谷より歸らるべきに就き出迎人員選出法。警察の干渉嚴しき故團體よりは各級通じて五名とし、他は縣人會及友人有志諸君行く事とせり、午後三時半閉半

七月一日（土）

午後一時開會、正　山本敬（舊）副　大伴半之丞（四）

昨日出獄せる迫田君幷に今朝歸京せる波津久君の演舌あり。

波津久君曰く、父の死に就き多大の同情を寄せられ誠に感謝の至りに堪えず、去る六月十日に父も死去の報を得早速歸途に就き十二日着鄕す、其の途中弟及村民の出迎を受け初めて父の死せるは自殺なるを知れり。父は「日本之醫界」によりて事件の眞相をよく知り村一般にも此れを傳へ居りしが、村民は諸君御存じの通り口五月蠅く種々の風評を立て或は自分を放蕩の爲め退學されしとか色々の邪推を噂せる爲め、父は非常に其れを苦にし面目なしと遂に奥間十疊の佛壇の前にて切腹するに致りしなり。私は村民の惡○を淨めん爲め數名の有志を集め學校狀態、自分等の取り來りふ途、現在の團結等を報告せる爲め數名のものはその事實の眞相を知り學校當局の僞惡者の裏面やあらゆる陋劣の策略が正義を被はんとする學生間の墮落や、あゝそれ等をすべて忘れてしまへばよいのだ、そして今身を汽車に托して雨の中を故鄕へと走せて居る名譽と正義と愛とをたとへ自分だけでも、この純な心の中に安らかに保ちたいばかりに、あの眠りの穩やかな麥の綠りの川越の町へと落ちゆくのである。慥かに路人は劣敗者である、彼の腦神經は疲勞して居る、呼吸器も消化器も衰弱してしまった、彼の唯一の誇りであった頭腦の健全さも運日の頭痛の爲にそれさへ賴み甲斐なくなくつてしまったあゝ路人よ哀れなるものは正義の擁護者である、正義の爲に零落し正義を抱いて超越し世上の一風一波にもまれ時に叫び時に泣くは世の運命である、いまは何もかも忘れやう。

喧騷の都を一歩出ずれば野は春の綠りである、蓑着たる農夫、靑き畔道に咲く蓮華、おゝ自然よ！閑散なる田園よ…蛙は鳴いて居るけれど私の眼には決して不覺の涙はありはしない、外よりは奸邪に

を憤慨されしが尙頑迷なるものありて大に迷惑に感じたり。廿八日大分市に於て徵兵檢査を受け甲種に合格したれば、其れを私の世話になつて居る三浦先生及び其の他に告げ、今後の事を打ち合せ、今朝七時二十分に歸京せる次第なり。父は學生の正當なる事を知つて居たのであるから諸君も御安心ありたし。吾人の立ちしは第一回卒業生より指定の恩典に浴せしめんとしたのであるが、私の留守中に十有餘名の卒業試驗を受けた者を出したと云ふのは甚だ意外とする所で、殘念の至りである。其の爲めに迫田君の如き犧牲者を出し實に慨嘆に堪えず。父の死の悲しみよりも團結の强固と、最後の勝利との外今は念頭に無し、と。連日の疲勞と御親父の不幸に面やつれ涙を飲んでの物語に聞くもの涙なきは非ず。次に迫田君立ちしが獄中の疲れと色々の感慨に暫らくは聲もなく、やがて曰く。

誠に諸君に對して御心配をかけたのは衷心殘念に思ふ。鐵窓の中にありても只諸君の團結を思ふのみにて他に考へもなかりし。私も今日よりは自由の身となつたのであるから今後諸君と共に大に奮鬪し樣と思ふ……と落涙切りにして團員も又一語も發する人なし波津久君と云ひ迫田君と云ひ今回の紛擾中の最大犧牲者にして、誰れか腸寸斷せざるものあらん。蓋し悲絕愴絕の極なり。場内淒風吹き荒ぶ

協議事項　後援會委員三名增員の件(可決)。次に波津久迫田兩君の爲め明一日を休み慰勞會に當てんとする件。(懸案)但し、事件解

内よりは病に攻められて、たとへ一時は鉾を收めて搖藍の故鄕へ退くけれど、身心の創痍癒へて復活の風にあふなれば捲土重來「正」と「愛」とを武器として頽癈せる風潮、隋落せる青年に向つて一大革命の第一矢を放なたではやむまい、されど路人は幸福である故鄕の若葉は彼の方へ青き手をさし伸べて迎へ母校の丘はなつかしき思ひ出に誘ひ傷きし心を入る丶港はよろこんでいつも彼を待つて居る」

× × ×

× × ×

その後二百餘日を經た今日になつて運命の手に翻弄せられつ丶四百の學生團員が半年の間、武士道と正義とを標望して腐敗せる日本醫專の當局者磯部山根氏等と爭つた戰場の跡を眺むれば轉た感慨に堪えないものがある。

社會の多數の眼は如何に吾人の活動を判斷したか警察は如何なる方法を以て學生團を取締つたか、新聞雜誌は如何に批評したか、故鄕の父兄と吾人との間は理解され合つて居たか、それ等の事は今茲

決議に延期せるなり、要するに吾人の腹を絞めて再び背德漢を出さゞる樣に終始一貫團結を强固にするのが尤も兩君に對する慰安なりとの尾形君說有力を占めたるなり。午後三時閉會

七月二日（日）

午後一時開會、正　渡邊正一（舊）　副　多久　俊（四）

縣によりては徵兵檢査の終りたる師團もある故、有無の告報を各自より提出する事及後援會の活動に團員も藪蛇とならざる範圍に活動し、學校と絕緣する爲め退學願書未提出者は早く出す事等協議す又明日よりは午前中集合に決す。二時散會

七月三日（月）

午前九時開會、正　石橋茂樹（舊）　副　荒瀨（三）

報告事項、明日後援會の有力なる人當亭に臨場し、全學生より委任狀を呈出され度き由なれば各自は二錢收入印紙及認印を持參すべし。次に波津久君御尊父に約五十圓にて碑を作り碑文は後援會の高橋琢也先生に御願ひしたり。

協議事項、學校にて目下卒業試驗及學期試驗を施行中なるが、試驗問題を洩露したる不正なるものなれば文部當局に充分取り調べを要求すべし。（可決）

提案事項、學期試驗の受驗者に吾人が暴行を加ふる恐れありと、警察及學校にて誤解せる故各自も注意し、且學校に五月以來學生の

には述べやうとは思はない。

只私が永久に忘れられない二三の印象を誌してこの記を終らうと思ふ

一、文部省の無定見

凡そ一國の文敎を司る文部省の高官には少くとも一個の定見があつて欲しい又是非なくしてはならぬのである、官僚の通癖として責任逃避を默許すればそれ迄であるけれども賤しも文敎の首省はそれでは餘りに貧弱である。

「敎育勅語」を敎育の根本と定めた以上は只にそれを理想とするのみに止めず已も先んじて實行するが當然であらうと思ふ、小學校に於て修身により中學校に於て倫理學により其の若い頭腦に道義心を浸潤せしめて置きながらさてそれが實際に發現して正義の叫びを聞く時に自分一個の安泰の爲に正邪の判斷もせず比較的壓迫し易き弱者を泣寢入りにせしめんとする、要するに廿世紀はそんな姑息手段の通るものでない、そして屢々文部省を訪問して次官、局長等に面會して痛切に感じた所は餘りに閣下等が物質萬能で

手術着、座布團、試驗管上靴その他の諸道具あれば、取戻し方を警察の手に勞したしと臨場の刑事に交渉し、刑事は電話にて署長と相談の上便宜を計る旨返事あり。又學生會費約千四百六十三圓餘磯部會長の名にて保管しあるを取戻し方法律係に委任す。正十二時閉會

七月四日（火）

午後一時開會、正　野尻磁吉（舊）　副　中村丈夫（四）

委任狀を各自に渡す。

二錢印紙

委任狀

今般太角桂嚴高橋琢也、福本誠、寺尾亨、秋虎太郎氏の五名に對し左記事項を委任す

一、日本醫學專門學校に於て磯部山根兩理事を除斥したる時は復校に至る一切の處置

一、前項の目的を達せざる時は後援會者新經營の醫學專門學校入學の手續きをなす事

一、前項の學校設立せられたる時其の事後を問はず適宜の時期に日本醫學專門學校㊀退學願書提出する事

一、右の外不利に陷らざる爲めに臨機の處置をなす事

ある事であつた、人格よりも金力、正義よりも利益、內實よりも外觀に重きを置くのを慊らなく思つた。

「血判なぞは一時の流行ぢやないか、そんなものは放つて置いたがよい」と當時の次官は實に言はれたのであつた、文部省の次官からこの言を聞いた時私は涙滂沱たるものがあつた、そして一方日本醫專には無雜作に規則の改正を許可したのである、かく如き學校が存すればこの後幾多の青年が誤られるかは考へないのである、私は叫んだ「あゞ武士道國は滅びる、日本は滅亡に近づいた」義に勇み血に奮起する義を除いたら果して日本魂は何處に存在し得られやうか。

私は只感情に走せて、この言を爲すものではない、眞に日本の前途を思ひ、國体の擁護と發展とを望んでやまぬ青年が赤心を以て文部高官に訴へるのである。

二、友情と利己心

人の偉大なる所以は自我の犧牲を行ひ得る點である、たとへ身を捨てゝも義の爲に奮進するのか日本民族の强味であつ

大正五年七月　日

原　籍
現住所　姓　名

本日は尤も重要なる日なる故出入及電話口等に調査委員にて充分警戒すべしと注意あり

協議事項　學校側後援會より左記の書狀各學生に配布せり

拜啓日本醫學專門學校紛擾に關しては乍不及先般來諸君の前途に對し甚だ憂慮罷在候結果小生等は生徒諸君中の有志者を代表する某々有力者と學校當事者と會合致し種々協議の結果別紙覺書の條件を協定致し候思ふに協定の要點は財團を整理し一日も早く文部省より指定の認可を受くるに在りと存じ候故に生徒諸君の信任する理事並に評議員を選定し叙上の目的を一日も早く遂行せんことを期することは蓋し生徒許君が終局の目的を達する道なるべきを以て此際別紙の條件にて御滿足なる諸君は本月六日午後七時までに復校屆を小生等兩名の内へ御提出相成度左すれば御取次致す可く候幸に復校屆を御提出相成候諸君は來る十一日午後一時本校に御參集其席上に於て理事並に評議員の御推薦相成度候小生等は諸君に於て前文の如く各役員御推薦相成候得共其れにて任務は相果したる次第なれども若しも空しく右の期日を經過するか又は御推薦相成らざる樣なれば其際小生兩名に於て諸君の企望を滿すに足る可しと信ずる名士を選定して前文に述ぶるが如き二大目的を遂行せんことに務むべし如斯爲すことは蓋し諸君に對しても學校當事者に對しても最善の方法なる可く是れ以上には双方の意思を滿足せしむる手段は無之儀と確信致し候學校當事者も亦小

た。また將來かくの如くあらねばならないこの騷動に於て四百名の團結の强固なりしは近來の快事とすると同時に又破廉恥漢の幾多を出したのを遺憾に思ふ、然し冷靜に彼等を通觀するに一樣に共通せる心理狀態を以て尾る、それを區別すれば

一、利巳心　二、狐疑心　三、事大心

一言で云へば友情信義の何たるかを解しないのである。

彼等は大和民族としては血が薄い樣に思はれる、私の親友であつた一人はこふ云つて日本醫專に戻つた「自分は嚙りついても醫者にならればならぬ」とそれ迄長い間洞ヶ峠に日和見して居たのである彼は數多の親友に何れ程の迷惑をかけ面目を失はしめしかば敢て考へぬのであるこんな人間は個人主義、利巳主義の米國あたりには適しやうか建國以來國家主義帝國主義で通つて來た大日本帝國では不適當である、彼等は一朝君國に緩急があつて出征せねばならぬとなつた場合も、門口に躊躇して曰く「自分はどうしても

生等の意見を贊同し小生等の行爲には服從す可く申出もある儀に有之候尤も來る六日午後七時までに何等の御申出なき諸君に對しては學校に於て斷然たる處置に出づることは止を得ざる事情も有之趣きに付願くば諸君に於て此際深く將來を考慮せられ徒らに煽動者の壯大なる言詞に迷はず各自極めて自由なる意思に仍りて決定せられんことを小生等最後の意見として茲に提出致し候不悉

大正五年七月二日

神田區裏神保町四
齋藤孝治
本郷區丸山福山町七
關幸太郎

覺

方今紛議中に繫る日本醫學專門學校事件に付齋藤孝治關幸太郎は當局者及び學生の利害と本市靜謐の爲めとを慮り誠意を以て仲裁を試み左記條件を提出したり

一學校當局者は斯學社會の爲め特に讓步を爲し左の事項を承認す可し

（一）學校理事中に學生等の信任する者二名を加へ共に校務を經營盡力す可き事

（二）又新たに評議員會を組織し其人員を拾名乃至貳拾名と爲し學校當局者の信任推薦する名士半數と學生側の信任推薦する名士半數とを以て選任し教育上學校經營上に關する重要事項は總べて其評決を以て施行す可き事

但し評議員は理事の發案を議決する外自ら發案することを得又評議員選任の手續及び定款改正追加等の事は追而協定す可きものとす

醫者をして生活し一家の爲命を永らへればならぬのだ」と血相變へて叫ぶに違いない、永遠の幸福と目前の快樂と彼れには憐れにも區別し得ないのである本記事に書いた騷動發頭人の一なるSも今は日本醫專に通學してその學生會の爲奮鬪して居ると云ふ誠に彼等の態度は私等にとつては謎である。

「Sは何と云ふ奴だらう」と屢々口にするのを聞くのである。

三、日本醫專經營者磯部山根兩氏に。

兩先生にはいよ〳〵御健勝の事と信じます、御校在學中は種々御厄介に相成り茲に改めて御禮申上ます、御校在學中は只わけもなくその制服制帽を身につけるのが恥かしくありました、あの帽章あの釦を人目にさらすのは氣が引けてならぬのでした、幸ひ現在は堂々として人前に被り得る東京醫學講習所の制帽と着心持のよい制服とを得ました。

人は感情の動物です、一寸の虫にも五分の魂と云ふ通り、人生意氣に感ず誰か生死を論ぜんです、今は何も申しますま

(三) 評議員並に理事は財團の基礎を確立し可及的速かに指定學校たる資格を得る方法に關し特に盡力す可き事

(四) 既に停退處分に付せられたる者は之を復校せしめ退學校分に付せられたる者にして此協定の後直ちに復校を望む者は仲裁人及び理事より教授會に對し特に懇談復校を謀る可き事

(五) 將來學生の退學處分は評議員會に諮問の上施行す可き事

(六) 學生會の決議事項は評議員會に提出することを得

(七) 學監の任免は評議員會に諮問す可き事

(八) 學生會の會則を改正す可き事

九 評議員會は理事に對し帳簿の提出及び説明を求むることを得

一學生側も亦斯學の爲めに讓歩を爲し左の事項を承認す可し

(一) 此際速かに復校して專心學業に從事し其卒業試驗を希望する者又は研究生として來年春季まで猶豫を希望する者は各其の手續を爲す可き事

(二) 自今靜肅を守り評議員の推薦其他百事に於て愼重の態度を保つ可き事

(三) 學校當局者に對し希望を述べんと欲する時は可成少數の委員を擧げて之れに一任し多數學業を廢止する樣の不穩なる行爲ある可からざる事

(四) 學生間に於て集會を要する時は教授時間外に於てす可く教授時間の妨害を爲す可からざる事

以上協定を爲したることを承認し乃ち左に署名するものとす。

大正五年七月二日

い、以後騷動のない樣に御校の發展を祈ります。私等はこゝに清淨なる自治の堅城を築いて剛健眞實の校風を發揚する覺悟です、只貴校の卒業生と何れが社會に貢獻ずる所が多いかを堂々と爭はうではありませんか。(終り)

調査係より

野家敬之記

東京は本郷千駄木町の日本醫專の紛擾といへば當時都下は勿論全國の幾百萬の學生及教育者の頭を騷がしたものだ、御承知の如く五百の學生があのちんばの磯部の米櫃の中へ疊込まれたしかし未だ皆は食物とされなかつたからまあ善いのだ彼の儘で居れば今頃は全然食はれてしまつたかもしれなかつた、時は來れり神はさる事をば許さん。大正五年の五月一日は實に吾人の永久に忘れられない記念日だと云ふは聊も米櫃を破らうとした第一日目である、米櫃の中でもかく事實に百十有餘日遂に破るまでには行かなかつたけ

右文面中に生徒諸君中の有志者を代表する某々有力者と……種々協議の結果云々とあり、有志者とは誰なるかを關氏に問ふ件。こは一刻も早く解決すべき問題なれば團員中かゝる妥協案を相談し復校の希望を有する如き腐敗漢ありては、本日參臨すべき五名士に對しても申譯けなきにより即刻委員撰定派遣す。委員左の如し。

佐倉（舊）　二階（四）　越塲（三）　木内（二）　中山（一）

次に須藤、大澤、丸山の諸君立つて「吾人の主義に對する反逆者は此の際意見を發表すべし」と言々熱を吐く。軟分子と認められし舊四年の猪股、細井二君、多少辯解らしき事を言ひたれども要領を不得

關氏訪問委員報告、關辯護士事務所を訪問せるに初め取次が猪股君ですかと問ふ。然らずと答へやがて面會さる、多分妥協案通告書の反應ならんと善意に解譯せるものらし。昨日郵送せられたる妥協案に就きて御伺ひいたし度し第一に、學生中有志者を代表する某々とは誰なるや。答へて曰く、そは秘密なりと。然らば徒らに煽動者の壯大なる言詞に迷はされず云々とあり、煽動者とは誰ぞ。曰く誰と指すわけには行かず、單に注意まで書きたるなりと。次に妥協案に從へば從ず指定の來るものなりや。曰く不明なり……云々。

全學生はかゝる妥協案に今更賛成するを得ず　齋藤、關兩氏は學生の決心を見て一端手を引きたるに亦々妥協案を具體的に然かも突れど既に破れんばかりに內部はやつつけて他に立派に米俵の中に納まることが出來た。其の百十有餘日の苦戰奮鬪談は之れから順を追ふて話すことゝする何しろ敵對されたちんば磯部も剛の奸策な程に頭を苦めて戰鬪を繼續した、參謀本部は追分町の西濃館となり根津の演藝座に本陣となる、一人の落伍者も出さず團結鬪結と每日叫ばれ其中に立つたる調査係ばかりはいゝ面の皮骨折損、持久戰の事と決した學生は此の際に法律係も作れば本部係も作る外交係も出來れば警察係も出來る組織を立てゝ戰ふとは又面白い。先づよい面の皮骨折損と云はれた調査係の條から御話して行く。調査係は出來たでは團結を强固にする一策として日々の出欠問題を非常に嚴にした日を經るに從つて之が其の度を增して出欠遲刻常なき者には忠告をすると共に届書を出させる尙進では無届欠遲に對しては罰金までも加する事とした爲に幾分ならず好成績は得られたのだしかしやつぱり數ある中の其中に届書の十數枚も出させられたもの

然に配布せるは、猪股一派の賛成者が提出せしめたるものならん、かゝる軟分子は一日も早く醫者になりたきと、後援會諸名士を信頼せず前途を悲觀せる爲めならん。猪股君に同志者を指名し、退場せられん事を希望すとの論囂々たり、本日の議長野尻君壇上を下り私は妥協案賛成せるもの故本職を辭すと依つて副議長の指名にて後藤哲雄君議長席につく猪股、匠、細井、中川、久松、石橋、武田幸治松尾、齋藤、松本、野尻の十二名退場す、彼等は數日來秘密に打ち寄り、團員を誘惑し、軟論を吐き、妥協案を提出せしめたるもの也此の内松尾、武田の兩君は彼等と行動を共にせざる由判明し保留となる。

今藤君本日歸京の旨挨拶あり。

休　會

自働車の響するよと見る間に高橋、大角、秋、寺尾、福本の五先生來場せられ、議長の紹介、謝辭ありて後諸先生は壇に立たる。高橋先生、白髯を胸に垂れ慈父の如き温顏にて

私は年長者として一場の挨拶をせよと云ふので茲に立てり。私は諸君に何等の緣故あるものに非ず、又學校に何等恩怨のある次第にもあらず。只諸君の今回の擧が邪にあらず正である、義である爲めに同情したるなり。私の考へとしては出來得る限り諸君の便宜を計り、諸君が又前途に就き種々善後策を致されるのは尤なる

もあり罰金も度々出さなければ無らないものも有た今も保存してあるが届書の枚數は四百餘枚になつてゐる罰金は積つて八圓近くあつた、后に此の出欠常なきもの等は注意人物の中に數へられる樣に爲た。本陣と呼ばれた演藝座には毎日會合はある午前八時頃より正午頃遲い時は午后二時までに及だ事すら屢々だつた議決する事は皆作戰の方法だ而て各係員を始め臨時の係員も速時運動に出掛けては翌日の集會に成績結果を發表するといふ狀態だつたが本陣が演藝座から本郷の鈴本亭に移る當時になると事件が復雜して來て重要な件等は發表は見合せる始末だつた之れは日々の作戰方法が一から十まで敵方の間者の爲に漏れて運動は何時でも裏切られる樣だで調査係も之では骨も折たが出見事調査も遂げた結果は發表される速刻會場から或者等は追出される謹慎位の程度に處分は見合されて保留の形式であつた、尙擧動のあやしいものは團結を破る者として脫會せしめられた。兎角して中に學校へは登校するものとて無く

點なれば、私及他の諸氏に於かれても同感にて、過日來懸命にて盡力されつゝある事は私のよく承知する所なり。私も元は醫を志たる事あれば殊に同情の深くなりしと思はる、茲に手の及ぶ限りは諸君の爲め、國家の爲めに盡力せん。尙詳しき事は他の諸氏より話されん。

秋先生

私は四十七年間も此の本郷區殊に千駄木町に住居して學校の事は新聞及學生の方より聞いて悉く知れり。其の後或る時大角氏と島田三郎氏の許に行き意見を聞きしに不都合なる學校屋を打潰した方が宜からんと云へり、又青山博士は廢校の上各醫專に分配せしめたが宜しからんとの事なりしが、此れは責任支出となりて議會にて問題となる故困難ならん、然し我々が寄附にて代償せんと文部大臣に面會相談せるに、それも難事なりと斥けらる、仍つて磯部山根兩氏より第三者に引渡さしむる考なりしが之も無効となりぬ。然らば新たに學校を設立せん、若し之が惡ければ文部省に責任を負はしめんと昨夜も本多忠夫博士より使ありて盡力せらる旨ありたれば諸君も時日の永くなるも決して心配なく、又不穩の事なく委任狀が作られたならば一ト先づ歸國されて樣子を待つが宜しからん。

寺尾先生

教授方も御出勤なさるなく事情に通じた方々は寧ろ學生側に御助力下さつた先生すら少くなかつた今や學校は有名無實の開校狀態となつた磯部も是には心膽を寒からしめた事と思ふ、もがいた未だ都下の諸名士の御名をば無斷で借用に及び國許や在京の保證人達に泣きつく時には堂々と校規を後立てにおどかし文句で學生復校策をやつた、如何に手を盡しても學生は勿論父兄保證人に於ても屁とも思はん、然し中に磯部及び他の理事者と少しでも關係有るものは事情に引かされて欠席届を學校へ出したものもあつたのは後に知れた、六月の初旬には同盟退學願書は學校長迄提出された、すると又々取消を出した者があつた、といふのは六月三日の發見だ以前より斯かることもやと心配した調査係は給事君と活動寫眞の立見もした食ふた事もない西洋料理に腹鼓打つたる給事君もあつたが遂に買收は出來なかつた、桧なく大冒險は演じられ天晴欠席届提出者及取消(退學)者の名は表を以て發表することの出來る樣になつたが

私は由來正義の爲には飛び出す癖があるので今回も及ばずながら微力を以て盡すつもりなり。今日顏合せ丈けと云ふのであるから之れで失禮をする。

大角先生

今回の諸君の擧に就いて最初より私は保證人の一員として種々奔走せる爲め、警察及社會の一部よりは大いに誤解を受け居れり。大塚署には始終呼び出され或は刑事に付けられ、四百餘名の學生の煽動者の如く見なされ。或は將來代議士となる野心の爲めとか、或は新學校を建てゝ私利を計るものとか、或は學生に同盟を强請する等隨分厄介な立場になり居るなり。かく警察の干涉や、社會一部の風評等は自分等の運動を妨害せん目的の爲め、何者かの仕業なるか知り居るが、今は云はず、然して又加納治五郎氏よりは正義の爲め大角が力を盡くしてる事は講道館の名譽なりとお褒めを頂戴したり。斯かる區々たる風評等は余の意に介する所ならず他の四先生もやり出したなら飽くまで爲し遂げると云ふ頑意地の人々のみなれば諸君も安んで今後の事を待たれたし。

福本先生

諸君は今や是迄の學校を忘れよ、然し忘れてならぬものは是迄の學問なり。然して諸君は多少の時日を要しても今度の事は實行せなければならぬのである。秋冷の候迄には何とか學業に就ける樣

之れは大問題熱してゐる會場に發表しようものなら大爭動首が無くなるものも出來ると知つて係員は秘密の中に調査係本部なる稻葉豐氏宅二階の一室に善後策は徹宵研究され遂に速刻個人訪問と決し其の夜より夜の目も寢れず百何名の宿々を苦心運動訪問し事なく納まつたさは他の多くは聞知らんだらうてい。要するに調査係の問題は常に磯部側から持ち來たれる學校も本尊が古狸にも似た磯部な丈方方に手を延ばし學生をおびき入れんとするそれに乘る樣な間抜もあるから危介だ調査係員は常に足を棒にして口を喝かして動かればならんのも無理は無し皆自已の爲め思へはこそ。學校側が神田の松本樓で保證人を招だ事があるあの時等は調査係員はてんでに假裝して或は商人に或は紳士に或は洋服屋に或は腰丼に思ひ思ひ要所要所に立つて寄せ來るとはおほげさだが來る保證人方は八分通十人が八人まで御氣の毒だが磯部の口車に乘らぬ樣に豫防した中には殊勝な保證人もあつて彼等狸共の人まれを一分一什御報告下さ

に努力せん。故にそれ迄は一端歸國さるゝもよろしからんが團結は飽く迄も強固なるべし。

次に議長より挨拶あり。

私は只今の諸先生の御言葉に對して全學生團に代りて御禮を申上げます。我々は拔くべからざる精神と信念とを有して本運動を開始し居るものなれども、目下の所は恰も大海に漂へる小舟の如きものであります。今後我々が目的の彼岸に達するには諸先生の御盡力による外は無きものなる故何卒御助力の程を切に御願ひ致します。

迫田君

私は今諸先生に御面會出來たるは實に親に逢ふよりも喜ばしく感ずるのであります。私共は片時も正義を忘れし事はありません。而して利に迷はされ邪道に趣くものでありません。世間には私共を助けると云ひて我々を不利に陷らしむる者もあります。然るに諸先生には飽く迄我々に誠意を以て御盡力下さるのを見て益々吾々の決心と團結は固くなりました。最早一歩も退くと云ふ事は御座いませんから何卒御盡力の程を御願ひ致します。

四百餘の學生の瞳には露を宿せり。感謝の涙なり、誰人が感奮せざらん大海に漂ふこと六十餘日、苦心空しからず、破船を捨て鐵艦の救綱に仍らんとす。各自の胸には電流の如く傳る安心とそれに伴

れた方もあつた。又しきりに教授會が開かれた度毎に淡路町邊須田町邊萬世橋から松住町と停留所附近につつ立つて御巡査さんとは白服黑眼。斯くしてゐる中に學校では第一回の卒業試驗を施行すと聞く、さて受驗にはどんな顏付が行くやら試驗場も或は學校と云ふもあれば骨の標本は昨日日本病院へ運ばれたとも云ふ何しろ調査係は再三本部に召集された午前一時半頃に郵便局に行つては居寢り最中の當番局員に迷惑をかけたのは六月十四日の晩で三回目だ、兼て神經過敏な係員は非常召集に驚ろいて何事ならんと電車もなき最夜中に膝栗毛氣取りで飛んで來るといふ騷ぎ或は牛込から或は田端から或は下谷から或は神田から來て見れば試驗問題だ、見つけたらやつてしまへと云ふのは大勢だつた、此の熱した氣分で諸々に運動は開始されるやがて結果は立派なる報告を持らす、次には試驗場變更問題が出る御巡査さんの護衛の下に愛驗生何人病院を出た等といふ奇拔な報告まで來る、翌日は又々是に依りて非常召集だ

ふ責任を感じ暫らくは神聖なる殿堂の如く會場を緊張せしめたり。やがて諸先ゞ退場。今日は時間なき故重要件事は明日審訴すべければ辨當持參の事として四時五十五分開散。

七月五日（水）

午後九時開會、正　小野庄次郎（舊）副　渡邊司法（四）

文部省訪問佐多君委員報告、福原次官、大津參政官に面會せり。我々後援會の事に就き懇々と申し出で近日の内その腹案を提出するならんが其の時は必ず採用せられん事を願ひたり。次官曰く學校の廢校問題は目下の所は不明なり。學校にては學生復校の氣味なりと云ふて居れば次官は之れを認めてゐる次第なり。文部省にては齋藤關兩氏の案は未だ來て居らず。然し文部省にては之れを至當なりと認むる時は採用する考へなりと。依つて學生は該案は斷然贊成の出來ぬものと御承知ありたしと述べたり。又阿久津と云へる學校通學中の一年級のものを磯部が參年に編入せりと云ふ事なるが、斯かる事は是なるか非なるかと向ひしに非なりと答へたり云々。

徵兵關係者取調べ報告

第一師團　最終日七月二十四日　受驗者十五名
第十二師團　同七月二十六日　同十四名
第十四師團　同八月七日　同二十三名
第一師團　同八月卅一日　同三十二名

六時までに本部に來れと、東空未だ明やらぬ五時頃から出掛けた齒磨粉とヨーシを手にして行つて學校附近にぶらついたのは因果の種子となり七時二十分頃に御巡査さんと辯したのが警察の御厄介となる動機野家西村、金木三人は其の儘行衛を暗まして警察署の二疊敷に御客樣となつた其の際には帶も取られ褌も取られ其の他所持品一切取上げられる斯かる御客となつたのは生れて初めてだ話をするとては三人異間に案内され出入る度毎には錠が下される一番苦しかつたは煙草を吸はれないのと慘酷の目に狹い所に暑さと蚊に攻められるのと朝飯を馳走されなかつたのとだ金木氏藥問題も同情した。其の日夕飯過ぎてから十時頃御暇の時小言だら〳〵書きたい事には山々あるが紙數がつきたから又時を見て續きは次號に乘せることゝした、まあ調査係は斯樣に夏の暑さもいとはず役にも立たぬ樣な事をしたものだ、する中に七月十五日とある一點の光明を認むと、其の際團の集合は九月まで休むとなつた調査會はしかし休

合計　八十四名

此の際退學願書を本校へ出す樣な時は一應通知は致すべけども檢査未終了の師團管轄區內の學生は各自犧牲となる覺悟を要す。

協議事項　昨日退塲を命ぜし舊四年の十二名に對しての處分問題議論數多ありしが條件付きにて舊四年級に一應取調べを依賴し眞の軟化せるものは全體に計りて除名する事となりぬ。時に十二時廿分暫時休會す。

午後二時半開會。

(一)先刻駒込警察署へ出頭を命ぜられたる委員の報告、今後なるべく學校附近を彷徨せざる事、又警察に用事ある時には紙に書いて差し出す事。(佐多君)

(二)軟化分子訪問報告　只今各自の家に訪ね取り調べんとせる所何れも不在、或る塲所に集合の樣子なり。故に明日迄延期せられたし。(佐倉君)

(三)近來會場にて演說等を爲せる人々を警察署へ呼び出し或は自宅へ刑事を遣はしたりなどして甚だ迷惑なれば、それ等の點につき同樣に面倒を感ずる人は警察係りへ申し出られたし。

午後二時二十分散會

七月六日　(木)

午前九時開會、正　酒井敏雄(舊)　副　中川進(四)

まず九月十日一部落着新校設立と共に團散會調査會もまんまと解散した。

徵兵檢査

大出　迂人

毀譽褒貶。有爲轉變。これ世の習。此度の紛擾だからとても初めから。腹を定めてかゝつた私は。いざ退校願書提書となる時に、何等の躊躇も未練もなかつた。否、肩身の狹い學校などへ、誰がいつ迄入つて居る物か。許可は忽ち來た。同時に徵兵猶豫の特典も消えた。迫つて來る者は徵兵檢査である。今日か明日かと思つてる內に。出頭すべしの召集狀を村役塲の兵事係から來る。

虛僞の學校當局に身を託したのが抑の誤りで、冷たい浮世の荒浪に揉れた身を上野のステーションに同級生の溫き情に包まれて送られ。單身何げなく故鄕へ…。

久し振りで兩親の愛眼に接するはよけれども、いつもの笑顏に引換へて、此度は憂に滿ちて居た。言ひ度い事も言へな

重要記事、法律係改選、これは退場を命ぜられたる軟分子の連中に大部分を占めゐたる故今回全部改選する事、縣人會主任改選、軟分子を除き各縣人の主任を定む、十一時閉會。

七月七日（金）

午前九時開會、正　金成忠義(四)　菊地秋水(三)

報告事項　軟分子處分方法。彼連中の意見として學生團は此の際妥協案を取るより方法がないと云へり。如何に說き勸むるも頑として復校希望なる故、除名するが最もよき方法ならん。但し松本、武田、中川の三名は多少事情も異なる故に謹愼を命じ其の後の經過を見て處分する樣に致せり。

協議提案、近々學生團は一時解散すべきにより、各縣人主任及副主任を上げてこれ等の人々は東京に殘りて種々の事務を取り歸國せる人々との連絡を計りたし。それに付き本日散會後各縣人會を開き愼重に審議する事に爲せり。十時十五分散會

七月八日（土）

午前九時開會、正　渡邊司法(四)　向井鎌次郎(三)

重要議事、從來法律顧問として鈴木辯護士を依賴せるが、氏は妥協案贊成者にして且磯部に買收せられたる形蹟あれは排除し、他に有力なる法曹界の人物を選擇する事。十時散會

七月九日（日）

い。悲哀は益々悲哀を產むばかり。

× × × × ×

兄弟の樣な學友と當局相手に盛に騷ぎ立てた。意氣激昂の時に比して、則な初夏の頃とは言ひ乍ら。青々と微風にそよぐ苗代を見ても森々と、悲哀の感が襲ふて來る。

六月八日、愈々檢査の爲に遠く中の條へ引廻される日が來た。村役場で一人。郡役所で一人。都合三人で館林ステーションを出發したのが八時半。汽車は人の氣も知らないで無雜作にピン〳〵と原野か走た。

伊勢崎へ着くと、若い丸髷の婦人と束髮の婦人とが何やら。ひそ〳〵と話し乍ら入つて來たかと思ふと、私の前へポツト腰をかけた。丸髷は品のよい、デリケートの女で伸々着飾つて居た。束髮は氣位の高さうの女で油氣のない鬢のほつれ毛が怒から吹き込む風に、氣持よく動搖て居た。

束髮「あなたは本當に幸福ですね」

丸髷「あら、冗談はかし。ホホヽヽヽ。其

午前九時、正　直井源雄(四)　副　尾形文雄(三)

報告事項、法律係波津久委員、今度新たに法律顧問を物色したれば訴訟事件に對する委任狀の必要あり各自認印を持參すべし。

日本醫專講習會の學生より、現在の學校より脫會して學生團に同情を表すとの書面あり朗讀す。

協議事項　開散後在京する各縣人會主任の外に各級より代表者若干を殘す事に議決す。團報第三號配布、十一時散會

七月十日　(月)

午前九時開會、正　土志田政治(四)　野家敬之(三)

先日の脫會者が學生團の目的に向つて妨害運動をなし居れり、取締るべし。

目下日本醫專に通學者は各級通じて四十五名、內支那南洋の留學生十名を除き日本人は三十五名なりと、如斯き事既に七十日に及ぶ然かも文部省は未だ何等の方法も取らざるなり。十終半散會

七月十一日　(火)

午前九時開會、橋口徹志(四)　緒形晴逸(三)

天谷校長よりその被保證人たる學生石川內藏之助君に停學解除の通知書來る。

古川君報告、昨日退學願書を提出に行きし處學校には事務員一名と八木一派の學生のみ居たり。鹽見學生監は病院にあり電話にて曰

は其は。此れでも種々の氣苦勞があるのよ」

東髮「私なんか、もう駄目ですよ」と言ふて相手を見る眼光には、あり〳〵と一種の悲哀が漂ふて居た。

此二人は舊友で、丸髷は結婚し甘い新生涯へ入つたが東髮はオールドミスであるのだらう。

其內に汽車が停つて、二人はそこ〳〵と下車した。私は汽車の方隅に悲哀を抱いてヂットして居るのに、多數の客は無雜作にガヤ〳〵と出たり入つたりして、話聲笑聲、呼聲、笛聲、皆んなで、依つてたかつて私を苦しめて居る。此ふ思ふと窓から、いつそ飛び出し度なつて、何氣なく硝子窓をパタット落すと汽車が頂度、前橋へ着いてしまつた。此地から電車へ乘り返へた。汽車とちがつて乘客が少く。靑冷めた女が子供二人供れて乘り合つた。多分溫泉客であらふ。

沈默。又沈默。頭を垂れて、ヂットして居ると、同伴者の二人が何やら。吐切れ。吐切れ。に話してるのが電車の軋る

く、君等持參の願書中には已に退學許可と成りし學生の願書も有り故に其全部を受領するを得ず、各個人にて提出すべしと、依て提出を見合せて芝白金なる樫田學監を訪問す。學監曰く、僕は山根とは知已なるも磯部とは何等の關係なかりき偶々五月卅日初めて學監にとの相談あり。其の後數回の願に接し學監の職に着き居る者なるが故に本問題の內容は善く知らず。但し是迄の狀態を見るに君等の奮起したのは尤もと思ふ點もあり。去る七月六日敎授會を開けるが來るもの十四日の小數にて止むを得ず自働車にて不參者を集め四名來會せしむ。席上にて小川博士曰く「學生中に不良の徒多し全部退校すべし」中原博士曰く「退校は不當なり、退校希望者に許可を與ふべし」と結極父兄より取り消しの來りしもの百八十七名を除き外全部二百四十二名を退學許可と決せり。今日退學願書を余は受領するを得ず故に各自書留郵便にて出しては如何」との事なり序に學校の現狀を話して今や學校に金はなく小使給仕に至る迄給金を支拂はずと云へり。

退學願書に付きては個人にて行けば混雜するを以て警察の助力により本日學校も受領する事となれり。

高橋先生關係の雜誌「國論」一部十錢にて希望者に配布す。十二時散會

七月十二日（水）

響に紛れて聞ひた。又沈默。沈默……。

電車が澁川へ着くと午後二時である。早速中食と、某料理店へ伴れられた。其家は知人の料理屋だとかで。二人は、久し振りで、樂しげに話し合つて「此れでは澁川も駄目だ。如何しても、花柳界を發展させなくては、なぢゝ、花柳界の發展は即ち町の發展と心得てる樣子。

成程、此が花柳哲學か。

「君はまだ獨身か。結婚しない內が男は花だよ」

成程、此が即ち浮氣哲學かと。ひどく感心の體。

第三者の位置にある私は唯々沈默に沈默を守つて居るのに、人の話しが、癪にさはる程、ヒン〳〵頭に響く。

其ふ此ふする內に　馬車の喇叭の音が靜に響いて來た。

「もう出ますよ」と女中が知らせに來た

× × × × × ×

澁川から軌道馬車で中の條に向ふ。車体矯小にして氣苦しけれども移り行く佳景一境は、一境よりも佳境なるに、心奪れ

午前九時開會、議長　川村廣一（四）　副　波津久宗統（三）

法律係報告、昨日委員四名裁判所に行きし際學校側の辯護士嶋田樋口、三河の三氏出席せり、學生側よりは鈴木、繁田兩氏出席、公判は辯護士の都合上九月十六日となる。

調査係報告、昨日退學願書呈出せり。十時散會

七月十三日　（木）

午前九時開會、正　森田豊（四）　副　久保倉弘孝（三）

重要議事なし、十時散會

七月十四日　（金）

午前九時開會、正　安部達人（四）　副　波津久宗統（三）

注意事項　明日及明後日に亘り或る重要なる報告ある故、必ず出席する事

柴田君例の萬吉主義を演說せり、九時五十分開會

七月十五日　（土）

午前九時開會、正　後藤哲雄（舊）　副　迫田順一（三）

報告事項　後藤哲雄君、吾々が五月一日以來の惡戰苦鬪今日迄八十日に亘り而して多くの後援者を得たる努力を頌し、吾人の爲すべき事は大部分なし盡くしたれば今日後は後援會の方々及裏面の同情者に賴らざるべからざるを說き、今日以後休會すべきを宣言す。

後援會委員三輪新太郎君、六月十五日、日比谷松本樓に於ける後

て。恍惚として木隱れに演々の響を聞きつゝ、いつしか、中の條には着きにけりと、言つた樣の調子で蜿々蛇々の長途も雜作なく終りを告げて中の條に着き日はトップリ暮れた。

× × × × × ×

御醫者さんでも草津の湯でも迄、唄はれた草津や四萬への吝らしい一團が、しきりに馬車から吐き出されて居た。私は幽霸を抱いて、其等の樂しげなる人々を怨めしさうに見た。

犇々と私を悲哀が……。

× × × × × ×

投宿せる旅館は司團指定旅館で司令官を始め軍醫二人も同宿で、多數の壯丁者がガヤ〳〵して居た。

司令官及軍醫の室は隣りであつたので、一所に御茶飯話しで見ると。學校の事は色々と、よく承知して居て、軍醫などは僕等も試驗の事で騷いだ事があるけれども、どうせ學生の損だからな。女の臭ばかり嗅ぎ廻つて居て、一寸した事で紛擾なんて、贅澤過るよ。と至極、打解た話

援會の五氏會合の際に於ける「第三者の起つにあらざれば此の問題を解決せず」との決着を報じ當初の目的に向つて進行しつゝありと云ひ十三日或る有力者に會見の結果、學生の取る可き手段は盡きたれば今日以後學生の會合は殆んど不必要となれり、今後の仕事は學生を煩はのにあまりに事大なりと後援會の委員は言はれ、而して只吾々學生の團結に待つあるを舒ぶ。

注意事項　中本富太郎君、一日も早く目的を達して祝盃を擧げんには吾々の團結如何による……團費未納者は今日中各縣主任迄納付せられん事を希ふ。

演說　迫田順一君、本日は實に喜ぶべき日なり近々學生團は全漸學校と手を切る事とならん。學校は益々悲境に陷り自滅する日も遠からず、吾人は大なる悅びを以て正義の勝利を歌はん。團結の結果として建設の第一歩は運ばれぬ、三先生が御出席になられたならば謹んで敬意を表し、九月には再び上京、樂しき團欒の內に學びの道を勵まれたし云々。

原三郎君……過去數十日間一糸亂れずして今日の如き樂しき日を迎ふるは大なる憘びなり。諸君の團結と後援會係員の努力には永久に紀念とすべきものなり云々

石川內藏之助君……今後尙大丈夫の心を以て最後の目的に達せられん事を乞ふ云々

振り。集り合た人皆色ぽい人ばかしで司令官を始め。女中にかちかつて居る。司令官の室に今朝、蹲が落ちて居たとか、何とかで盛に皆んなで女中をちやかす。司令官の嚴然たる顏は、そつちのけで唯破顏大笑とは呆れた。話しと言へば女性中心で軍人は。此ふしだらかと獨り合點打解けた話と云へば即ち女性中心の話。男子である以上。今日、此所により合つた人々の樣に世間の人は皆、此ふした物かしらんと。こんだ所で感心して頭を捻つて見るが。此な事が物珍しく響く。私はまだ〳〵若いのかもしれない。近頃頻々として新聞紙上に見ゆる悲劇や、慘劇は、やつぱり戀愛中心が多いのであつたのだ。其から金もある。世間は金と戀。……戀金中心の社會。此ふした流れが。千島の隅から、臺灣のはて迄、流れてゐるのだ。

× × × × × ×

明けて九日、某寺へ檢査のため七時半出頭。昨夜は精々冗談を言つた司令官も軍醫も治り返いつて壯丁者の前に出る所な

並河元勝君……此の八十日間の吾人の行動は實に忘る可からざる事でありし、諸君の歸省後は、暑中も厭はせられず運動せらる五生先並に幹事諸君の健康を祈る、折しも十時五分、高橋、寺尾、福本三先生來塲左の訓話あり。

高橋先生訓話

承れば諸君は本日歸鄕せらるゝとの事、暫く諸君に別れざるべからず。抑も歸省と謂ふことは學生にとつて最も愉快なことにして然して父兄も亦之を大いに欣賀することであろふ。然るに、不幸にして此の諸君は、此の辛福なるべき將又愉快なるべき此の歸省に對して志を遂ぐる能はず、學業半途にして、何等齎すものなく胸底萬斛の涙を藏して、家鄕に歸ると謂ふの心事に至つては實に滿腔の同情を禁ずる與はざるのである。

更に想へ、學生諸子の遺憾寔に其のところなるべし、されど進んで是れが父兄の心事、及び朋友故舊の懷禁や果して如何、蓋し想像も尙ほ及ばぬほどのものがあるのである。今茲に諸子と暫らく袂別するに方つて、吾輩は……唯涙にせかれて、言はんと欲するところ、語らんと欲するところを克く言ひ能はざるものがあるのである。

諸君も知らん、彼の波津久子の嚴君は子が今回の問題に携はり、一と度退學の命に接して歸鄕するや嚴父は之れを憂憤するの餘り

ど御可笑しさ餘りて吹き出したくなる。然し此れで世の中はまるく行くのである虛僞だとか、僞善だとかと言つても程度問題で處世上此な事も必要なのだ。世間見ずの井戸の蛙。感心せざるを得ない。

普通壯丁者とちがつて特別取扱を受けた私は第一着に濟ませてくれた。私が寺へ行つたとき、小學校の校長とやらが盛に壯丁者に向つて、歐洲戰爭目下どうの斯うのと口角泡を飛ばしてゐると物珍らしくきく壯丁者もゐた。

愈々檢査先づ身長、体重。体重少なきに自分乍ら驚く。學校の事など種々と尋れて同情をよせてくれた。次の視力。異狀なし。次が二等軍醫で、此先生まだ學校出たての、ほや〳〵で何年ですか。もう學校をよすんですかなどゝ聞く。

次の一等軍醫。此れで体格全部濟むのである。此軍醫の傲慢の態度たらない。昨日の事もあるしするから少し癪にさはつてはゐるが、此な時はと敢て勤懲に出る体格が全部すむと、今迄の檢査模樣の書いてある紙を以て郡長の前に出るのであ

竟に自刄を致せると謂ふは實に慘鼻を極めたる歷史をも綴られたのである。由來我が國に於て學生對學校當局の問題は今にして始めずと雖も、斯る悲慘なる犧牲をまで拂へるものは實に之れを首めて聞くところであると同時に、吾輩は何等の言詞を以て之れを慰め、是れを弔ふべきかを知らぬのである。然も斯る不詳事は實に子一人の上にのみ止まらず、或は更に幾多の憂ふべき、將た、悲しむべき事實を見るに至るやも測られざるを以て、吾輩は是に對して切に愼重なる注意を望んで止まないのである。

獨逸の諺に「時は怒りを治する醫藥である」と、縱令怒髮天を衝く底の場合に於ても、時間の經過は軈て之れを冷却して、果ては些のみの感じをすら存せしめぬものである、其の如く今回の事件に就ても兩者倶に茲に一考尙三考の要を希望するのである。昔松平樂翁公が淺野內匠頭にして若し一服を燻ゆらすの遑があつたならば、あんな騷きを起すには到らなかつたであらう」と言はれ、又或る時侍臣に對して「此の手紙は急ぐものであるからユツクリ書いて呉れ」と謂はれたことがあるが、實に味ふべき言葉である。怒るも可し、然し乍ら其怒らんとする時には先づ一歩退いて、よく思考したる後に萬事を決すべきである。

諸子は家鄕に歸られても、吾輩等は諸子と諸子の父兄に大なる同情を以て、日夜、之れが善後策に腐心して居るものである、己にる。郡長は前者に比して頗る的溫好の君子。ひどい目に出會ひましたれど。全部退校になつたのですか、同情の上同情。默つて第二乙種の印をパツト押してくれる所など。すつかり氣に入つてしまつた其紙を持つて司令官の前に出る。司令官は何兵を決定する所で、邑樂は何寸迄取りましたか。と聞いて居たが第二乙種と書いてある紙片を渡してくれた。此を受取つて三人で寺を出た。

太陽は盛に照りつけて蟬の聲かしまし。

× × × × × ×

此に一寸感想を述べれば……

檢査は單に徵兵のために設けられたものではない。人生の行路の一ステーションである。此こで水も石炭も積み込み新勢力を以て、社會の一員として、突進せねばならぬ。夢の樣な生活を振り棄てゝ新しい自我を認め否建設せねばならぬ。

嗚呼、吾は過去二十星霜の夢の生活から是に初めて黎明の鐘を聞いたのである、此紛擾なかりせば。吾は依然として夢より夢へと移り行くに過ぎなかつたらふ。

諸子の知れるが如く、秋虎太郎君の如きは現に着々として新校設立のために努力せられ、又過日は帝都の醫界に於て名聲赫々たる某大醫の如きは、吾輩が本校生徒諸子の爲めに援助あらんことを求めしところ、氏は反つて之れに對し多大なる同情を博せるよりは、寧ろ氏自ら學生の爲めに吾輩の勞を多とせる旨の挨拶に接したのである、尙ほ氏は自分の鄕里より數名の同校生徒を出し、現に或る者の保證人となり居れる關係上、本校の事情は概ね之れを知悉せるが、學校當事者の宜しからざる事も亦充分認識せるものである。故に其事實に徵しても、之等一般學生の復校の如きは到底不可能のことであると思はれる。若し暑中休暇後に於て新たに敎場を得るとすれば、其の敎育に就て些の遺憾なきことは信じて疑はぬのである。例へは其敎授上に要する機械其他の用品等の如きは之に充つる事を得やう、其新たに購入せざるべからざるものは顯微鏡位の二三にして何等の差支はないのである、更に敎員の如きも氏の手に於て不足なる場合には氏自ら其任に當ることも辭せないのである、且つ生徒の實習の爲に病院を提供すると言ふ事も勿論差支ないのである、との事にて誠に深厚なる同情を以てして吾輩の賴みを入れられた、其の欽や千萬人の援兵に優りて感謝に堪えざるところである。

斯の如くして諸君は兎に角前途に一つの曙光を認めたのであるか思へば紛擾は吾の覺醒を促した。實に黎明の鐘であつた。再言す黎明の鐘であつた。

暗黑の深夜から曉に、吾等は活動の舞臺に出たのである。大に活躍し奮勵しねばならぬ。最後に諸君の健康を祈る。

縣人會主任としての私

杉山泰治

▲私は今年の夏休み、多くの學生が歸省した後に、山形縣主任としての任務を帶びて、東都に留まる事になり、又便宜上秋田縣の主任をも兼ねましたが、其の方の事は專ら土田君がやつて呉れました。

▲恰度その時分は、猶お互に前途を誓つた學生の中にも未だ膳玉の据はらぬ、腰のふら付く奴があつて、人心稍もすれば利己主義に走らうとする時であつた。自分は色々の事を見たり聞いたりするに付け、心中甚だ穩かならず、獨り胸の血を湧かした事もあつた。

ら決して悲觀せらるゝ必要はないのである。

凡そ人の世に處するに當り何事にしても其の目的を貫徹せんと欲すれば幾多の障碍に遭遇するは當然の事であつて、決して平々坦々たる路上を自働車にて走快するが如き好都合の事はあり得るものでない、其の所謂行路難は何事にも付き廻るもので殆ど避け得られぬものと言ふ事が出來やう。殊に醫業の如きは人の生命を掌どるものであるから自ら一層の難事を伴ふに到るものである。孔子は三度肘を折つて良醫となると言はれたが其の困難を想像しての話である、且つ獨逸の諺にも青年は四回迄は失敗をせなければならぬと言ふて居る。素より好んで四回の失敗を爲すの必要もないが尠くとも三四回の失敗は豫め人生の行路には覺悟してかゝらねばならぬと言ふのである、豈唯に三四回のみならむや止むを得ずんば九回迄は失敗を爲すことを得る而も尙死せざれば捲土重來する事を得ると言ふたことがある。故に諸子の如く春秋に富んで居るものは極めて前途多望であるから、此際一時學業を途絶する如きは遺憾な事には相違ないが、さりとて少しも憂ふるに足らぬ事である。それに俗間に於ける有名な諺に「醫師と南瓜はひねたのが良い」と、更に歐洲にも之れと同意味なる諺がある、醫師は老年でなくてはならぬ、藥劑師は富裕でなくてはならぬ、理髮師は青年弱年でなくてはならぬ、之れを吟味すれば一々眞理をもの

▲其後月日の經つに連れて、其時々の印象も餘程薄らいたが、今尙殘つて居る感想の幾分なりとも、玆に披瀝して見やうと思ふ。

▲私に性來至つて口不詞法の者である、之は所謂東北人の通弊かも知れんが、自分の思ふてゐる事の十分の一も、滿足に言ひ表はすのが六ヶ敷い事である、又其日の氣分次第で人との對話などが、割に旨く行く時もある、要するに饒舌る事の至つて下手な者である。

▲故に皆の集まつた會場などでは、只の一回も自分の意見を發表した試しは無いよしんば有るにしても誰かゞ同樣の意味で言つて呉れるから、餘計な面倒を見ずに濟ました。

▲然し私は物を云ひ表はすに一向不得手でも、自分の荷負ふてゐる責任は飽く迄も徹底的に盡す積りでゐた。平常から物事を好加減にして、放置する事の出來ないのが私の氣質である。

▲七月上旬、國元の親父から、學校騷動も好加減にして一旦は國に歸り、家事に

がたつて居る。且つ世に大器晩成と言ふ決がある、諸子は決して此場合最早煩悶慮焦すべきではない、雲は無心にして岫を出する態度にありて徒に悶迫するには及ばぬ況や諸子の成業は素より前途に長年月を期して立たねばならぬ事であるが故に、諸子にして其大目的を達せんとするには第一に必要なるは主として諸子の身體と精神の健全を保たねばならぬ事である。されば此上喋々と繰事を述んと欲するものではない故に此意味に於て諸君と暫く茲に袖を訣つに當り切に諸子の健康を祈りて熄まざるものである、吾輩は更に諸子の父兄に對して充分なる安心を與へられむことを諸子を通じて切に希望するものである。（大正五年八月五日國論所載）

寺尾先生訓話

先刻高橋先生の御話に學課に就ても然る可き人の同情によりて大に有望なる事は諸君と共に喜ぶべき事なり學校の經營は秋氏の盡力によりて進行し若し成功せざる時には氏自身にてもやるとの事なり、諸君は大に滿足して可なり、前途は有望なり、諸君は歸省中には不謹慎の事なく、心身を健全にせられよ、萬一出來ざるにしても諸君の此の團結は現今の社會に對する一大標準となるべきものなる故に夫れにて滿足して可なり、諸君歸省後は益々健全にあられん事を望むものなり。

福本先生訓話

手傳へと云ふ通牒がありましたが、自分は如何しても決勝點まで漕ぎ付ければ、歸るにも歸られぬと云つて斷りました。

▲父は幸に私の意の在る所を容れられて其后何とも云つて寄越しませんでした。多分默許の裡に我等の前途に幸あれかしと、祈られた事であらう。

▲其の當時、正義の旗風に奮ひ起つた我々が、果して勝を制するか、或は惡埒非道の磯部側は果して敗を取るかと云ふ事に就ては、社會の識者並に私の知己、親戚の者でも大變危ぶんで居た。

▲新たに學校を收容する、と云ふ事は事實云ひ得易くして、行ひ難しだと誰でも云ふ。然し私は味方贔負の爲か、內容の事情に精通してる爲めか、如何しても學校は建つものと信じてゐた。

▲若し不幸にして一朝事が破れたと假定する、其の時私は學問を一切斷念して、西洋料理屋でも始めたら、屹度儲かるだらうと其の方は遙かに樂で面白いと心に願き、さうする事に決めてゐた。

▲然るに、正は遂に邪を制し、幸運再び

諸君の歸省せらるゝ事は前の學校と手を切る事の標榜なり、已に歸省せられしならば前の學校には復歸らざるならん。日本人は熱し易けれども繼續心のなきものなり、歸省中には恐らく誘惑の手が來る事と思ふ、諸君の決心を試驗するは此の間が最好時期なり諸君正義は一貫すべきものなり、歸省中に於ては在京の諸君と連絡を保持して擧動せられん事を願ふものなり。又在京の人々に於ても用心肝要なり、餘りに樂觀すべからず、また悲觀すべからずまた如何なる誘惑をも擊退せられん事を希ふ。

十時五十分三先生の訓話終りを告げ再び演話を開始す。

波津久宗統君……喜びを述べ尙最後迄強固な意志を續けられん事を乞ふ。

赤澤中君……吾々が正義の叫びを發してより今月迄八十日、其の間前途に光明を認めたるは、歡喜の至りに堪えず、斯の如き日を迎ふるは一重に諸君の團結の賜である。諸君で歸省せられるゝ方々は老ひたる父母を安心せしめ又健全なる精神と身體とを以て九月の新校に新學期を迎へられん事を希ふ。

佐多正藏君……三先生の訓話を承り大に滿足せり、私は大なる安心と共に來るべき九月には至大なる樂みを以て又會合せん事を希ふ……次に質問に移り級代表者として在京する人には如何なる程度迄本部に關與し得るや。

廻り來つて、天は五名士其他諸先生の手をかりて、途方に迷へる四百餘名の學生を救つて呉れた。お陰で吾等は今日秩序ある教育と、意義のある生活を送る事を得、從つて西洋料理屋を開店する世話もなくて濟んだのを悦ぶ。

▲休假中にの磯部の奸策で、都下の有力な新聞を利用し、隨分學生側に不利な記事を掲げさした。或時は立教大學との合併問題、或時は評議員選定の大々的廣告或時は又執拗なる生徒募集の廣告等を見るに付け、自分は居堪たまらぬ程業を煮やし、癪でならなかつた。

▲其の頃我縣人は十三名あつた、此の人々に對し主任會議で定めた、決議事項、若しくは其の後の經過報告を、一々ペンで書くのは容易な事でなかつた。それで夫れに費す勞力と時間とを省く爲め、或る時上野の博品館に行つて輕便印刷器を買つて來たが、餘りに價の廉なのと、我が未熟練なとで、如何も文字が不明瞭なのを遺憾としました。

▲有難い事には、他府縣の中には團費が

後藤哲雄君答へて、縣人會主任及級代者は他に重大なる責任ある故に後援會に口を入るゝを餘り好まざる也。

注意事項、小野庄次郎君、休會後團結を保つ機關連絡の必要上の注意をなす

一、退學許可書は本部に於て保管す

二、解散後學校側より通知ある時はその書狀を本部に送る事

三、縣主任の發する通信は必ず主任の認印を押す事

四、歸省前には在京保證人の許に立ち寄り今後學校側より何等の通告あるも會合又は返信を爲さゞる樣にする事

五、本部よりの通信には本部の印あるものに限る

明日午前九時より各縣人主任及各級代表者は鈴本亭に集まるべし

今後も會場を當席と定む。尚本部員を代表して一言す、歸省中も身心を養ひ新秋九月には相互に健全なる笑顏を見ん事を希ふ

議長茲に散會を宣し

天皇陛下萬歲三唱

學生團萬歲三唱

拍手裡に全員解散時に午前十一時二十分、斯くして吾光榮ある學生團は茲に休會となりぬ　顧れば春暮れて青葉若葉に風薰る五月の初めより盛夏七月の中旬迄八十日間の長き日月も、益良雄が張りつめし心の弓に夢の間と過ぎ、或は文部省の庭に、日本病院に、或は中

三四回分も滯ふてる者あるに係らず、我縣人は金離れが良いと見えて一人の滯納者なく、從つて督促狀を發するやうな事で殊更主任の手を煩はす者が無かつたのを悅ぶと同時に、大に他に誇つたやうな譯である。

▲然し其の方面に費す精力をば、我縣人の落伍者をも出さぬやうにする爲め、少しも早く退學許可書を手に入れやうと努めた甲斐あつて、今日何れも顏を揃へて同じ目的に向つて進んで居ります。

▲嘗て我縣人で疑問の人として上げられ一時保留の形になつて居つた武田幸治君に對して、其後の動靜を見、猶意見を聞かん爲め、二三度足を運んだが生憎不在だつたので、最后に書面を以て諸問した怪が、却てアベコベに異分子呼はりは奇性千萬と怒鳴られ、且つ明白な態度に出でられたので、安心した事もある。

▲兎もすれば三日目毎の會合日に、縣主任であり乍ら無斷欠席又は遲參する者が往々あつた、設令如何な用事か事情があ

央會堂に、大和座に、世人の注目を集め、日刊の新聞には三面となり論說となり雜報となりて表はれ、毀譽褒貶定まりながらしも遂に識者の同情となり後援會の諸名士に仍りて血汐の花は實を結び學生始め關係者の等しく歡喜の內に目出度此夏を過さんとす、快なる哉。

後援會係日記

五月十四日　學生後援會委員十名選定さる。
五月十九日　後援會趣旨書完成
六月二日　學生後援會懇談會開催提案可決、各縣人名簿作製、先輩の訪問開始。
六月十二日　神田ミカド倶樂部にて學生後援會懇談會開催。
六月十三日　後援會係五名增員す。
六月十九日　正式退學願書呈出の儀本部より提出可決、

日本醫學專門學校當局者と同校學生四百五十名との紛擾始末

日本醫學專門學校は明治四十五年七月十日文部省の認可を得て設立したる七萬二千八百圓(建物器械の總價)の財團法人にして曩に生徒を募集するに當り必らず文部省の指定(指定を得れば卒業と同時に醫術開業をなし得る也)を受く可しと約したるに同校理事磯部檢藏氏の不信(先に詐欺犯にて罰金百圓に處せられたり)の爲めと學校基礎の危殆とに依り文部省は遂に指定を與へずして本年の卒業期に至りたる等再三學生を欺きたる結果遂に同理事排斥に運動を起したるにもせよ、重大なる任務を放擲し或は等閑に附するのは無責任も甚しい、一体こんな人達の心が知れなかつ。その爲めに罰金係なども設けあつたが、一向効目が無かつたのも後で知れた。

▲私は幸にも三伏　炎暑に負けず、格別の用事も無かつた爲め、一回の欠席遲刻もせずに濟んだのを、心密かに滿足してる樣な次第です。

▲八月二十四日、我等の最も期待し渴望して止まなかつた通告第一が、此日發表されたが、其內容の餘りに貧弱なので聊か失望すると同時に、之を縣人に通達するにも張合が拔けて、濟まぬやうな氣がした。

▲飜て八月二十六日の朝、中央新聞紙上に初號活字の標題で「東京醫學講習所の新設」と云ふ大々的記事が出た時、吾は飛立つ斗りに悅び勇んで、夕飯も喰はずに雨の降る中を、京橋の本社まで駈け付けて三十枚程買ひ求め、直ぐ樣縣人宛に送つた事もあつた。

▲斯くして事が順調に運び、九月十一日

り學校にては之を鎮壓せん目的にて三十有七名の生徒に退停學を命じ爲めに徵兵猶豫を取消されたるものなり、茲に於て學生の意氣益々昂憤し四百五十名同盟血判をなして被處分生に殉ずるの決議をなし一同退學届を提出したり、爾來文部省も大に其處置に窮しつゝあるに一方磯部理事は山根理事長等と學生の同情者を排斥すると共に學生を孤立に陷れ以て屈服せしめんとする手段を講じつゝあり爲めに學生と學校との緩和は反て益々遠ざかり學校は此儘前途の目的を失ふも斷じて決意を堅ふするに至れり。

斯くして四百五十名の學生を方途に迷はしむるは國家の一大事なり仍て我々同志後援となり相當解決法を講せんと欲す幸に御賛成あらんことを希ふ

大正五年六月

大角桂巖　高橋琢也　福本誠

寺尾享　秋虎太郎

右趣旨に同意協賛後援會に加入せられし名士の芳名は卷頭にあり

八月日四日　日本醫專諸教授を訪問し新校の教授たる事を懇願す

委員(前四年級)小谷無違　須藤力三、藤收玄雄、上野賢太郎(中途辭職)三輪新一(補缺)(四年級)中村丈男、片岡己代治、鈴木章(三年級)市原經太郎、藤野憲一郎、前田燐之助(二年級)柴田萬吉長委三美(一年級)江並猛、羽村五一　(上村委員記、丸茂委員補)

の午後サッポロビール會社の庭園で、お互に會心の笑みを湛え乍ら、祝杯を重れつゝ立舞ふたが、ビールの泡が消ゆると同時に、我々縣主任の役目も消へた譯である。

▲最后に諸兄の健在と勉勵とを祈る。

去年今宵

原三郎

起切指期葬學商
醼懷今日一星霜
姦爺尙保命繼暴
僚支蘇血不未濁
此日感慨轉無量
前途尙遠志愈堅
正終克義明曲直
四百健兒溢紅血

(大正五年十二月十八日作)

破壞より建設へ

大正五年七月十六日より十月七日迄

聯合會議出席者として滯京する者

(一)級代表者

舊四年級　小野庄次郎　須藤力三　山本敬
四年級　安部達人　高畠秀勝　丸山郁雄
三年級　向井鎌次郎　石川光雄　緒方晴逸
二年級　小坂襄　吉澤晁　藤中正
一年級　河野正夫　野上　中山幹

二、縣人會主任及副主任

沖繩縣　嘉陽宗正(主任)　屋比久孟德(副主任)
鹿兒島　佐多正藏　井上周一
宮崎縣　小野庄次郎　田部千秋
大分縣　稻葉豊　袋野元一
福岡縣　三輪新一　原田俊吾
不知火會　中村丈夫　馬島登

四國會

山口縣　尾形文夫
廣島縣　三好毅一
岡山縣　德田隆助
近畿　小野誠司
三重、和歌山　梶谷馨
愛知、岐阜　大森木
島根縣　家崎繁之助
石川、福井　石川光雄
富山縣　石橋穰
烏取縣　辻常次
靜岡縣　石川內藏之助
山梨縣　多久俊
神奈川縣　山本敬
東京府　若月美明
埼玉縣　新井亮
千葉縣　酒井敏雄
栃木縣　成田義英
茨城縣　山村清
福富義雄
安村政明

馬詰嘉吉
土居一豐
西村律治
藤本竹平
山本仁
中川兵次
久保倉弘孝
杉本完
河野正夫
本保秀
村上清作
足羽共之
峰野庫
篠原彥麿
藤牧玄雄
丸山郁雄
西山晴雄
石毛貞治
樋口正四
關谷斐三郎

群馬縣　原　三郎　星野新次
長野縣　清水兩助　飯森喜放
福島縣　佐倉鐵馬　小川豊丸
山形秋田　杉山泰治　土田宗明
新潟縣　高桑武夫　渡邊　貞
宮城岩手　菅野憲一郎　菊池秋水
北海道　大岩　保　笹川政治

三、本部係員

小野庄次郎　中本富太郎　後藤吉勇　三輪新一
青山豪一　後藤哲雄　藤牧玄雄　新井　亮
須藤力三　上野賢太郎　酒井敏雄　小谷無違
嘉陽宗正　中村丈夫　大澤龍雄　古川道之助
片岡已代治　山本　仁　高島秀勝　波津久統重
追田順一　須藤　元　本保　秀　市原經太郎
前田燐之助　今藤　敏　菅野憲一郎　柴田萬吉
長委三美　羽村吾之　江並　猛

計百十名　（計百十名）

聯合會議日誌

七月十六日（日）晴

午前九時鈴本亭にて開會(以下會場同じ)縣人會主任、副主任、級代表者、本部係、總計百十名の第一回聯合會議なり、以後集會日は三にて除し得る日を以てする事に一決す。

七月十八日　(火)　晴

退學未許可の者は學校に對して請求書を提出すべき事、滯京者、在鄉者共に學校側の誘惑に罹らざる樣の警告本部よりありたり。

七月廿一日　(金)　晴

議長　藤卷玄雄　午前九時開會

縣人會主任より在鄉者にあて妥協案に耳を傾けざる樣注意の手紙を發送する事を提案可決す。本會は要するに十五日以前の會を縮少したる意味にて總て從前の形式に從ふ事とす級代表者は級として問題の起りし際に級の立場より其れに應ずる權利義務を有するものなりと定義さる。退學未許可の件に對し各級一名宛の委員を擧げて學校と交渉せしむ。

七月廿三日　(日)　晴　臨時召集午後一時開會

議長　尾形文夫　副議長　佐多正藏

七月廿一日の萬朝報夕刊、二十三日の同朝刊、及び中央新聞に本問題の記事掲載さる、萬朝記事の「學生の團結依然固し」に對し中央は稍學生側に不利なる點あり之に對して臨機の處置を講ぜん爲一日會期を繰り上げたり。本部よりは三名の委員出動し中央新聞社にその取消記事を掲載せしむ。恰も三名の委員が同社に着せし者たま〳〵磯部氏と遭遇せりと云ふ

文部省訪問の提案、可決、委員五名選定さる、三時開會。

七月廿七日　(木)　曇　午前九時開會

議長　山本敬　副議長　紡方晴逸

學校訪問委員より報告あり、曰く退學未許可者の氏名は秘密に附するを以て確實なる數を知り難しと。故にある(方法臨場本富士署高等係を介して)調査する事にす。文部省訪問委員報告あり。次官、參政官に面會せりと。二十五日の中央、讀賣、東京毎日に本問題出づ、異分子との交際は大に警戒すべしと注意あり。起草委員七名任名さる十一時閉會。

七月卅日（日）雨　午前九時開會

議長　多　久　俊

起草委員より團報第四號發刊の豫告あり。緊急動議なし記錄係安部、原、馬詰の三名任命さる。明治天皇祭なるを以て十時散會す。

八月三日（木）晴　午前九時開會

議長　吉　澤　晁

小谷、藤牧、小野、中本、佐多、安部、青山、山本仁、柴田等に報告、注意、合計催足、演說、等あり。奇拔なる報告は猪股一派の學生は田端の寄宿舍に妻君同伴にて宿泊せりと。十一時閉會。

八月四日（水）

本部よりの報告書が學生及びその父兄並びに保證人に對して發さる。いそ〳〵と一枚をとつて讀めば次の如し。

『拜啓今般前日本醫學專門學校生徒四百餘名は殆ど全部退學相成り候に付下名等協議の上秋氏に本年九月より、明年二月迄一學期間の授業講習に屬する一切の經營を一任し其間に於て財團法人の設立、醫學專門學校認可申請の手續を進行すべき方針に候に付ては差詰假校舍の買收又は借入、內部の修繕備品、模型標本器械類の購入費を要すべく候條生徒一名に付入學保證金として金拾五圓宛本月廿日迄に秋氏の有せらるゝ郵便振替口座(東京第參六五壹番)へ拂込相成候樣致度尤も該保證金は大正六年三月拂込の授

業料へ振替充當可致次第に候間此旨學生一般へ御通知相成度此段得貴意候。以上。

大角桂巖 印
高橋琢也 印
寺尾亨 印
福本誠 花押
秋虎太郎 印

大正五年八月四日

元日本醫學專門學校學生團總代御中

承諾書

前段の如く今回自分に於て元日本醫學專門學校生に對する應急施設として私立東京醫學校を設立し來る九月十一日より來年二月末日迄一學期間の講習校業を開始する事を承諾致候に付ては既に學長として某大家の承諾を得目下教授の選任、病院の利用實習上の便宜等に付着々準備中に有之、校舍の位置も不日確定可致候間右樣御了承相成度候、尙自分として本件の引受を諾したるに付左の履行を豫め申約し候。

一、入學保證金は新校の備品、模型、標本器械等他日學校の資產となるべきものの外使用せず、殘餘金と共に新經營の學校に引繼ぐ事。

但し新校設立の場合は來年三月拂込の授業料中より差引くものとす。

一、校舍の買收、解剖費、學校の經常及臨時の諸費等一切の費用は授業料及實習科の收入を以て當一學期間の全部決濟を引受くる事

右自分に於て無相違履行する事を約諾す。

大正五年八月四日

私立東京醫學校入學生御中

秋虎太郎 ㊞

拜啓　炎暑の候益々御清適大賀奉り候陳は學校紛擾問題に就ては種々御心配相掛け恐縮仕り居り候然るに豫て後援會芳名者中將に之が解決を委任仕り居り候秋、高橋、寺尾、福本、大角の五名士により別記の如き書狀及承諾書御提出に相成り候。こは希望の醫學校認許迄の救濟策にして目下五名士は認許出願の件に極力御奔走中に候。校長及教授等もほゞ決定仕り居り候も對外策上今暫く發表見合せたしとの事にて近々吾々の希望する新校も設立され學生の凱歌をあぐる時も來り申すべく候に付御安神下され度く尙此上ながら御後援偏に願上奉り候。謹言。

八月四日元日　　本醫學專門學校學生團

保　證　人　殿

この手紙が出る迄に本彩の苦心察すは餘りあり、退學許可證を切りに請求せしも之が爲なりき。團報四號印刷成り國論八月號も三百部來る。午後五時より本部にて之等を各主任に配布す各主任は直ちに團員に向つて發送せり喜悅に輝くの日なりき。

八月六日（金）晴

議長　向井啓素　　記錄係　原　三郎

主任缺席　神奈川、　栃木、　山梨、　三縣

團費未納者に對する處置、秋先生の承諾書の件、雜誌國論の件等議さる。山本仁の報告によれば異分子にて日本醫專の試驗に應ずるものは、卒業受驗生十七名、一年十二名、二年四名、三年十六名、四年十三名、合計六十二名なりと。

その他演說あり。帽章圖案募集され已に再び學生としての復活の聲が其處此處によろこびとなつて表はれぬ。

八月九日（水）雨　午前九時半開會

議長　須藤　元　　記錄係　安部路人
主任缺席　宮崎、福岡、近畿「福井石川」神奈川
入學保證金を期日迄に必らず納入すべき通知を各主任より發する事議決さる。中本合計係長より團費未納者の處置を呈出、帽章圖案係に多久俊任命さる。
八月十二日（土）
議長　柴田萬吉　　記錄係　原三郎
主任缺席　宮城縣。
缺席主任よりは罰金徵收の事に決定す。後援會係の活動益々多忙なり。十時閉會。
八月十五日（火）晴
議長　後藤哲雄　　記錄係　原三郎　河野正夫
主任缺席　福岡縣
議長より入學保證金は一日も早く納入すべき樣注意あり。十時閉會
八月十八日（金）晴　午前九時半閉會。
議長　石川內藏之助　　記錄係　安部路人
主任缺席　「宮城、岩手」
五名土よりの端葉を各主任に配布す、文意如次
『拜啓　殘炎未退の處益御淸適の御事に存上候陳れば新設醫學校の件着々進捗いたし數日內に具體的に御報告の運に相成居候に付此際子弟諸君に於ても流言蜚語に惑はれざる樣御注意被下度此段爲念申進候敬具。
大正五年八月十七日』

未退學者尙十九名あり、その處分を討議せしが具體的發表と同時に勸誘する事に決す。留學生は一般に入團希望者は許可する事に決す。日本醫專破壞論沸騰せしが要するに先づ日本醫專側評議員を歷訪し意見を同ふ事とし十名の委員選出せられたり。閉會十時四十五分。

八月二十一日（月）晴午前九時開會

議長　石川光雄　記錄係　原三郎

主任缺席　高城、岩手

學校側評議員訪問委員の報告は次の如し。江原素六氏、不在棚橋一郎氏曰く余の日本醫專評議員承諾は猪股一派の勸誘並びに繭幸太郎氏のすゝめによると。井上通泰氏曰く個人としては學校生の復を勸誘するの意なし諸君等の學校の基礎が定まれば自分は斷然手を引くべし。宮本仲氏曰く、始め磯部山根來て承諾を迫りし故りに諾せりと尙須藤委員は氏に對して新聞記事に付大に詰問せりと。昨日迄入學保證金の拂込み三分の二なり、受取證は追つて發送すべしと小野本部係員より報告あり。十時閉會。

八月廿四日（木）晴　午前九時半開會

議長　佐多正藏　記錄係　原、河野

主任の手よりして「通告第一」を團員に發達す

通告第一

拜啓豫て申進候學校の儀着々進捗し校名を私立東京醫學校と稱し本校を東京市牛込區神樂町二丁目二十四番地東京物理學校內に假設し來る九月十一日より開校授業致候に付不取敢此段及御通告候也。

大正五年八月廿三日

大角桂巖
高橋琢也
福本誠

寺尾　亨
秋　虎太郎

『右之通り通告第一に接し申し候に付不取敢御通告申上候
尙詳細なる具體的發表有之筈に候ひしも關係諸名士中避暑旅行致され御不在の爲め其時期に付協定不點可能のも有之且日本醫專側の半狂的運動に對する作戰上考慮すべき必要等より既に決定せられたる事項も見合せと相成りたる由に候へば左樣御承知下され度候何れ近々通告第二として具體的發表有之旨申され目的通り着々進捗仕り居り候間何卒御安神下され度候　早々
大正五年八月廿四日

前日本醫學專門學校學生團本部』、

保留者處分問題討議せられこの際なるべく寛大の處置をとる事に決す。從來除名と定まりしものは斷じて入團を許可せず。除名者は、一年級十四名、二年級二名、三年級九名、四年級九名、前四年級二十七名、保留者は一年級十三名、二年級二名、三年級三名、四年級九名、前四年級三名なり。然して保留者を處分するは事重大に屬するを以て一人宛愼重に審議し級調査係、縣人會主任及び個人的關係ありしものゝ說明を總合し之を判斷し多數決にて決する事とす。かくして保留解除されしものは一年級八名、二年級二名、三年級一名、四年級四名、（尙福井、稻澤は友人等辯護の結果退學許可證を持參せば解除する事とす）前四年級三名。之等に對しては級代表者より通知す。故に尙保留處分にあるものを列記すれば次の如し。

一年　佐岡、齋藤、上野、苅部
二年　岡田、三年　宮本
四年　福井、稻澤、矢部、石塚、西澤

前四年　女　川、　（萬袋は追加除名）

未退學者は今月中に退學許可證を提出せざれば除名と決す。この時福本先生臨場さる。後藤哲雄君議長となり再會　福本先生より一場の報告あり。秋、大角、二先生と共に大雨中を茨城縣麻生町に佐藤老博士を訪ひ大に有益なる結果を得たりとやがて退場さる。團費未納者の處分議せられ午後一時閉會。

八月廿七日（日）曇午前九時半開會

議長　本　保　　秀　　記錄係　安　部　路　人

主任缺席　六　名

徽章制定委員に多久、岡谷、小野、向井、吉澤、中山、の六名任命さる。

日本醫專に於て本春三月進級試驗の際一年級より二年に進級し得ざりし者廿九名連書にて嘆願書を呈出し新校の二年に編入せん事を申込む。討論の結果之れ一種の火事泥的行爲として否決し終る。尙新校に於ては絕對に敎務課とを尊庸し權威ある學校を建設せんとて意氣大に高し。十時半閉會。

八月卅日（水）曇

議長　波津久統重　　記錄係　河　野　正　夫

主任缺席　長　野、　山　梨、　近　畿、　神奈川

帽章、襟章、卸の圖案決定、須藤力三報告「五名士の第一回會議は去る廿七日上野精養軒に於て第二回會議は翌二十八日順天堂病院にて行はれ近日中報告第二は發表さるゝ筈なり」と。今藤の提案にて祝賀會委員撰定の半可決され廿五名（各級より五名）選出さる。會員一圓五十錢、全團員を九月八日迄に出京せしむる事となる。また祝賀會當日の歌詞を募集す。山本仁家計上實業界に投ずるの挨拶ありたり。前四年級生女川精太郎脫團。閉會十一時半。

九月三日（日）雨　開會午前九時

議長　石川内藏之助　　記錄係　安部路人

主任缺席　栃木、宮城、岩手、秋田

東京醫學校事務は本日より物理學校内とし事務員三名の手にて開始さる。祝賀會委員豫算の結果會費は二圓に値上げし然もそれを團費として徵收する事に決す。十時半散會。

九月六日（水）晴　午前九時開會

議長　山本仁　　記錄係　安部路人

主任　宮崎、不知火、栃木、

前日の新聞に日本醫專と立教大學聖路加病院との合併問題掲載せられしに付委員三名はトイスラー氏を葉山に訪ひ眞相を確めたるにすべて該記事は磯部側の揑造に過ぎざりき。本日の萬朝報には取消記事もあり。九日は全團員集會日なれば八日本に會議を繰り上ぐ。團員中海軍兵として四ヶ年半服役すべき人二名あり同情の極みなり。佐藤博士の意向により祝賀會は專門學校設立の時を期し盛大に擧行することにし今回は懇親會として質素に行ふ事とす祝賀歌安部の手によりて成る。本部よりの端書を發送す。文意次の如し。

急告

拜啓來る八日迄に御上京有之度旨御通知候處左に其後決定の事項急告致候。新校開始に關し顧問とし既に醫學博士男爵佐藤進、醫學博士中濱東一郎兩氏の快諾を得教務上一切の準備は醫學博士佐藤達次郎氏擧げて其衝に當られ教授も全部決定致候間御安心相成候上期日迄に無相違御上京有之度候。

追て過日一二新聞紙に掲載せる立教大學（聖路加病院）の日醫買收の件は先方主腦者トイスラー氏と會見調査の結果該記事にある財源は國際病院の財源なる事ト氏は全然交渉に與からざる事及同氏が記事を取消せる事以上に依り全然事實無根に有し候間御安心相成度爲念通知致候。

大正五年九月六日　東醫學生團本部

九月八日（金）晴　午前九時開會

議長　澤　慶一　記錄係　馬詰嘉吉

學生團解團の議起る。明白の協議事項としては、(一)缺席者に出京の打電、(二)未退學者處分、(三)團費未納者處分、(四)懇親會役割、(五)十一日は制服着用の事等を議決す眼科、產科、婦人科を除いて全部教授の發表ありたり。

△九月九日（土）晴　午前九時開會

議長　後藤哲雄　副議長　峰野　廉　記錄係　金　子

本日は永久に紀念すべき解團の日にして、團員全部を召集せり當時學生團員の數を表示すれば左の如し

一年級　百十七名
二年　六十三名
三年　九十九名
四年　九十二名
前四年　四十四名
總員四百十五名

本日の缺席は一年三十六名、二年十七名、三年卅四名、四年廿九名、前四年二十二名、の計百卅八名、にして卽ち出席者は二百七十七名なり。永き別れの後の再集多少の感慨なき能はず。

後藤議長開會の辭を述べ次いで聯合會議以來の詳細なる經過報告あり。中本富太郎より第七回團費として二圓を徵收する旨を述ふ。大角先生臨場今日に至りし迄の苦心とこの喜びを述べられ學生は各自學

監の心持にて自治的に進み決して他より指彈され體面を汚すが如き行爲なきを要すと、學生團に對して最後の演說をされ團員は慈父に接するが如き愛悅を以て拍手し迎へたり。懇親會は十一月、入學式當日の午後より向島サッポロビール會社庭園にて開催する事に決し接待役十名を新に募集したり。この喜ばしき日にあたりて更に一つの悲劇は起りぬ。そは山本仁が此度病兄の依托と家事上の都合により新校設立を見屆けたる上斷然醫學を絕ちて實業界に投ずる決心を涙ながらに述べられしにて、一同等しく暗涙を呑んでしばしは聲もなかりき。尾形、中村、本保、今藤、石川、の諸君交々に立ちて送別の辭を送りぬ。

祝賀歌と懇親會プログラムを一同に配布し、祝賀歌を一回合唱す。

かくて悲喜交々臻り緊張せる氣分の中にいよ〳〵解團の宣言は後藤議長の口より出でたり。

一同起立し、天皇陛下の萬歲と、學生團の萬歲を三唱して十二時過ぎ散會せり。

帽章も卸も出來せり。懇親會委員は遲くまで活動す。之れまで毎日鈴本亭の會議には本富士署より三名の高等係が臨場せしがいよ〳〵本日を以て終り故に、小野、後藤、は御禮の挨拶に行けり。これ又一種のアイロニーなり。

解團の歌

一、夜は靜かに更け行きぬ　秋風吹きて千鳥啼く
祝盃高く捧げつゝ　友よ叫ばんもろともに
二、「あゝ解團の時來ぬ」と　よしや勝利は得たりとも
骨肉よりも親しみし　四百の健兒涙あり
三、義に堅かりし學生の　巖も透す團結を
やがて移さば新校の　校風長く香るらむ。

九月十日（日）晴

會場　物理學校講堂　開會午前八時

議長　中村丈夫　副議長　須藤元

記錄係　金子辰夫　缺席者　百四十六名

保留者の處分問題はかなり議論百出せしが、その結果個人に付審議し一年級の德岡、齋藤、上野、狩部、三年級の岡田、宮元、四年級、石塚は除名に決す。會費未納者は本月廿五日迄に納めしむ。山本仁の餞別は團としては一人十五錢づゝ徵收して金錢にて送る事としその他四年級は級として、本部係も相當の物品を送る事に定まる。金錢徵收は各年級一名宛の委員を設けたり。教室内に於ける注意などありて散會。

此日外濠線の車内や神樂町あたりは白地の浴衣に麥稈帽の横手に新らしい砲彈形の徽章をつけし學生にて滿員たりしもよろこびの一なりき。

散會後懇親會委員は種々準備に忙殺されたり。

九月十一日（月）晴　風烈

午前八時より東京醫學講習所大講堂に於て始業式行はる。半年ぶりに制服制帽靴踏みならして參列する者の喜色を見ずや。

午前八時半より東京醫學講習所始業式開始。

一、辭　式　大角先生

一、經過報告　秋先生

一、教務に關して　佐藤達次郎先生

一、祝　辭　高橋先生

一、同　福本先生
一、答辭　中本富太郎

答辭

茲に生等四百餘名か正義を標榜して蹶然袂を連れ日本醫學專門學校を退學せしより以來既に一百三十有餘日を經過せり。此間生等は不義にして王侯たらんよりは義に死せん事を希ひ武士道の精神によりて載書に血判し團結一致し以て今日に至りたるものは信條を天下に明にし眞の救濟者の出現を期待せしに外ならず是等に當りて諸先生の御同情と御盡力とに依り以て本日の開校に遭遇する事を得たるは旱天の枯苗沛雨に蘇息したるに異ならず。是れ獨り生等の復活のみならず亦吾が數千の係類の欣喜措く能はざる處なり。

今や天高く馬肥ゆるの時。諸先生と生等四百餘名の學生とは一堂に會して和氣靄々の裡に遠大なる事業に第一歩を移すを得たり。生等は堅く校則を遵守して學業に精勵し更に進んでは剛健質實なる校風を發揚し一般學生の柱石たたらん事を期す。是れ生等は諸先生に報ゆる唯一の道なりとず。

爰に開校の初めに當り生等赤誠の存する處を披瀝し謹みて宣誓に代ふ。

大正五年九月十一日

學生總代

前四年級　中本富太郎

午後一時より向島サッポロビール會社庭園に於て懇親會を開催す、この日風強くして隅田河は白沫を飛ばして逆波を寄せ小蒸氣の翻弄せらるゝ樣なか〳〵に壯觀なりき。見よ、かの小舟こそ、過去の我等が運命に如何に似たるかを然して今日のよろこびの更に深きよ東醫學生會懇親會々場の看板をくゞれば萬國旗はハタ〳〵とひるがへり大天幕の式場を圍んで模擬店は軒を並べ池の彼方の小山よりは樂隊の音樂しく響き來る胸に紅白紫黃とりゞの薔薇の花を附けたる委員のせわしげなる中にも喜色あり。ビール樽は大小幾個となく積み上げられ、燒鳥の香、おでん屋の煙、汁粉、あんころ、すし屋店等已に準備成る。

高橋、福本、大角、佐藤達、秋の五先生、清水、その他の教授來賓參集せらる。

祝賀歌

一、千代田の城の松ヶ枝も
秋立ちくれば綠濃し
富士のみゆきを今朝眺むれば
うす紅の朝日かげ

二、夕さり行かば吹く風も
隅田川原に月白し
冴えゆく砧雁がね落ちて
今宵はつどふ岸邊哉

三、譽れの兜木に掛けて
勝利の宴けふこゝに
盃交はし酌むうれしさよ
舞えや四百の健男兒

四、皇化六合に洽くて
不義はゆるさぬ神州ぞ
降魔の劍北斗を宿し
いざや歌はむ愛の曲

五、あゝ長月のなか一日
墨堤花はあらずとも
この歡樂よ月の光よ
君な忘れぞ永刧に　（終）

潮の樣に祝賀歌の合唱が樂隊の音と共に天幕の下より起りぬ。一回に一回、それが拍手に代れば、後藤吉勇君、開會の辭を述べ、次いで高橋、秋、福本、清水御先生の演說あり各自の心漸時高潮に達せり。小野庄次郎が學生團に對する決死の覺悟と五先生に對する感謝の辭を朴訥なる雄辯を以て述べつゝ男泣

きに泣きし時、波津久統重が僕等は指定も何もいらぬ、以後は眞面目に勉強して理想的の學校をつくればよいのだと叫びし時、實に一同は感慨無量、ともに感激の極に達せり。その他中村丈夫、石川、須藤三輪、等夫々熱辯を振ひ紀念の撮影をなす（口繪寫眞版參照）

模擬店は一齊に開始され、舞臺には少年劍舞、義太夫、浪華節の餘興及學生の餘興等も、夫々人を誘ふ。夕暮れ近くなり行くまゝに風稍收まりて雲間には十四日の月、青光をひたし、和樂の觀いよ〳〵大なりき。當時奮戰の勇士互に手をとり戰の跡を胸に描きつゝ固き握手を涙の中に交し、益々今後堅實なる建設の覺悟を誓ひ合ひぬ。

「あゝ我れ誤りぬ、以後は必らず眞面目の生活に立ち歸らん」と眞に懺悔するを聞きし實に一二に止まらざりしなり。あゝ今月今日の歡樂あらんとは如何でか夢にだに思はんや。眞に清き青年の會合なりしぞ。今果てゝ月影霜の如きを踏んで中庭に佇めば雁聲空に流れて謂知らぬ涙の頰を傳ふ……折しも遠く歌の聲！

あゝ長月のなか一日　墨堤花はあらずとも
この歡樂よ月の光よ　君な忘れぞ永劫に、」

九月十二日より十四日迄臨時休講

九月十三日（水）雨

秋雨蕭々たる午后四時、山本仁を東京驛頭に送る、本部係よりは時計、四年級よりは銀製萇入、團としては現金を餞別す。君資性任俠、氏に對する功績沒却す可からざるなり、こゝに謹んで感謝の辭を呈す。

九月十五日（金）曇

各年級々長選擧あり姓名左の如し

四年級　級長　安部達人　副級長　多久俊
三年級　級長　澁川達三郎　副級長　前田燐之助
二年級　級長　柴田萬吉　副級長　馬詰嘉吉
一年級　甲組級長　中山幹　副級長　永井正夫
　　乙組級長　江並猛　副級長　高橋進

同日前四年級加陽宗正より法律係報告あり。各自よりその費用一圓五十錢宛徴收する事に定まれり。

○九月十六日（土）曇
本部會慰勞會の議可決せらる

○九月十八日（日）晴
「通告第二」配布さる。

通告第二

拜啓致候陳者前回申進候通り新校創設の計劃追々進捗致候に就き左記の地に財團法人東京醫學專門學校創立事務所を設置し醫學博士男爵佐藤進及醫學博士中濱東一郎の二氏を顧問に推薦し同時に醫學博士佐藤達次郎氏に一切の教務組織を請ひ同博士提督の下に擔任教授。

倫理學　得能文　獨逸語　文學士　小宮豐隆
獨逸語　道部順　仝及化學　竹內作次郎
解剖學　醫學博士　井上通夫　解剖學　醫學士　工藤喬三
生理學　醫學博士　井上達一　醫化學　醫學士　櫻木清耳
藥物學　醫學士　清水茂松　細菌學　醫學士　古屋芳雄

病理學　醫學博士　緒方知三郎　　內科學　醫學博士　中濱東一郎
內科學　醫學士　田澤鐐二　　仝　醫學士　池上作三
外科學　醫學博士　佐藤達次郎　　外科學　醫學博士　八代豊雄
仝　醫學士　山村正雄　　仝　醫學士　前田友助
產婦人科學　醫學博士　相馬又次郎（未定）　　眼科學　醫學博士　井上達二
法醫學　醫學士　淺田一　　衛生學　醫學士　古屋芳雄
精神病學　醫學博士　三宅鑛一　　小兒科學　醫學士　清水茂松
皮膚病學　醫學士　栗本定次郎　　耳鼻咽喉科　醫學博士　千葉眞一

を招聘し本月十一日始業式を擧げ引續き懇親會を開催致候間此段御諒承被下度更に及御通告候也

附記　新校講習料參拾圓（自九月至明年三月）及實習費拾五圓を本月廿五日迄に御拂込相成度候也

大正五年九月十三日

東京市牛込區神樂町二丁目廿六番地

東京醫學講習所

主幹　秋虎太郎

東京醫學專門學校創立委員

大角桂巖
高橋琢也
福本誠
寺尾亨
秋虎太郎

殿

追而豫て通知致し候通り本所事務に付ては自今秋虎太郎主幹として擔當可致候に付左樣御了知相成度候

○九月十九日（火）晴

順天堂外科手術室學生の爲に開放せらる。

○九月廿二日（金）晴

級長會議開催

○九月廿五日（月）

級長會議內容を發表し可決す。

決　議

一、本部學生は自治を精神とし剛健質實なる校風を發揚す可し。

二、學生は教務課の權威を尊重す可し。

イ、試驗問題、試驗範圍等に付絕對に容喙せざること。

ロ、試驗の採點並に及落に關しては絕對に容喙せざること。

ハ、總て情實を許さゞること

三、教授の講義並に教授上の事に付意見ある時は級長に申出づ可し。

四、學生にして學業を怠り或は操行不良なる者あるは級長は級を代表して忠告す。

五、級日誌を作製して級長は日々の主なる事項を記入す。以上

○十月二日（月）雨

午前十一時より一學年教室に於て學生大會を催す。

議長　安部、副議長　多久、法律問題に就ては波津久よく説明あり。次の如く決議す。

法律問題決議案

一、同志會醵金に關する磯部對吾等學生同志會々員間の民事訴訟を取り下げ新たに學生一同より刑事上にて告訴することを大正五年九月十一日午前十一時物理學校大講堂に於て出席人員の滿場一致を以て可決す。

一、同年同月十五日には物理學校にて各組に於て右問題に關する費用は在學生を以て負擔することゝ決定す。

一、右費用の費途に付ては法律係員に一任すること。

一、右問題に關する原告は係員を以て之に當つ以上更に一年級落伍者進級運動に對しては滿場一致を以てそれを拋棄せしむる事に決定したり。學生はその意見を述べて曰く「この學校はその主旨に於て日本醫專に於けるが如き惡弊を一掃したいと云ふにある、故に新校の第一歩に於て愼重なる態度を以て永遠の計を樹て他日に害を殘すが如き先例は多少の犧牲を拂つてもつくりたくない、從つて此問題も絕對にやめてもらいたい」

山本君大阪より上京したりとて一場の挨拶あり。

○十月七日（土）曇

午前八時十分第一の振鈴と共に學生は講堂に參集學生會々則の協議あり。四年生安部、會則草稿を朗讀し質問に應じ多少の修正を加へて可決、各役員の發表も同時に行ふ、九時散會。

秋、高橋、大角、福本諸先生、田澤、淸水、池上、道部、諸教授、山本仁君及びその紹介による紐育土地建物株式會社員津崎尙武氏等參集。

九時半第二回振鈴を以て學生會發會式を擧行演壇を北にし幔幕を引きまはしたる會場（一年級教室）に學生一同着席するや來賓臨場。秋先生、會長席に着かる。最初に安部立ちて開會の辭を述べり定されたる會則を朗讀す。次いで秋會長の挨拶、高橋先生の訓辭あり。津崎氏講演、福本先生演說にて午前の會

を終る。

午後一時再佐藤達次郎先生來會さる學生五分間演舌には、高畠、土志田、中村、須藤、柴田、原、永井、等雄辯をふるい學生會員としては佐藤淳三、山桝、の尺八、ヴァキオリン等あり、眞面目なる學生會なりき山本仁君寄贈の雜誌紐育と菓子一包とを分支し。三時半閉會

之を以て東京醫學講所の學生會は成立し、諸名士の遺志を繼いで剛健質實の發達を遂ぐ可き使命は吾人在學生の双肩にかゝれるなり。

學生會々則

私立東京醫學講習所學生會々則

第一條　本會ハ東京醫學講習所學生會ト稱ス

第二條　本會ノ事務所ヲ本所内ニ置ク

第三條　本會ノ目的ハ自治ヲ精神トシ會員相互ノ親和ヲ圖リ德操ヲ涵養シ智識ヲ交換シ體力ヲ練リ以テ剛健質實ナル校風ヲ發揚スルニアリ

第四條　本會ハ本所在學生ヲ以テ正會員(卒業生ヲ以テ特別會員)教授職員ヲ以テ名譽會員トス

第五條　本會ノ事業トシテ左ノ四部ヲ置ク

一、講演部　二、體育部　三、編輯部　四、會計部

第六條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、顧問　五名　本所創立首唱者ヲ推戴ス

二、會長　一名　本所創立首唱者ノ中ヨリ推戴ス

三、副會長　一名　名譽會員中ヨリ之ヲ選任ス

四、部　長　四　名　名譽會員中ヨリ之ヲ選任ス

五、常任委員　三十二名　正會員中ヨリ互選ニ依リテ之ヲ定ム

但シ本校各學年級ヨリ八名ノ比例トス

第七條 本會役員ノ任務ハ左ノ如シ

一、顧問ハ重要ナル會務ノ諮問ニ應ス

二、會長ハ會務ヲ總理ス

三、副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アル時ハ之ニ代ル

四、部長ハ部務ヲ管理ス

五、委員ハ各部ノ事務ヲ分掌ス

第八條 部長及委員ノ任期ハ一箇年トシ毎季四月之ヲ改選スルモノトス

但シ會務上必要アルトキハ臨時委員ヲ選任スルコトアルベシ

第九條 役員任期中缺員ヲ生ジタル場合ハ委員合議ノ上其缺ヲ補フモノトス

第十條 本會ノ經費ハ委員ノ豫算ニヨリテ會長之ヲ定ム

第十一條 正會員ノ會費ハ本所學則第四十三條ノ規定ニヨリ納付シタル金額ヲ以テ之ニ當ツ

第十二條 特別會員ハ卒業後三十日以内ニ本會基金トシテ金參圓ヲ寄附スルノ義務アルモノトス

第十三條 本會ニ對スル收入金ハ會長ノ名義ヲ以テ確實ナル銀行ニ預ケ入ルヽモノトス

第十四條 本會ハ毎年二回(五月、十二月)會報ヲ發刊シ之ヲ會員ニ頒布スルモノトス

第十五條 會計及庶務ノ報告ハ會報ヲ以テス

第十六條 本會々報ニハ其都度博識名望ノ士ニ依囑シ有益ナル記事論説ヲ掲ゲ智識練磨ノ好資料タラシム

第十七條　本會ハ毎年一回春季總會及秋季運動會ト隔月一回ノ通常會ヲ開クモノトス但シ通常會ハ時宜ニヨリ開カザルコトアルベク又臨時之ヲ開クコトアルベシ

第十八條　本會各部ノ重要ナル議事及本會々則ノ變更ハ正會員出席者三分ノ二以上ノ協賛ヲ經テ決スルモノトス

第十九條　本會々議ノ議長ハ會長之ニ當ルモノトス
但シ會長差支アル時ハ副會長之ニ代ル

第二十條　本會細則ハ役員會ノ決議ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

附則

本會則ハ大正五年十月七日ヨリ之ヲ施行ス

東京醫學講習所並ビニ其レニ準ズル名稱ハ東京醫學專門學校設立ト共ニ之ヲ改ムルモノトス

學生會役員

（大正五年度）

顧問　大角先生　高橋先生　福本先生　寺尾先生
佐藤達次郎先生

會長　秋先生

副會長　缺

編輯部　醫學部長　清水先生　文藝部長　小宮豐隆先生

員

委員　安部達人　上村透　宇津木斌

關谷斐三郎　本保秀　市原經太郎

前田燐之助　野見山孫七　馬詰嘉吉

柴田萬吉　長委三美　大出富吉

奥秋儀一　河野正夫　林禮爾

丸茂俊懋

體育部　部長前田先生

委員　佐藤淳三　古川道之助　菊地秋水

石川光雄　早川一郎　吉澤晃

袋野元一　平山武威

講演部　部長田澤先生

委員　高畠秀勝　土志田政治　中川兵次

石川内藏之助　並河元勝　原三郎

野尻芳松　横田稔

會計部　部長池上先生

委員　松谷正　多久俊　藤本竹平

大森彦馬　藤中正　佐々木篤行

永井誠夫　高橋進

（安部委員記）

雜錄

影と聲

上村とほる

義士と學生團

華奢風流の元祿時代に赤穗の小藩が誠忠日月を貫く四十七人の義士を出したることは抑も偶然ではなかつた。內匠頭長矩の祖父長直の明君であつたことゝ、當時海內第一の英傑山鹿素行を侯が前後二度に涉り賓師の禮を以て惹着けたことが遠因をなしてゐる。此の大豪傑が十九年間程赤穗に在つて、自個の兵法と經學とを以て一藩の士人を鼓舞作興した。而して素行は去るに臨み衷心長直の好誼を謝し『殿には素行が頑愚を捨てさせられず國士を以て待たせられたる御恩の程は報い奉りやうもおはさぬ。但し責めては萬分の一の御奉公にもと、日頃から聊か心をこめて御家臣の敎育を力め置きましたれば、將來萬一緩急の場合など生じ申さば、思し當らせられる節もおはさう歟』といつた。偉人の薰陶は彼が豫言を適中せしめた。

日本醫學專門學校は心理學者として有名なる高島平三郎氏が倫理學を擔任して居つた。然るに學監にして理事なる、且事實學校經營者なる磯部檢三氏が學生に對する處置の誠意を缺きし爲め古今未曾有の學校騷動を惹起して滿天下に其の醜名を曝した。人を育英するものゝ何ぞ夫れ難きやである。

義徒の信條は『君父の仇は共に天を戴かず』『萬山不重君恩重。一髮不輕我命輕』で盡きる。主家の兇變は大なる悲劇で、彼等の運命も亦悲劇で一貫する。吾々學生團の立脚地は『不義を惡む』と雖も、單に磯部某なるものゝ奸譎と、欺謾に依りて受けたる災害復酬のみではない。吾々は僞敎育者の下を去りて、淨土により大きく生きんとするにある。夏目漱石先生が『墓場までが喜劇で、墓場から先が悲劇である』と云はれた。赤穗浪士はその的とするところは仇の首級であつた。復讐が凡であつた。其の延引するのを憤慨して本所林町に

借宅を構へ、號して長江長左衛門と稱し、鋭意上野介の動作を伺つた堀部安兵衛の如きは、復讐專門家の過激黨であつた。爛熟せる文明の結果は遂に歐洲の戰禍を生み、國家百年の計を立つるに最も困難なる秋に際し、吾々は單に欺謾者を憎み彼が自滅を以て快を叫び、吾が事足れりと爲すものであろうか。又新たなる學校によりて救濟され、新校設立の曙光見ゆなどの言によりて安心の笑を洩らすものであろうか。義士と學生團とは、原より比ぶべくもないが、根本より差異のあるのを認めなければならぬ。高橋先生の言はれた悲劇と喜劇とは、尙春秋に富む吾人青年の、墓場に行くまでに爲すべきことが數へ切れない、半歲の奮鬪を忘れずば當時の緊張せる心を以て學生の意氣を續けられんことを望まれたのであろうと思はれる。卽ち義士は死を前提とし、吾人は生を前提とする愚案ずるに義士の眞面目は討入の刹那に非ずやがて細川、松平、毛利、水野の四家へ御預けになり翌年二月四日切腹の當日まで、飽くまで彼等が面目を保持して傷つけなかつた行動にあろうと思ふ

曠世の烈士が英魂碧落に歸して萬世に名を揚ぐ我等は生きて耻を天下に殘すことなくんば幸であろう。若し我等が舉の正と義に立てりと自覺せるならば、君國に身を殉せし義徒の終始一貫せる壯擧に感奮興起する處なくして可ならんやである。

醜類一束

四十七の義士を出せる赤穗浪士も亦七十四の醜夫を出した。初めより義盟に入らざる者はもとより論外だが、一度署名血判して事　困難なるを察し逃れ去つたものが義士の數を顚倒して、義なく耻なき七十四醜夫を出したのは奇なる對照である

神崎與五郎が草した『憤論』の一節に

『彼等奴輩が一時義盟に就きたるは、偏に亡君の貴弟世に出でらるゝとの浮說ありしに依りてなり。赤穗にありて世々君祿を食みながら、侯家の滅亡に會し不善を爲す者山の如く潮の如しと雖も是等は固より論ずるに足らず。當初よりして義盟の員數に入らざりしものは是れ頑弱の徒なるのみ既に一たび之に入り、略同志の消息を知り、而る後ち逃れたる者に至りては、罪惡實に前者に倍せ

り。彼等蹈天蹐地すと雖も、宇宙の神靈豈之を宥し給はんや。天下後世其れ之を思ひ、其れ之を戒めよや』（福本先生意譯）と言つた。

日本醫專より總退學を決行せる際一時加盟しながら、九月尙前途暗膽たる時に當り、背盟破約せる背德者も丁度之に似てゐる。

横川勘平の書中にも

『去夏籠城之覺悟の節、臆病を働き、先非を悔ひ、大學殿善惡を窺ひ、樣々申分いたし、テダテを以て山科內藏助へ參り、首を下げ手を束ね、同志の人數に入り、又今度之首尾を恐れ、すみやかに逃る大臆病者……奥野將監、河村傳兵衛、此兩人申は、いかに人か犬と申しても、死はかなしふ候間、得下り申さずと斷申す。笑止かな〳〵』

と嘲けつた。彼等醜類の末路は何れも悲慘なものであつた。學生團の團結に多大の障害を與へた彼の敗德者流は如何なるものであろう。一年半年早く成業せりとて、永く不義の人となり友を失ひ世を狹くす、殘生の憂苦、懊惱、悔恨、慙愧は自ら招いだとは云へ、憐むべき輩ではないか。

ストライキ人國記

五月一日大町桂月先生の所謂模範ストライキを擧行してから、尤も痛切に感じたのは『國亂れて忠臣表はれ、家貧にして孝子出ず』の言葉であつた。平日談笑の間或は敎場にてノートに忙しき時は同じく平凡の人として相互してゐる。然るに一度非常時に際しては各自の隱れたる鋭鋒が隨所に表はれ、所謂『不逢盤根錯節。不知利器』で人材が群出する。余は此の紛擾の時、明治維新の大業が重に薩長土の人々に仍つて爲された事を思ひ出したそれは半歲に涉る奮鬪中花形役者を勤めたのは多くは其の地方の人々である。長州よりは山根磯部の兩氏を出したるが、學生よりは村上忠愛君の如き熱血兒を出してゐる。土州は喋舌家の多い所であるが、德島縣からは辯論の勇者として緒方、尾形の二君を出した。然し關基の如き異分子の出たのは遺憾であつた。鹿兒島縣には善惡二樣の氣質がある。然し鄕黨心の强い所なので迫田君に殉じて步調を一にし、佐多君の如き遊擊の士を待たのは學生團の幸福であつた。

九州は概して人物が多い樣である。宮崎縣の小庄次郎、武田光麿、長崎縣の中村丈夫、柴田萬吉大分縣には波久津　重石の如き。玄洋社を以て名の高い福岡縣は、有名なる先輩に富むと共に、三輪、上野兩君やその他を出してゐる。中國地方は概して奮はない。中央に集まつてる學生の中で、言葉に訛りのあるのは山陰山陽四國の人々である東北は元來ズーズー辨の本場で發音に聞き苦しい所があるが、それでも強いて標準語を操れない事もない。中國の人は平氣である。それ丈け反感を受け易い。然し廣島縣の渡邊君や長君、岡山縣の山本君、島根縣の後藤吉勇君などは特記すべき人達であろう。

關西人は一番イヤな氣風を有してゐる。敢て渦中に入ろうともせず、傍觀者と云ふ程の冷靜も見えない。『長袖、草履しげき秋宮人の月の宴、それ脆弱の古都にして、男子の群をこゝに見る』の悌なきにしも非ずである。

北陸道は加能越を初め、新潟かけて會員も隆盛である。然し、荒海や佐渡に横たふ天の川の慨見えず關西地方の影響が、言語に風俗にありて遂に第一回の變節者××、第二回の變節者△△と云ふ主魁を出した。男兒に逡巡狐疑は耻である。それが此地方に最も多い。高畠君、本保君の如きは蓋し稀有なるものであろう。

同じ日本海に面して更に進めば兩羽である。然し山形と秋田とは氣質がまるで異なる。秋田縣は北陸系を引いておつて、先年まで土佐が隨一であつた酒の密釀造者は今は秋田縣が日本一である。而して各家に六法全書を備へてる土地である。山形縣は貧富の差少なく遊學生の多いこと鹿兒島縣に次ぐ、維新前までは數多の小藩によりて分轄されてゐたので、鄕土に對する執着が強い。それが他に在りては團結心の堅固となる。今回の指定運動にも最後まで踏み止つたのは、兩羽初め東北人が多い。

維新の創業が南國の人々によつて爲されたと初めにいつたが、言訥にして行鈍に見ゆる東北人は歷史的には侵略され從服され、地理的には僻遠に位す。自然人後に隱れざるを得ない。されば表面

に現れなくとも、半年の奮鬪に中堅を以て重要視されたのは言ふまでもなかろう。

關東地方は喧嘩に早い。就中、茨木、千葉の一部がそうで群馬縣は所謂長脇刀の氣風が殘つてる。然し大勢を動かすに足る迄には行かぬらしい。東京府を中心として群馬埼玉縣には可なり人物も居つた今回の擧で栃木縣が最も多く醜類を出し、神奈川靜岡兩縣は尤も平凡であつた。

以上は人國記の總括であるが、最初に九州により烽火は上げられ關東之に和し、各縣人の簇立を見るに至つた。その經過中に各種の分子は陶冶され、九月開校を見る迄四百餘名の團結が會員の自發によりて、保たれる事は、卷頭縣人名簿に長く紀念となつて殘つたのである。(完)

都に殘れる友へ

餓鬼路

昨日鳴戸海峽の六時間は夢の間、夕陽が傾いたと思つて船室から覗いて見たら船は港の中でした『エンヤラコラサ』と妙に節付けた聲色、黑い節立つた腕を持つた水夫に太い綱が岸へ投げられたこれで四國の一角と關係した譯サ。下船したら小松島。

一昨晩は態々驛迄御見送下され有難ふ、汽車が動き出してから他の人は『左樣なら』『御機嫌宜う』とか『御無事で』とか云つて出來る丈情を(愛情、友情、眞情)表す爲に帽子を振つたりハンカチを振つて居るのに君の『少しく賢くなつて來い』には面食つたよ。

醒まされ勝の夏の夜の夢、ましてや汽車の三等數千の夢を乘せて、闇の中を、賢も愚も、美も醜も男も女も、長も幼も、富も貧も、黃人も白人も黑人も……皆同速力で走る、進む。汽車は一時に沼津に停りました。破れし夢にヒシ〳〵と別離の哀情を俱ふ、額は煤煙と汗と脂肪でニチヤ〳〵する、ただ驛舍の電燈が佗びしげにガラスからガラスに映て居る。沼津!!!沼津!!の聲に釣り込まれて涙がさしぐまれます。さしぐまれたまゝ淡い光を眺めて居たら、それからそれへと……

縣人會主任として後事を依托され乍ら歸鄉する不義理、友情や愛情から四十日餘り離れなければならぬ哀情の苦悶の爲に胸に込み上げた。七月廿九日の父よりの來信に曰く

『是迄久敷休校致しまだ其上夏休にも歸宅致さず候へども當方にては斯る馬鹿げた金子送附致す事相叶はず候間、縣人諸子には親が病氣とでも申述べ主任辭退の上卽刻歸鄉致す可く候』

純潔なれど願ふ可き筈の父が子に虛僞を强ひ、正義よりも金と云ふ親、そして子の愛に溺ばれて居る老父の無理解を思ふと益々胸が暗くなつた。手當り次弟に投げ出し度くなる、泣き度くも怒り出し度くもなつた。然し歸宅してからの父の顏を想像した時にバッタリと悄然ゲた。『親父は憤つて居るだらうなあ』『何と云つて辯解仕樣？』『正義を眞甲に振り翳して革命を起した僕だが、頑固の親金主の父(これは父の慣用語で、『貴樣は生意氣になつたぞ』と云ふ言葉の次に好むで父が使用する言である)と云ふ者には正義とか武士道、犧牲とかを千百竝べ立てゝも說明が出來まい』等思つて居る內に汽車は暗黑の裡を二點、四點、三點と光を拾つては捨て、捨てゝは拾つて走り繼けた。

昨夜は小松島の一旅舍にて宿泊。舊曆七夕樣で家々の軒には笹短冊で飾られて居た。旅の疲れで床に就かんとしたら女中共が遊びに來ました。

十時迄、まだ田舍芝居の柏子木がカチ〳〵と響く。

本日早朝歸宅、車上の三時間、山又山、搖られながら、父に對する辯解法、父の顏、村の人に遇ふ耻かしさ等を想像すると可成的車の遲着する事を願つた、遂に歸宅した。

案ずるよりも產むが安かつた。父も母も兄も妹も皆喜びの溢れる樣な顏をして居た。『よく歸つた』『汽車は無事であつたか？』『何時東京を立つた』と右からも左からも矢繼早の質問で返答に忙がしかつた。那麼嚴しい手紙を呉れた父は僕の顏が見たかつたのだらう。それにしても嬉しいと云ふよりも年毎に白髮が殖えて行く父が氣の毒に思へた。だが嵐の前の靜寂が想像されて氣味が惡い。

家內皆健全、殊に十五の妹は健全と云はんより

も頑健、肌脱ぎ湯を使つて居るのを見た、印度歸りと兄妹仲間で尊稱を頂戴して居る丈に隨分黑いそれでも白粉を塗つたら見違へる程よくなつた、女らしくなつて來た。歸來早々井戸から水を酌んでは庭木に撒けた、天日療法と稱して眞裸體になつて親父の前で流行唄を歌ひ乍ら庭掃除もした。妹達はクス〳〵笑つて居るが僕の元氣を承認しない譯には行かぬ。晝過頑健の妹に蜂の巢を六ッ許り取つて貰つて魚を釣りに出掛けた。卅尾程雜魚を釣つたら餌が盡きる、仕方がなく歸宅した。直ぐの妹は笑ひ乍ら見渡す所皆青、青い山、青い空青い水、青い田、青い畠、青い原、歌には餘り青過ぎる、田舍の天地は一切が理屈抜きだ、それは自然が證明して居る、否今日一日の僕の顏色の變化で說明して居る。

夕方隣人が

『御無事でお目出度ふ御座います……よくお歸りでした』と云つて香魚を五十尾餘り呉れた。

『東京の方の景氣は如何ですか?』

此質問は歸省する度毎に五六度は逢着する言葉である。

『何時御卒業ですか?』

『まだ是れからですよ』と逃げた。

『最う御診察はお上手になられたでせうネ』

私に取つては話が突飛から突飛に飛ぶ

『どうしまして』と又濁ごす隣人に取つて私の答は意外から意外に外れて行く。

『御冗談でせう……何所で御開業ですか』と遠慮して居ると見て取つた隣人は河岸を變へて大飛車に出る。

桂花君『文明人は結論と急ぐ』と、田舍の人も結論を急ぐ、結論から結論へ、突飛とは結論を意味す。正義と絶叫し、勝利を高唱するのも僕達である、それと同時に寄る可き學校のない浪人も我等でなくてはならぬ。正義を唱へ、勝利を歌ふには是非「天下の浪人である、私は乞食である』と告白した後であらねばならぬ。

結論の方向に話す人と遠ざからんとする者との會話には摩擦が生ずる、澁滯がある。其人は物足りなげな顏をして歸つて行く、僕の腋窩は冷汗で

ビショ濡れ。父は初めから終り迄苦い顏して（時には苦笑した、然し其笑も結局は苦と云ふ字が付いて居る）聞いて居た。

磯部引退、廢校、學生後援會、休暇、新校設立認定、指定と我等四百餘名も結論を急いだ。急ぐ身と急がる身、待つ身と待たるる身、『待たる身となつても待つ身になるな』と云ふが、待たるゝ身も隨分辛いよ。

夕食の時腫物にメスが來た。今朝安心は矢張嵐の前の靜寂に過ぎなかつた、嵐の前の恐怖の狀態は僕の日誌の七月廿九日に這う書いてある。

『……打ちつける樣なシブキが硝子戸に白く散る、散つて流るる雨だれの中に窓を洩れた電燈が赤くうねつて流れて行く、怒濤の樣に泳いだ谷中日暮里駒込の林も森も夜の恐怖に包まれて深い〳〵遠方近方の唸聲に止めた。暫く靜つた嵐は前の林に吸ひ込まれた程靜寂だ、蟲の音は林が、嵐が吐息する度毎にジク〳〵と薄れて行く恁麼した靜寂は物凄い程である、來る可き嵐の强さを想像して女達は襟を合せた。窪地を隔てゝ前も横も林だ、寺だ、そうだ墓場だ……

跡絶つゝ鳴く虫の聲も、物思ひに沈んだ林の吐息もひつたくる樣にして嵐が若い女達に林の吐息を投げつけた。『吁々』と叫び解を立てた女達は互に膝をつきつけ恐怖に戰慄いた。上野の森から捲き起した嵐は谷中の杜は吹き込んで遠く〳〵駒込の方へ飛び去つた……

桂花君、これは一週間ばかし前の洪水の日の文の一節だ、丁度僕は今、恁麼狀態にある。隣人と云ふ嵐は去つた。夕食迄の間が嵐の靜寂である、然し先刻の會話を聞いてから以來の父の顏の雲の祖徠で來る可き嵐の恐怖が想像される。

『お前も詰らん學校へ入學したもんだネ』

『ハイ』と辭優しく柳に風と逃げる。

『騷動なんか起して……千里の道も一里行つたかと思へばお父さんも嬉しいが……一里どころかお前これから行けるか行けんか判らん。今迄お前に送金するのは全然大橋から金を束にして川に投げ込む樣に思はれた』と前の嵐が手ごたえなかつたので今度は吹き揉み吹き千切る可く襲來した。

『學校が惡かつたんですから仕方がありません』

『那麼學校へ入學したのが惡い、好い學校は他に多くさんあるよ』と少し手がかりが出來たのでの

しかゝつて來た。

『でも騷動〳〵とおつしやるが金で買はれない好い經驗をしましたよ。『若い時の苦勞は買うていもせい』と云ふ言があります。……失敗は成功の基ですからネ』と苦しさのまぎれに無茶苦茶にはね返した。

『苦勞も苦勞によるよ』と重く深く來た。

桂花君、我等は『正義に奮起し、正義に邁進し、正義に終結せん』と萬人に表明し、社會に呼號した。それが肉親の父に正義の擧を誇つてよいのかはた謝罪しなければならないのか判らない。社會に宣する言葉と父に話す言葉と二通りに使ひ別けをしなければならぬ時代に生まれた青年は實に苦しい、人間の終局は死である、墳墓であると知つたら恁麼に迄終局を急ぐまいものを。

恁麼時には父の爲に、僕等の爲に漱石先生の猫の言を引用したくなる。曰く、

『好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ないと決めるのが一番安心を得る近道だ。昨日貰つた花嫁が今日死なんとも限らないが聳殿は玉椿八千代も等と目出度事を並べて心配らしい顏もせんではないが、心配せんのは、心配する價値がないからではない、いくら心配したつて法がつかないからである』

舊八日の月は空高く澄んで居る、蟲はたえず鳴く、兄と弟は前の涼臺で線香花火をやつて居る。火が吐息する樣な東京の夜に思ひ較べても在京の諸兄の困難が思ひやられる。お諏訪樣の大祭迄には是非上京する考だ、山車やお神樂を見たいのではない早く君と語り度い爲ば。上文を讀んだ君は少くとも理屈ぽい君は、前半と後半の文章の差異をせめるだらう。それは僕の刻々と氣分の變化を示したものと思て戴き度い。後援會委員の諸君によろしく。學校の經過も時には知らして呉れ給へ世間も大部靜になつたからこれで筆を擱く、乍末文貴兄の健康を祈る。

（五、八、五）

浮世の外から

迫田四五六

六月十五日の朝であつた鈴本亭會合の席上で突然舊四年中の或一部の者が團結を破つて受驗すると云ふ報告があつた。其氏名は曰く瓜生、奥川、花村、山田、關基等十七八名である。然も彼等は皆磯部攻擊の急先鋒として奮鬪した大立物共なのだ、處が利に走り已を益し義を棄て道を躙蹂するに何等躊躇せざる彼等は、何時の間にか敵に降り其膝下に低頭するに至たのだ。是を聞いた一同が、切齒扼腕悲憤慷慨其極に達したのも無理なき事である。男兒か一度誓ひ血と涙を以て築きし清き團結を破り、正義に背きし其罪赦す可らず、生して置くな宜敷しく葬去れと叫ぶのも當然である。而も義の威光に恥ぢてか恐れてか、病院の一室に警官護衛での籠城振りは餘所目にも氣の毒の至り、斯樣な試驗は前古未曾有怒らく未來永刦あるまい、未開國の蠻地にて觀そうな現象で帝都の眞中で大正の聖代に行れ得べき事でない、寧ろ滑稽な話だ彼等は正義には背いたが法律には反しない、若し吾々に何とでもする者があつたならば其等の首は早速飛ぶであらうと、大意張の體だ。全く人面獸心と云ふより外ない。十八名の中に余の同縣人某が有る事を聞た余は全く驚嘆し憤慨した。そして同縣人二十七名は早速打連立て其等の宿舍たる病院を訪ひ、某に會見し大いに意見の交換をやらうと云ふ事になつた。一同が連立つて行つて見ると全く報告通りである。彼等は二階に陣取つて何やら談笑して居る、多分已の不德義の手柄話を誇り合ふのだろう、余は思はず激昂した、立關には理事の吾妻某番人の役目おさおさ怠りない、警官四名は物々しく警戒して居る、殺氣は既に漲つた、縣人を代表して森君と余とが某氏會見の役を仰せつかつた、其責任の重大なる勿論である。早速談判は始つた。余『學生が居ますか』吾妻『誰も居ないよ』余『二階に居る筈です、私は某に是非面會したい事がありますからちよつて呼んで下さい』吾妻『居ない居ない學校に行つて聞け』、余『居るのに居ないとは何んです』吾妻『此處に來るんちや

ない向へ行け』辭は既に荒かつた、仕方がないので其場は去つたが、早くも余の談判が奴等に聞えたとみえて二階を右往左往し、窓から顏を交々出して是見よがしに見下して居る。花村泉と云ふ壯士俳優の出來損こないの如き名のあの鮑髭を捻つて見せる其樣の憎らしさ、余は遂に憤慨其極に達し前後を辨ずる間もなく二階に馳上つた。勿論森君も後について居た、廊下には關基等數名の者窓より見下し、後に殘つた縣人の樣子をうかがつて居る。余が彼等の後に立つても尙ほ氣付かざる程其程熱心だ。余はいきなり『何して居る』と大喝一聲直ちに鐵拳一本をくらわした、彼等は不意打にびつくり仰天何處ともなく逃去つた。此一幕と共に余の心神は統一を缺いてしまつた。然し室に飛入つた時に十數名の者共が寢轉んで余を嘲笑して居た樣の憎らしかつた事は、一生忘れまい。余は某に要件を述べ余の後に來れと命じ室を出る時、其等の中の大將然として寢臺の上に立つて居た瓜生に向ひ何やら嚇文句を竝べて立退つた。事件は此迄である僅か此間數分を要しない、其が家屋侵入とか、脅喝とか、毆打とかの名で警察に引張られ檢事局護送となり遂ひに裁判となると云ふ余の一生涯を通じて、又とあるまじき經驗を得るに至つた。問題とならんとは豫期しなかつた。之れも僕等を社會主義者か暴民の如く警視廳に上申してゐた△△等の奸策だ。駒込警察で種々取調べた上直ちに留置場に入れられた。纔に二疊敷位の暗室の樣な板間に、先客四名が小さくなつて蹲つて居る。蚊と蚤と虱の攻擊は早速始つた、其に蒸暑さと異樣の臭氣が一緒になつて攻立る、夜の十二時頃森がひよつと姿を現し他の室に入れられた、勿論話は出來ないが同罪で調べられたのだらう。夜が明ると友人達が來訪して色々面倒見てくれた、辨當の差入から紙手拭小使金迄置てくれた。實は前夜夕飯を食べないので蕎麥を注文するに僅か六錢しか持たないので、カケソバ二を食べたのみなのだ。友達は全く有難いものである、丁度三日目の朝警官が余等に向ひ、本日警視廳に送るから仕度せよと命じた。其時既に外には喧しい戰鬪艦の音が聞く(囚人が護送の自轉車を呼ぶ別名)早速手

錠は箝られ繩は掛けられた、まるで重罪犯人扱ひである。產れて始めて自動車乘だが餘り氣持の良いものでもない、唯森君と顏を合したのが何んとなく嬉しい、話が出來ないので眼で『トウトウヤラレタネ』と合圖すると、何か意味ありげな眼付した。警視廳で取調べの上直に檢事局に送られた檢事は嚴肅な態度で暫く調べられたが、今日は歸宅してよいと云ふ赦を得た。二人の喜びつたらない、久々振話の出來る身となつたのだ、然し其後二三日間は色々取調べを受けた。瓜生も關も調べられた。相變らず警官護衛での出頭である。最後の廿日になつて檢事は余に向ひ、君は之から監獄に送ると云つて側の電鈴を鳴したが、つかつかと來た監手は直ちに警視廳に護送したのである。此處では正式に指紋の相書寫眞をとられた。留置場は可なり廣い、然し外觀の堂々たる洋館に似ず半地下室の陰氣な室だ、同室人七名皆人相の惡い奴ばかしである。余を始めは惰落書生位に考へて居たらしかつたが、段々事件を知り新聞記事など想起して大いに尊敬するに至つた、五百の親分と思惟したらしい、此處の二日間の生活がすむと愈法廷に立つ日は來た、多くの罪人と珠數繫ぎになり簑傘冠つた姿は可笑とも情ないとも云はれない。同僚諸兄が成行如何にと居列らばれた樣を見た時は、流石に五尺有半の此男も泣いた。嚴しい法官の前に立つと既に身は凍つてしもう。此日は裁判長の尋問あつて、愈々東京監獄收監と云ふ事になつた。獄屋生活の事は餘り多くを云ふ事を憚るけれども、第一に着物は青い物に着換させられ、胸に番號をつけられた。余は四五六だ、之が余の姓名の代理をつとめる。室は三疊敷の獨居房で中々頑丈に出來て居る、然し便所もあれば臺所兼洗面所と云つた樣な處もある、高い處に鐵窓があつて微かに室を明くしてくれて、例の男三郎を泣かした事も思れる。夜八時の就寢に朝五時の起床其に三度の食事と二十分の運動の外、何等なす事はない、唯面會人があれば其に五分間の談話を赦される、其が何より嬉しく何よりの慰藉となつた。然したつた五分間では何から先に聞いてよいか何を後に話すべきか甚だ物足りない、辯護士の方や小

野君山本君等多くの友達が幾度も來訪された、此等の人には團結の如何は何より先に聞た事である其の時の余の頭には其より外に何者もなかつたのであつた。其でも冷き鐵窓の下に頭をつけて寢についた時、遙か遠く汽笛の音聞ては、思を故郷に走らせ枕を潤した事もあつた。又豆腐屋の笛は『もう食事前だな』と大低の時聞の見當をつける滑稽もあつた。友達が差入てくれた書は直ちに讀盡し廣告迄讀んだ、其れでも尙ほ淋いので塵紙で紙細工などして暮した事もある、嘗て板垣伯が叫んで『板垣死すとも自由は死せず』の句を考出して、『迫田縛らるとも正義は縛すべからず』などと眞似して、何か大發見した樣に獨りで喜び獨りで痛快がつた事もある。斯くして何日かの獄屋生活を續けた其間に、三度法廷に立つた檢事が刑六ケ月を要求し一年の執行猶豫の論告があつた時は、流石に肺肝を刳られる樣な氣持がした。それでも無事に務を卒へて出監の夜、知己友人や各團體の代表者の七八十名が出迎へられ、厚き握手の禮をされた時の愉快は到底余の拙筆につくされない。斯くして余は再び靑天白日の身となつたのである。此間幾多の痛苦もあり、悲慘もあつた。然し一生又と得られぬ修養をなし經驗を得たのは。何より嬉しい、余の兄なんか反つて羨しがつて居る。

最後に記したいのは、斯く多くの人の反感を買ひ、正義を棄て、惡黨に組した瓜生、奥川等は遂に醫術開業試驗には合格しなかつたそうだ。瓜生は裁判長の尋問に答へて曰く、私は早く醫者になつて負債を返すのだと、云つたが其譯にゆくまい可愛想に。

追憶

梶谷馨

『兄さんが、こんな立場だつたら、腹を切つて呉れますか？』讀み終つた新聞を、下に置いて、突然尊れたが、

『さうだなあ……』と、考えたきり、兄は何とも云はなかつた。それは丁度、東京日日新聞が、波津久兄の御尊父の、死を傳へた六月十八日、雨上りの空に、雲行が、亂れて、蒸し暑い夕方であつた。

正を叫び、義を唱へ、惡鬼と戰ひつゝ五十日余、來し方を顧れば、怒濤逆卷きて、海若の狂ふが如く、前途は、萬里遙かにして、

星の光の、それすらも見えない時、ひきつゞいて來た、此の悲報は、如何に、四百の吾々を、興奮させたらう。

より深く、刻み込まれる、悲憤と、慷慨の念は、只に、自分達の、胸に於て、のみではなかつたのか、兄は、その時こんな事も、云つた。

此間は、警視廳へ、引かれたつて人もあるさうだし、又、こんな悲慘な事件も、あるのだから、卑怯な眞似は、決してするな。たとひ、この儘、醫者にはなれなくつても、故郷への言譯は、俺がしてやる。

と、勵した態度の眞面目さが、恐ろしい位だつた。

元より、人に、敎えられる迄もない、共に奮い起つてから、曾つて動搖した、事とてもなく、名を恥ぢ、義を慕ふ心は、四百の諸兄に、劣らぬものと信じ乍ら、ともすれば、誤られ易い無口な自分達は、不甲斐無いと知りつゝも『不言實行』の四字を、心を慰安するせめての、言葉として、何日かは此決心を、示し合ふ日が來るであらうと、よしない、賴みを、たよりに、十日は暮し、廿日が迄り、若葉の露も馨る、六月に入つて、半ともなつた。その十五日の、暮方に、突然、自分達の心は、新紙の數行の文字に、驚かされた。

『健兒の意氣の發露』これ位い痛快だ、と考へた事は、なかつたが、それも一瞬時に消え、續いて起る、いろんな連想が、次第に、不安の色を、濃くして行つた。

殊に、其夜は、生溫い南風が、植込の木木を騷がして、氣味惡く、東都の空は更け沈み、不吉な前兆ではないかとさへ、思はれでならなかつた。

それから、二日ばかり後なのだまだ、その不安の念の、晴れ切らない間に、九州の波津久君の御尊父の自刄が涙をもたらせて、傳はつた。

幾度か誤りだらうかとも、考へたが、愈々、事實と知つた時、鋭い針に、胸を貫かれた感のあつたのは、敢て自分一人ではなかつたであらう。

命を捨てゝも、とは人のよく放つ言であつても、行ふに難い此事、惜しい命を、正義の爲とは云へ散る花露と、競はれし心、その心に、はぐくまれた人の胸中は、偶ぶにさへも苦しかつた。築紫の山の、山時鳥の、血に啼く聲は繁かつたらう。

男子の意氣地に、鐵窓冷たく、つれなき夢を結ばる君と、歸らぬ旅路に、父上と別れて、紅涙に袖濡らるゝ君。

この二つの犧牲は、種類こそ異れ、その源は一つ、偶ぶも同じ血汐の色の涙であつた。その大なれば大なる程、自分たちの、形體的に現はれさふもない決心が、見すぼらしく、貧弱に思はれてならなかつた、と。同時に、興奮した自分達の後を擁して居る人人の胸にも、偉大なる何物かを打ち込んで、深刻な同情は沸き、やがてはそれがある決心と姿を變へて行つた。

悲しみ深い骨肉の間柄も、全然、別人かと疑はれる迄、眞面目に勵されたのも、その決心と同情に依るに他ならないのは、明な事であつた。

四百名餘の者は、斯ふした中にもまれて居たけれども、自分たちに關係のない世の多くの人は、海に、山に、眞夏を遊け、歡樂

の夢を追つて、走つた。その傾りさへ皮肉な面當（ツラアテ）と、思はれる位、純な心も荒んで居た。苦しい境遇にいぢけて來た。しかし、遂に日夜、諸兄の東奔西走を意味あらしめた時の微笑は、炎暑の候を、戰ひ通した、九月中旬、隅田河畔の勝利の宴の杯に、浮んだ。

凋落の秋も、淋しく暮れて行く今　靜に思ひ廻らせば、過去半ケ年の夢は、思ひ出多い、痛ましいものである。

別けても、いろんなヒンテルケルンドの前に、繰り擴げらるる追憶の中の、この二頁（ページ）は、今なほ涙に濕つて、鮮な印象を止めて居る。

駒より牛に（日記より）

左武郎

日記を讀み返して見ると恐しいやうな悲いやうな狂人じみた生活の後が忍ばれる。今日は立太子祝典である昨年の今月十一日は卽位の大典があつて已に一年となる。

大典より小典迄の一循環、三百六十五日、この間が我々四百名の悲慘な生活の時間である。思ふだけでも戰慄するやうな過去が浮んで來る、これを忠實に系統的に書くには既に熱が失せてしまつた、私としては事件對自己の立場から記して見ることにする。第一回の公開演說の時、大町桂月先生から模範ストライキと賞讚され、私も紛擾などと言はず模範ストライキと呼ぶことにする。思ふだけでも毛穴が立つやうなあの五月六月當時の有樣を、すべて新らしい過去といふ陰影、勝利の歡喜といふ背景にかくして、これを美化しこれを考へて見たくもなることもある。この筆法から手帳の走り書き日記帳古手紙などを辿つて、私自身として特に心に殘つて居ることのみ斷片的に記すことにする。

駒込にある前校日醫校は今もこのペンを走らせて居るこの日暮里高臺から、眼下に見えて居る——昔の學校といふ感があるのみで何の印象もない。があの校舍で泣いたり指を切つたりしたことを思ふと馬鹿〳〵しくもなる、又我々四百名が振り捨てた學校に、今更新しく入學した人々のあることを思ふと、何となく世の中の矛盾が思はる。敢て校舍などに對しては今更憎惡の念も起らないが、自分等が通つた當時からの雨ざらしの半築の建物は相變らず裸體で雨ざらしになつて居る。新校の假教場たる物理學校は牛込にある、近々新築の校舍に移る迄借家住居の客である、卽ち駒込から牛込に假つたのである、牛から牛に移り換へたわけである、住むべき家に雨が漏り雨の漏らない家に入れはこれが借住居である、或友人は『假の宿とは言ひながら、駒から牛に乘り代へて、のろくも確く牛に引かれて善行寺參り』と、言つたこの儘を拜借して『駒から牛に』と題名した。さて善行寺は新校舍の建つべき地である、こゝに我々は孜々として勉めこゝに始めて往生すべきである。この生活が過去一年間我々の悲慘の記憶となつたのである。

× + × × ×

大正四年四月十五日

とにかく入學許可となり嬉しかつた。重荷をおろしたやうにが

つかりして、緊張して居た心はグット緩んでしまつた。こんなに人間の心は變化するものかと獨り驚いた。早速家に歸つたら家人の喜びは豫想以上だつた。

學校には入つたが十一日學監なる人の態度學校の不規律には少からず悲觀した。十一日の授業振など中學出たばかりのせいか驚き且悲しくなつた。授業料を納めなかつたなら止めたのだ、しかし本日T教授の訓話に依つて思ひ直した、學校では校舍を始めすべて九月迄に完成するといふ、思ひ直して自分等は大いに奮起せねばならない、日醫校の將來は自分等の双肩にあるのだ、奮起すべきだ逆境に逢ふに又逆境を以つてして始めて人間になれるのだ。

これが入學八日目の日記である。今日の結果を思ふにつけ當時が忍ばれる、又磯部氏の横暴の後が思はれる。我々は耐へ得るだけは忍んだのである。

學校の內情を知つてからは通學するにも元氣がなく、磯部學監の訓話など聽く時は、その矛盾彼の厚顏を憤り何故かゝる僞教育者の所から奮然離れないかと已の弱きを攻めた。當時解剖室の標本には差押への札が貼られ、新築の細菌學教室は落成はしたが借金のため戶が開かず、病院は二重三重抵當に入りその不仕體は思ふてもゾク〳〵する。

大正五年二月五日

頁報なし。

入學後半喜半憂一日として樂しき日なく、學校を愛して且之を斥け、常に不安の境に陷るなり。十二月十八日の夜、我々四百の青年の半ば勢力を殺ぐは卽ち磯部なる僞教育者山師の存在するがためなり。彼を排斥すべく血判狀作製の際、第三位に押印なせしを記憶す、壯なれども又悲し、而して今肯彼のもとに學ぶの矛盾や如何。

當時私は指定實行委員に擧げられ隔日位に委員會あり、而して多くは委員は磯部に買收され、何の得る所もなかつた。當時余の部間には『强以吉語答双親。何知胸中百憂集』の句を揭げた。

御書狀數々拜見仕り候昨日天谷校長の名に依り退學の通知有之候事件の經過は新聞等にて詳細承知我々父兄としては憂慮に耐ずへ候へ共事斯に至りては已に致し方なし今後の方針を定め一身の安定を期すべく努力すべきは勿論なれども必ず前便の決心は實行せらるべし男子一度指を切つて起つこれに反くが如きこと決してあるべからず兎に角來る二十三日公開演說を聽取致すべく明日出京致すべく候間同日は在宅致すべく候

御身の一身上に就ては常に余は辯護の地位に有り其苦心も一層に候兎に角父上と熟と相談あるべし

兄よりこの書狀を手にして始めて退學されたことを知つた。五月一日以來一晩として滿足に眠つたことがなく、湯に行く暇さへなかつた。晝飯と夕食とを家で食べたことがなく、夜一時二時に歸り朝の七時集合は實に苦しかつた。一日ゆつくり寢たいと提案を出して冷笑の中に否決されたこともあつた。根津神社に集合して磯部氏宅の前を通り旗を立てゝ文部省に押容せ多數の巡査と格鬪したのも、このころであつた

五月十五日

學校を愛する者は退學さるゝなり思へば過去一ヶ年間牛信牛疑を以つて在學し本日退學の運に合ふ而も少しも落膽悲觀なきは勿論むしろ重荷をおろせるの感ありて心地よし入學以來常に學校前途を祈り又危み又憂え實に悲觀せしこともありき就中厭ふべき磯部の下に學ぶの不快思へば本日これにあふ悲しみ毛頭なしなし

唯父母を欺き又憂へしめ之がため心血をしぼりし多額の費用を空しく徒費せしを悲しむのみしかしこの悲痛に遇ふ無形の報酬を得し大なり而して醫學の一般は何事をなすにも必要なればなり

いざ彼校を破壞し盡して磯部を葬りて歸國し野に耕さむただ故山の老母近隣の正直者人共我が嶽醫者として歸るを待つの期待に反するの苦しきあゝこれあるのみ!! 之のみ!!

廢校のただこれのみを願ふなるこあごろの我悲しからめや

夜一時半ごろ王子警察分署から四度目の出頭報告が來た、この當時度々高等係とかいふ薄氣味の惡い刑事が出入した、終には知人のやうになつてしまつた、用もなく冗談を言つたり、頭痛の療法を敎へてくれなどゝ云ひ最後にはいつも『學校の方は如何です』などと要領も得ないことをいつては歸つた、このごろはむやみに警察の干渉が嚴しかつた

七月一日

示達の件

明二日午前六時日本醫專校ノ件ニ關シ本郷本富士警察署ヘ出頭可有之候但出頭ノ際ハ此書面持參アリタシ

もうこんな紙片は反應がなくなつた、

七月四日の日記には『五人の尊ぶべき救濟主見ゆ』とあるこの日秋先生他五先生が始めて見へられ愈前途に光を握り學校側の策に掛らぬやうにと萬事を五先生に依賴して大部分の學生は歸國し自分は縣人會主任を拜命して本部と歸國者との連絡係として殘つた主任として歸國者への通信は百通に近かつた。その一通を記して見る

八月十二日　S君より

拜啓度々通信被下感謝に不堪候君にも御祖父御逝去の由御愁傷の至りに候

扨て兄よりの御依賴早速承知致されば相ならず候へ共今迄何も申さず居り候しが小春今春前橋に養子に參り候も此度の學校問題のために面目なきこと有之目下里に歸り居り次第に候樣にて日々兩家に於て人を介して交渉中にて未だ何とも形が附かず小家生只今を留守に致し候ては困却致すことに御座候いづれ今月形中にはが附く事と思ひ居り候……の度の件は小生一身上の事にて尙先日の入學保證金とても先方よりは無論出して呉れ申さず實家にては怒りきつた實兄は出して呉れず止むを得ず義兄に借用致し納附せし樣の次第にて候この問題の解決せざる以上は學校とても入學出來得るや否や疑問に候此分にては養子は離緣となり實家に於ては非常に立腹にて學校も六つか敷樣に見受け申し候而して義　に向一ヶ年ん借用致して新たに入學致すやうに獨り定め居り候間幾分望をつなぎ居り候……（下略）

事件の裏面にはこんな悲劇もあつた私は祖父が死し日を經ず又一

人の叔父が死んだ。しかし主任としての事務もあり直ぐに歸れなかつた度。實家からは半ケ年振つ歸國を迫られた。母からは事件のため身體を惡くしたらう、早く家に歸つて靜養せよ等と、涙の出るやうな手紙も來た、父が上京の折私の瘠せたのを心配して家に語つたので、弟や妹は毎日歸國を迫つて來た。度々言ひわけの手紙を送つた。

やがて萬事をN君に依托して。歸國した學校問題に關しては家人は豫想以上冷靜で、私の健康狀態を見て母は喜んだ、父も太つたと言つた。

九月十一日　開校式

今日よりは新しく生くと誓ひてし已が心のあらたまるなり

今日の日を忘れずありて永久にかたき心をもちて卒へなむ

こんな歌が手帳の隅に書いてある。唯この日の心地を忠實に語つて居るから記して見た。そしてこの日は向島サツポロビ！ル園に學生懇親會があり、皆新しい生活に生きんとし新校の前途を祝した。駒から牛へ乘り移る迄にこんな色々の歷史ある紛擾の裏面を私記として書いた。當時の熱は何處かへ去つて悉く之を淡化し、美化してしまつた。そして吾々は遲くとも確い牛の歩みを續けつゝあるのだ』（五、十一、六）

吾等の歩みと現代人士の胃の腑

高澤千里

自我と、自由と向上と、が束縛と、制止とで、沒個性化せられた、我々は慘めな捕虜として、いつまでも、冷靜と、沈默とを、守つて居つては價値ある我々の、前途に、大きい暗影を齎らすのを、自覺した時に、我々の憤怒は、單なる憤怒と言ふよりも、義憤となり、根底よりの改革と、刷新との必要上、飽くまで協力して、彼れ寄生虫を、撲滅すると云ふ堅實なる步調で、終いに武裝した。

今更ながら、我々の古巢乃至は、遺骸である處を、痛罵し毒矢を發しても、詮なき事だが、過去の戰爭史とし、且つは滔たる風俗生活に、停滯無爲にて、肉的、動的、安逸を追求して誇り顏なる、相當の地位と名譽とある人の鼻柱を碎き、彼れ等の胃の腑を御目にかけたい。

折角、教育事業と云ふ名を藉りて、見事な手段で、法を潜つたり、約條に背いたり、學生を胡覽化して、私腹を肥し、破鍋にとぢ蓋の樣な事をやつたつて、ついには、顧く時がくる、頽壞の秋も必ずやつてくる事を知らなかつたのか。

我々は、不義不理を學び度くない、春刻價千金、最も貴重な時に、かゝる至極危險な、そして怠慢な人のもとに、教化せらるゝ事を欲しない。

もう彼れに對して、あらゆる要求も、意志も少しの効果を認めなかつた時、我々は丁度初夏の五月一日、上野の山も、日比谷の森も、新しい、そして香ばしい、芽をふき出す時、不忍池の水が溫みかけた時、斷乎として從來屢々なした樣な、宛然飯上の蠅を拂ふ如き、常套手段をやめて、最も鋭き劍を手にし、胃をつけた。

タゴールの『汝捨てなば得べし』だ吾々は、決して二度と學校

に踵を返さない、矢のつきて、一敗地に塗れるまで、戰ふと云ふ決心で始まつた。

學生保證人と、學生と、これが一團となり、社會一部の同情者と、一隊を成して行進した。

我々は我々の立脚點を明にし、且つは日本醫專の主權者である可き彼れ悖德漢を葬る可く、隨分社會に向つて咆哮した。この苦心中にあつても、時に我々の步調に少數の不具者を出したけれど終始一貫して進軍した、この精鋭な、猛夏雄の行動と、奮進とを誰れか驚きの目を以て睛ぬ者はなかろう。

されど、我々の心の叫と、やる瀨なき涙の痕と、指の瘡痕とは未來永劫の記念となる可き、價値あるものである、吾々は終いに生命の復興となり、再びこの城に依り心靜に學窓にあり得るは決して偶然ではない、吾々の救濟者であり、親父であり、慈母である所の五名士と佐藤先生とは、實に暗夜の光である。

かくしたる、この生混唯一の行動に對して、少なくも社會に地位と名譽とある人が隨分苛酷で、只智の人にして情の人でなく、表裏の著しき差異あるを知つた。

彼等の胃の腑を見よ、もう腐敗に腐敗して、惡臭を放つて殆んど其の用を辨ぜぬ、それ故に我々があの樣に涙を呑んで事の次第を闡明しても、一向嚥下することが出來ん、まして消化することは尙ほ出來んのだ。物的顯榮にのみ憧れてゐる彼等は、正義の聲さへ聞こえん可憐者だ。

且又彼等の目玉は凍つてゐる、唯物的繁實文明の中に、徒に佇立して空しく顯榮にのみ眩み、權門に媚び、巳が官位の向上をのみ望みつゝある彼等は、彼等の眼前に教育界のかゝる缺陷と、矛盾との炎々たる炬火ありしを見えざりしか。

國家に一段の價値と、權威とを附與する現教育界の改善をさへ衷心なすの意志なきを見ても、俗惡層淺な彼等の胃の腑が、那邊より滋養を受けつゝあるか推察する時、我々は熱心に、且つ深刻に、醜い穢い、現代人士の胃の腑に、呪と、嘲とをもつて、土砂を投げこんでやるより外に、道のないのを悲む。(五、一〇、三〇)

會報

謝恩辭

先生の我等學生を董陶せられしこと茲に年あり顧みれば我等が日本醫學專門學校を連袂退校して東京醫學講習所に入學するに際して先生も相携へて同校を辭し本所に醫化學の講義を擔當せられぬ、學生一同は之を德とし深甚なる感謝を捧ぐる者なり。然るに今や先生職を辭して去らる、訣別悲哀はさること乍ら我等は先生の將來を祝福して止まざるなり、此の銀盃、赤誠を以て聊か舊恩に謝せんとする

に踵を返さない、矢のつきて、一敗地に塗れるまで、戰ふと云ふ決心で始まつた。

學生保證人と、學生と、これが一團となり、社會一部の同情者と、一隊を成して行進した。

我々は我々の立脚點を明にし、且つは日本醫專の主權者である可き彼れ悖德漢を葬る可く、隨分社會に向つて咆哮した。この苦心中にあつても、時に我々の步調に少數の不具者を出したけれど終始一貫して進軍した、この精鋭な、猛夏雄の行動と、奮進とを誰れか驚きの目を以て睛ぬ者はなかろう。

されど、我々の心の叫と、やる瀨なき涙の痕と、指の瘡痕とは未來永劫の記念となる可き、價値あるものである、吾々は終いに生命の復興となり、再びこの城に依り心靜に學窓にあり得るは決して偶然ではない、吾々の救濟者であり、親父であり、慈母である所の五名士と佐藤先生とは、實に暗夜の光である。

かくしたる、この生混唯一の行動に對して、少なくも社會に地位と名譽とある人が隨分苛酷で、只智の人にして情の人でなく、表裏の著しき差異あるを知つた。

彼等の胃の腑を見よ、もう腐敗に腐敗して、惡臭を放つて殆んど其の用を辨ぜぬ、それ故に我々があの樣に涙を呑んで事の次第を闡明しても、一向嚥下することが出來ん、まして消化することは尙ほ出來んのだ。物的顯榮にのみ憧れてゐる彼等は、正義の聲さへ聞こえん可憐者だ。

且又彼等の目玉は凍つてゐる、唯物的繁實文明の中に、徒に佇立して空しく顯榮にのみ眩み、權門に媚び、巳が官位の向上をのみ望みつゝある彼等は、彼等の眼前に教育界のかゝる缺陷と、矛盾との炎々たる炬火ありしを見えざりしか。

國家に一段の價値と、權威とを附與する現教育界の改善をさへ衷心なすの意志なきを見ても、俗惡層淺な彼等の胃の腑が、那邊より滋養を受けつゝあるか推察する時、我々は熱心に、且つ深刻に、醜い穢い、現代人士の胃の腑に、呪と、嘲とをもつて、土砂を投げこんでやるより外に、道のないのを悲む。(五、一〇、三〇)

會報

謝恩辭

先生の我等學生を董陶せられしこと茲に年あり顧みれば我等が日本醫學專門學校を連袂退校して東京醫學講習所に入學するに際して先生も相携へて同校を辭し本所に醫化學の講義を擔當せられぬ、學生一同は之を德とし深甚なる感謝を捧ぐる者なり。然るに今や先生職を辭して去らる、訣別悲哀はさること乍ら我等は先生の將來を祝福して止まざるなり、此の銀盃、赤誠を以て聊か舊恩に謝せんとする

微意のみ、幸に受納あらんことを希ふ。

大正五年十二月

東京醫學講習所學生會員一同

櫻木清耳先生

入營者諸君を送る

今日、こゝに入營者諸君の告別式を擧ぐるにあたり全校學生四百名に代り送別の辭を述ぶ。

顧みれば五月一日以來約半年にわたる正義の戰に於て吾等は血に誓ひ義に集りて、その親しみは骨肉にも勝り、或は共に叫び或は共に泣き、進退、常に清き陣營を維持して亂るゝ所なかりき。

幸にして五名士並びにその他の同情により、秋雁聲高く金風地こ滿つるの候、わが東京醫學講習所は開設せられ、空しく半生の志望を放棄して社會に漂泊せんとせし幾多の青年ははからずも復活の期を得たり、隅田河畔の夕、月影何ぞ清かりし、親寞、如何に歡樂極りなかりしぞ。

爾後、自治を標望し、香しき校風に憧れ、益々將來發展の緒に就かんとする時にあたり、この光榮ある自治の堅城よりして十餘名の勇士を送らんとす、送るる者、送らるゝ者、共に門前に相顧みて感慨無量、轉た秋風の蕭殺たるを覺ゆるなり。

されど陸に、はた海に行く者、是れすべて國家の干城たり、今や世界戰亂の中にありて吾人の安んじて勉學に就り得るは卿等の力によらずして何ぞ、されば吾人は謹んで卿等を送らむ。

行けよ、さらば、而して歸る日の幸多きを待つと共に、殘る吾等は極力郷等が遺志を繼ぎて大成に努力せん。

萬里の波濤、風荒む日、鷄林八道、積雪に埋もるゝの夜、只諸君の健康と自重とを祈りて息まざるなり、この一言を以て送別の辭となす。

大正五年十一月八日

入營者姓名

佐倉第五十七聯隊第十一中隊　小谷無違（舊）
朝鮮北青第七十四聯隊第十中隊　成田義英（四）
朝鮮咸鏡北道會寧第七十三聯隊第十中隊　丸山郁雄（四）
大分歩兵第七十二聯隊第四中隊（志願兵）　波津久統重（三）
熊本野砲第六聯隊第六中隊　今藤鑾（二）
宇都宮歩兵第六十六聯隊第四中隊　西山晴雄（三）
善通寺輜重兵第十一大隊第一中隊第五班　緒方晴逸（三）
旭川第八聯隊第三大隊第一中隊第一班　增田貢（二）
未詳　春日龜吉（三）
熊本第六師團輜重兵第六大隊第二中隊第三勤務班　菊野景光（二）
水戸第二聯隊第十二中隊　高田好之助（二）
山形歩兵第三十二聯隊第二中隊（志願兵）　齊藤健吉（二）
近衛歩兵第三聯隊第四中隊　林實（一）
水戸第二聯隊第十二中隊　柴孝（一）
廣島歩兵第十一聯隊第三中隊第三班　山本照太郎（一）

計　十五名

會計報告

大正五年拾壹月拾五日調前日本醫學專門學校
學生團會計決算

收入之部

一金壹百參拾九圓貳〇貳錢五厘也
大正五年五月拾七日前各學年會計係ヨリ引受金額
一金貳千四百五拾圓也
是ハ大正五年九月拾五日迄入團費總額
一金拾七圓七拾六錢五厘也
各學年會計決算殘金
收入合計金貳千七百五拾七圓貳錢也

支出之部

一金貳千四百五拾貳圓貳拾六錢也

殘金之部

一金參百〇四圓七拾六錢也
內貸出金貳百八拾四圓七拾六錢也
現金貳拾圓也
外ニ秋氏ヨリノ借金壹百五拾圓也
之ハ學生會費ヨリ立替返濟ノ件承認ヲ得タリ

右之通リ相違御座無ク候

會計係長（中本富太郎）

創立委員居邸

麻布靈南坂　寺尾亨
小石川區指ヶ谷一四七　福本誠
同　關口臺町　大道社　大角桂巖
麹町區中六番町四　高橋琢也
本郷區千駄木町一七一　秋虎太郎

＊　＊　＊　＊　＊

協賛員名簿に誤りあり左に訂正す

林學博士　白澤保美氏
神社局長　塚本清治氏
土木局長　小林一太氏

編輯の後に

生等菲才紀念號の發行に際し少なからぬ努力をなせるも遂に短時日と歳末の活版所多忙の爲めとに因り漸く如斯き雜誌を諸君の前に提供することゝなりぬ。奮鬪の半年を回顧して好紀念ともならば望外の幸にして、最後に記錄係諸氏の勞を多とし紙面の都合上峰野君の「日立鑛山」及び小川豐丸君の獨文「我等の祝賀」を次號に讓るべく余儀なかりしを謝す。

編輯部同人

大正五年十二月二十三日印刷
大正五年十二月二十八日發行（非賣品）

編輯人　東京市本郷區森川町一番地　上村透

發行人　東京市神田區東紅梅町二番地　宇津木斌

印刷人　東京市芝區兼房町十五番地　一噌定次郎

東京市牛込區神樂町二丁目廿六番地
發行所　東醫學生會

復刻版発刊について

東京医科大学は、本年（一九九六）創立八〇周年を迎えた。維持会では、その記念事業として「奮闘之半年」の復刻版を発刊した。これを機に温故知新となれば喜ばしいことである。

本書は、本学の草創の苦悩と苦闘を物語る血涙の創立史で、血署連判状と共に本学の宝である。

大正五年九月東京医学講習所が開設され、その十二月に本書が発刊されているが、現在その一冊が本学資料室に保管されている。外観はひどく手垢の附いた古ぼけた、今にも崩れそうであるが、崇高で清潔感のある一冊である。

その後、昭和三年（一九二八）附属病院入院棟全部及び基礎医学教室の大半を焼失した。その復興後援運動の一助として再版されたものも現存は二冊である。このように本学存亡危機の難局に直面したときに発刊されたことは、他に類のない誕生の歴史と伝統が脈々と生き続けていることである。

二十一世紀に向かって、変革・転換期であると今日的に提言され、他方、情報化に基づいて判断・行動の正確性が求められる時代の激変のなかで、本学が過去の歴史の上に立ち大飛躍発展しなければならない時の発刊は、前回の再版発行に比して勝るとも劣らない有意義なことと思う。

幸いにも本年を記念して、本学が二十一世紀に向かって生存を賭けての「将来構想審議会」が設けられ、白熱した議論が交わされている。本学創立百周年には、その構想が実現、完成できることを冀うものであるが、将来に対する計画はもとより、基本に本学の歴史に参加することが、東医関係者にとって最も栄光であることを知るべきである。

終わりに本書復刻版発刊にご厚意を寄せられた永井理事長、渋谷学長に敬意を表する次第である。

平成八年十一月十六日

東京医科大学維持会